

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

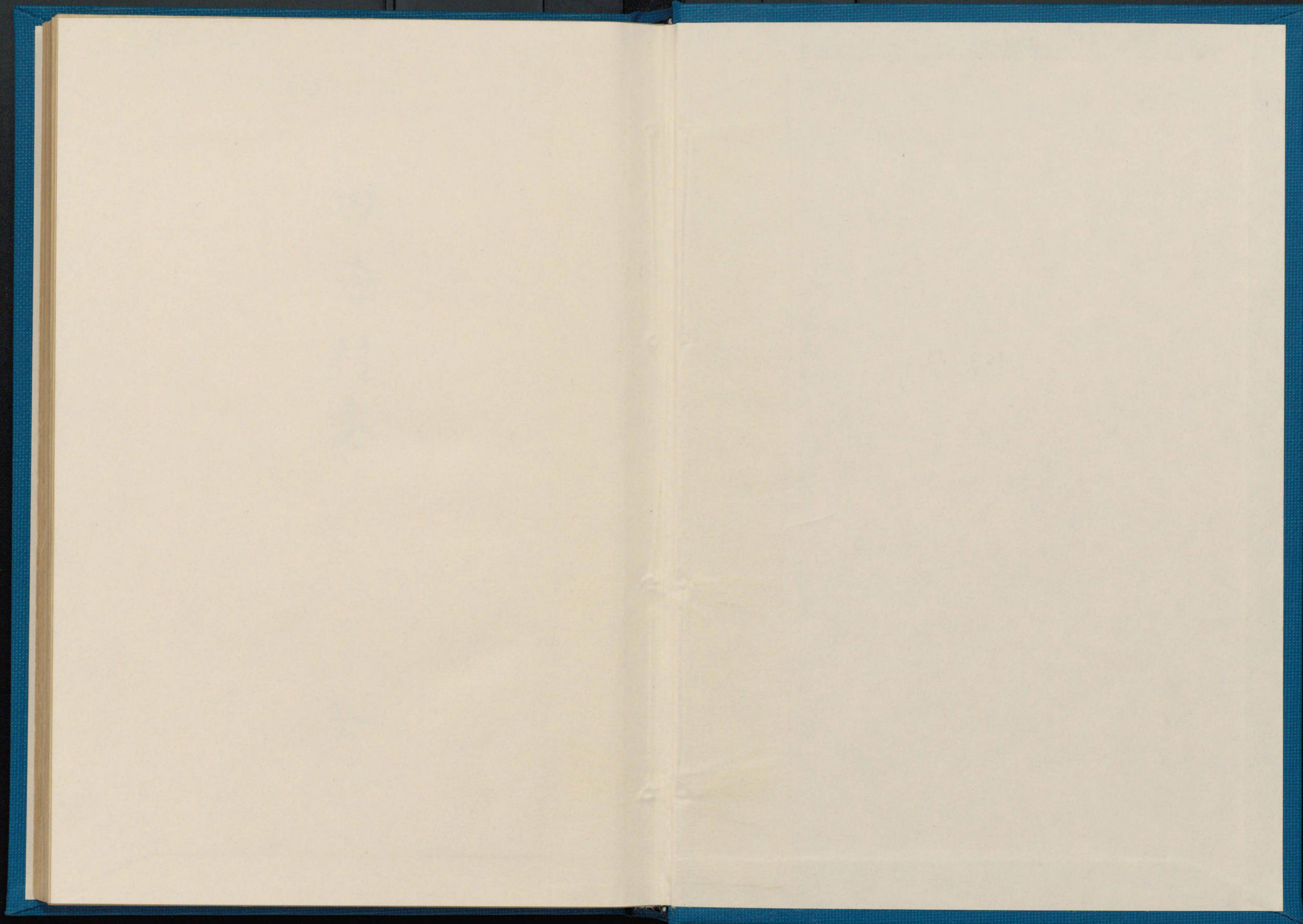


© Kodak, 2007 TM: Kodak

18  
32

618-32  
1200501536940







工6E-44

618-32



田  
漆  
村  
志

全





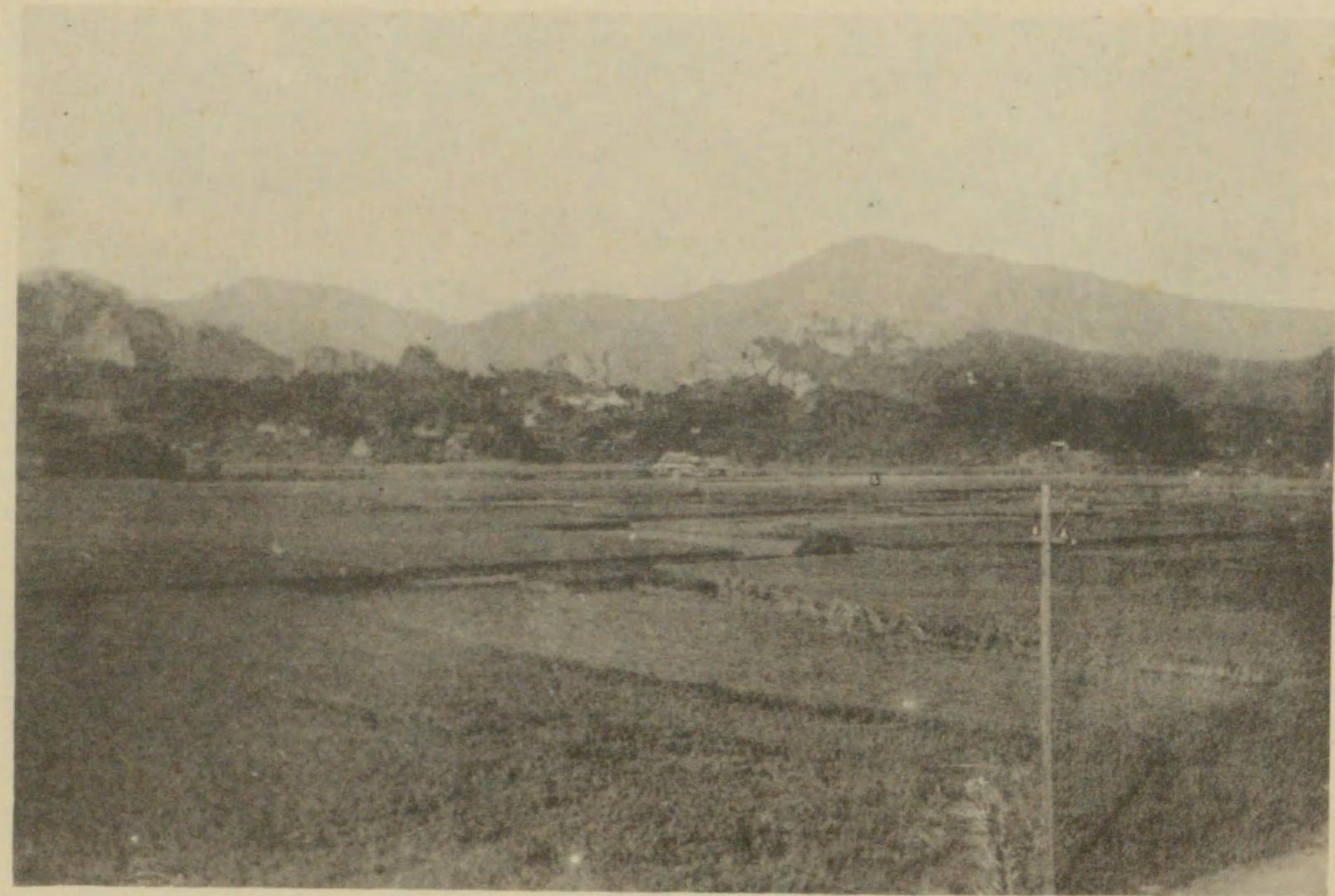
澹古知新

大分知事車阿部嘉七

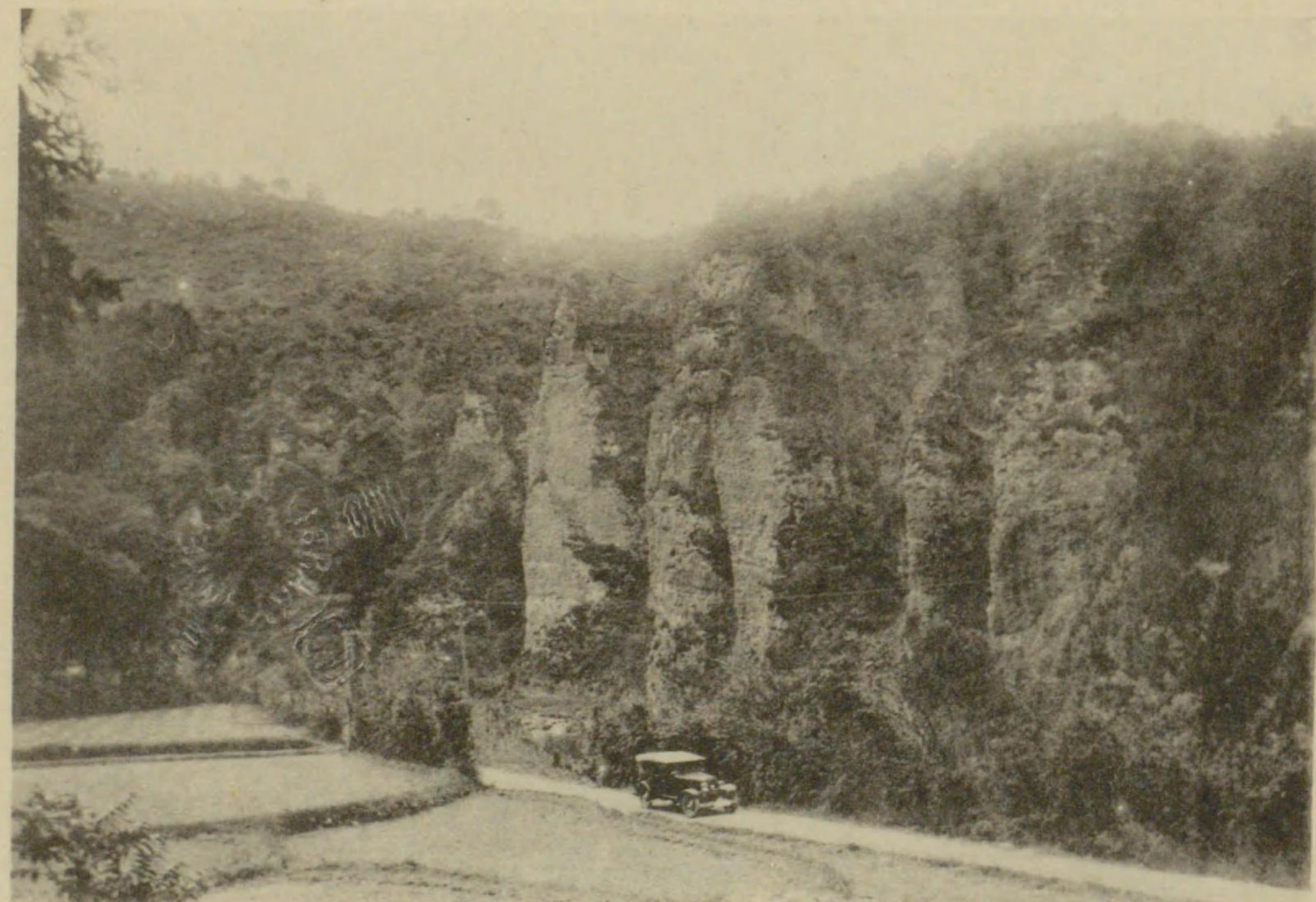
田森林

全





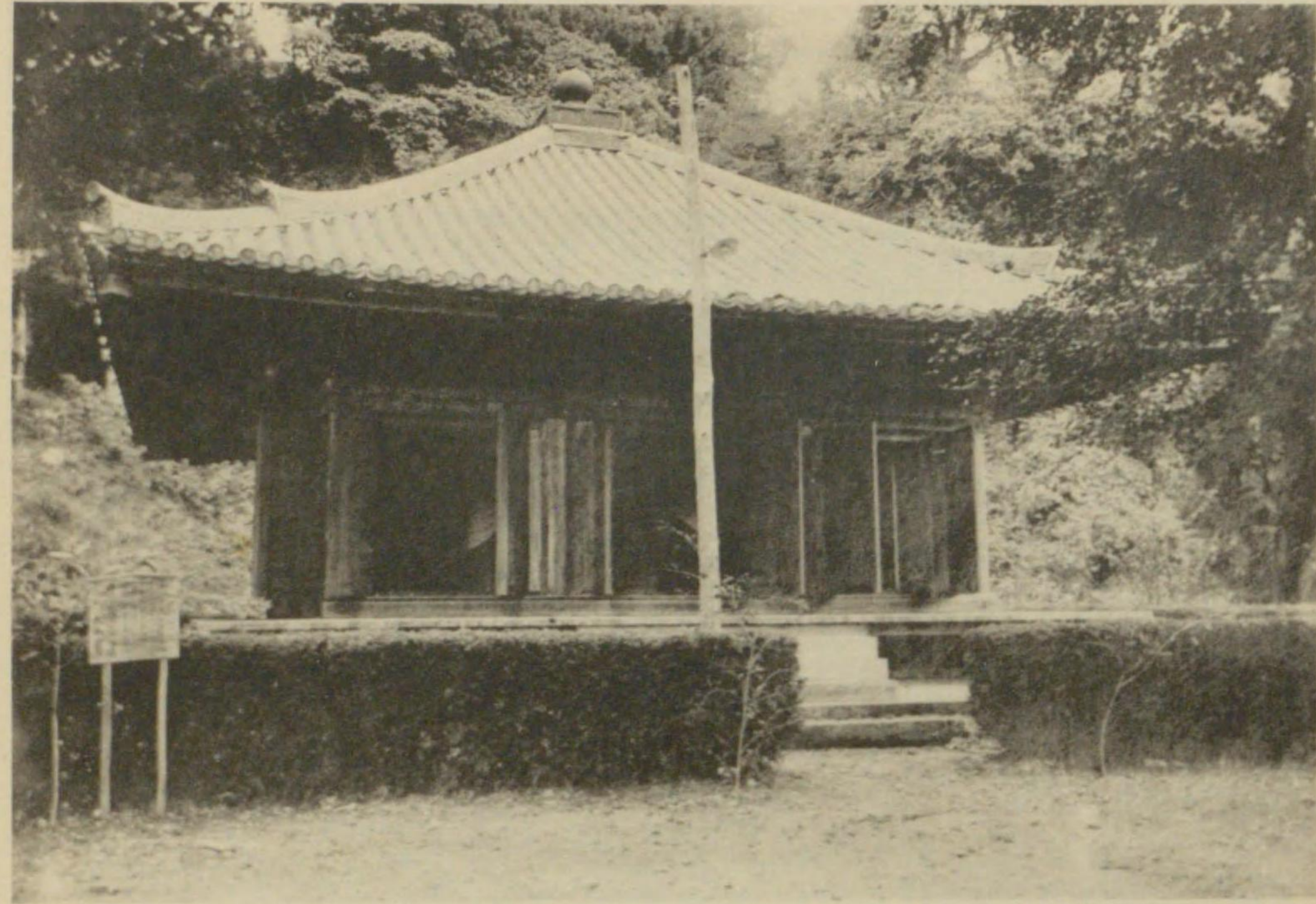
田染平野の大観



鍋山耶馬の立岩







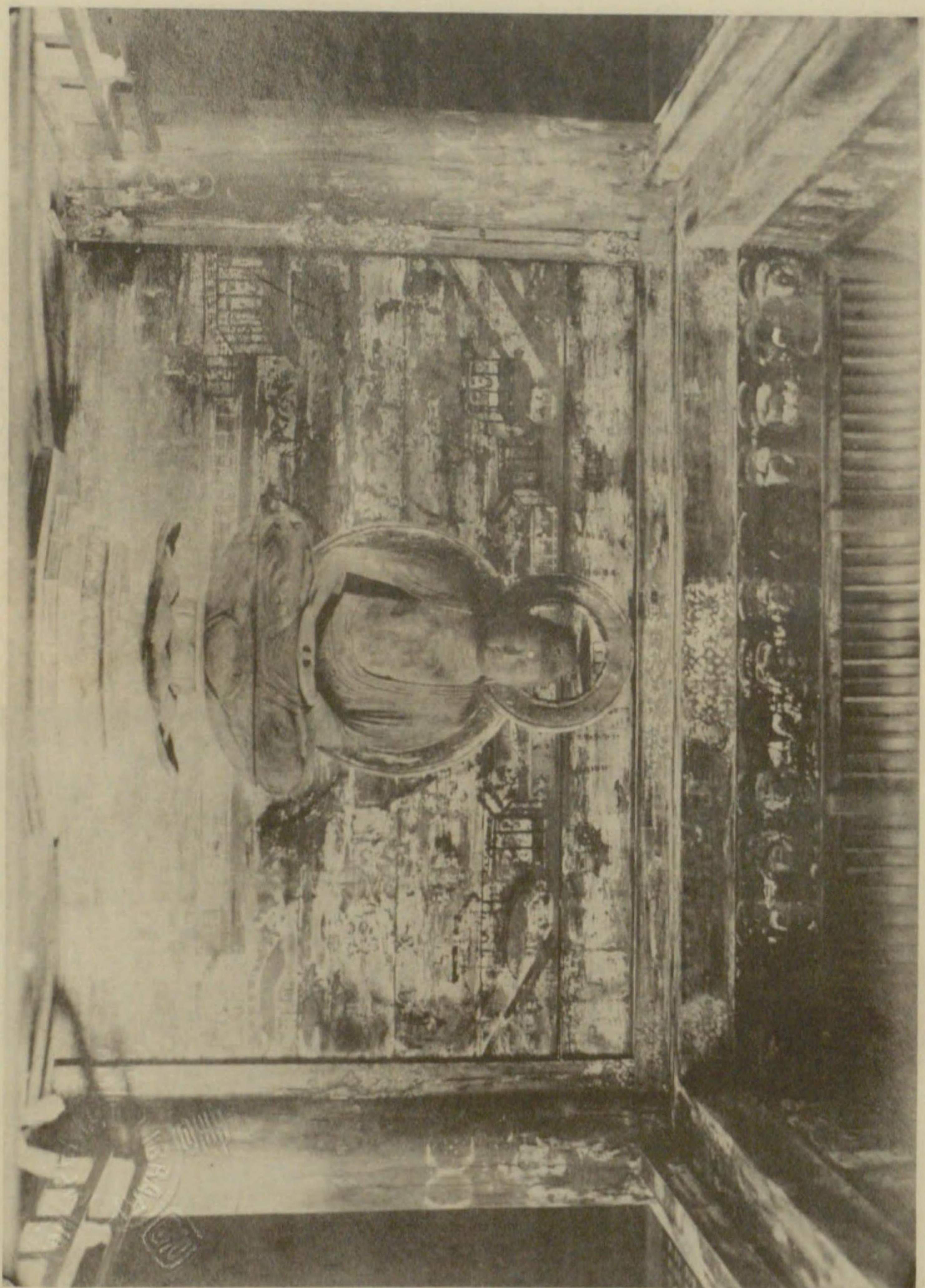
堂 大 路



堂 大 木 眞







大 路 堂 内 陣 壁 の 畫







王天四及來如の六丈堂大木眞



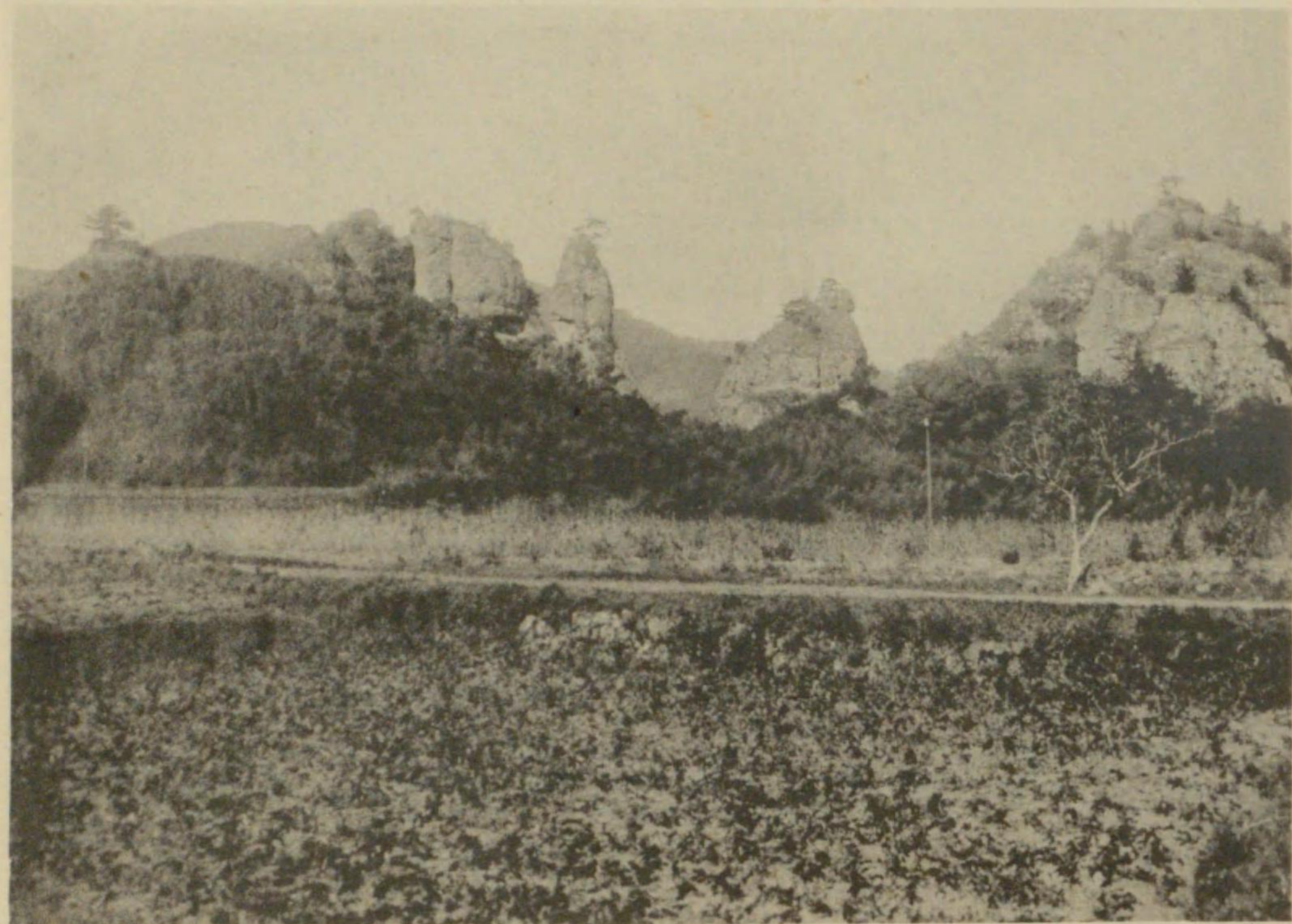
王明德威大同



王明動不同







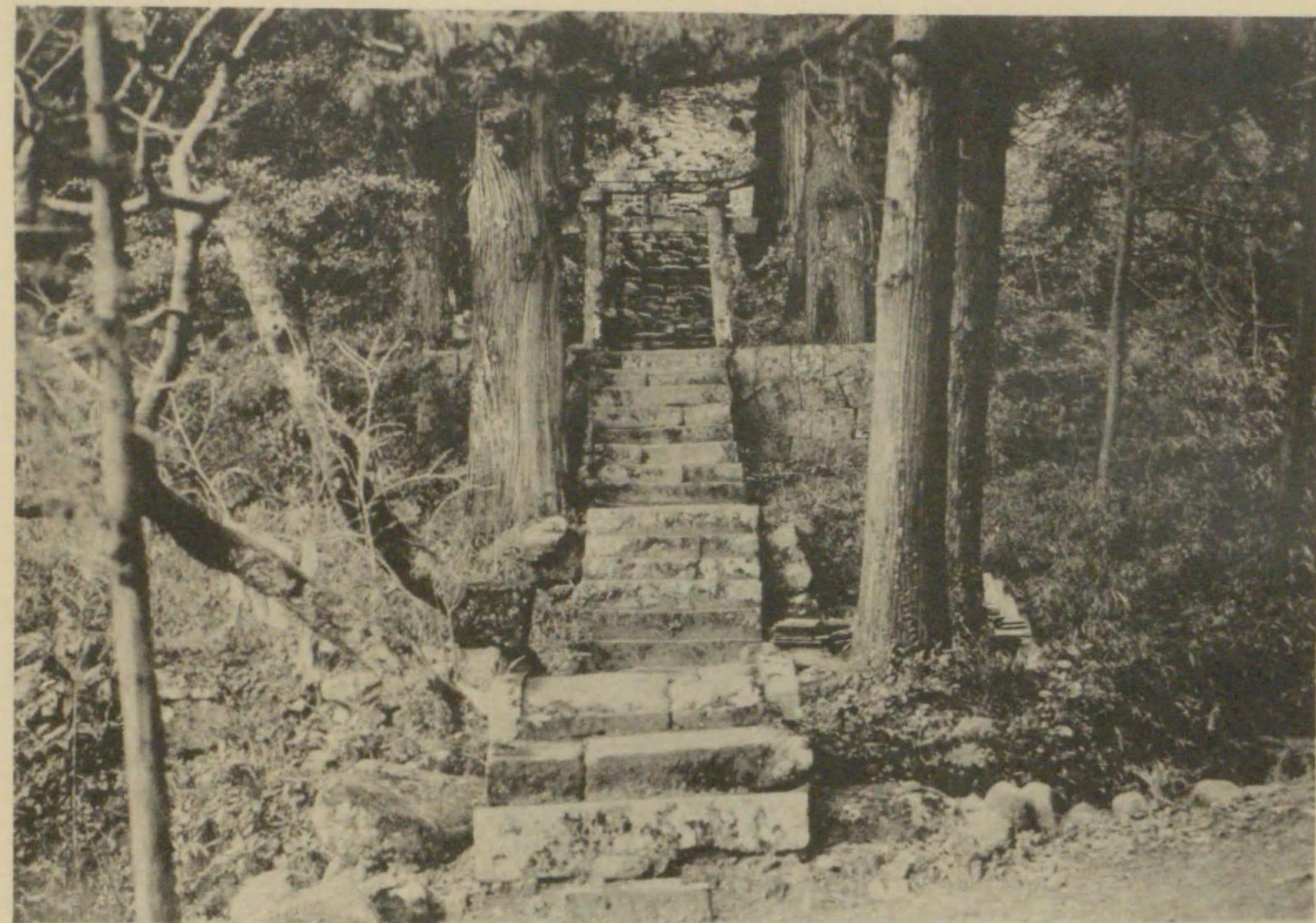
岩日朝の戸間



(む望りよ崎小) 岩の音観日夕同







熊野社の磴道



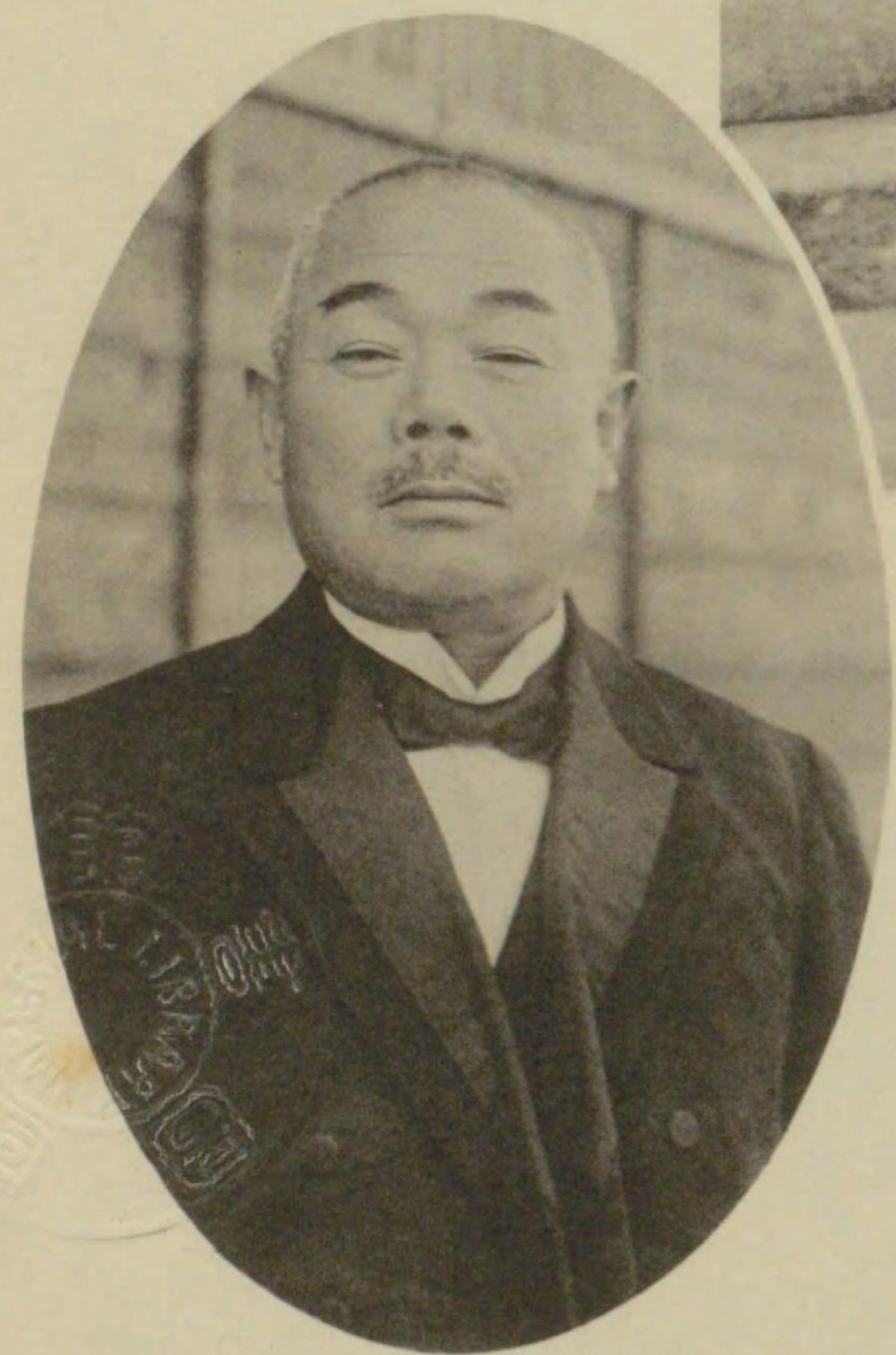
熊野社の石佛







大分縣知事阿部嘉七氏



氏作儀邊渡 長村染田







他其員場役村染田

給書 村全 米書 蠶業 駐在 農校 助村 收全 書  
 納 米 書 業 在 會 村 入  
 徴 檢 技 巡 技 入  
 收 査 術 査 員 長 役 長 役 記  
 仕 記 係 記 員 員 査 後 列 前 列  
 金安毛小安渡小岩同加土松渡後森伊向  
 高藤利關岡邊柳奈尾右藤谷洞邊藤田美右  
 廣八常英 與 萬 治 儀 正 長 喜  
 義郎雄滿雄實保武 藏忠郎作勝十市



員議會村染田

全全全全全 村 全全全 村 村 全 村  
 會 議 員 會 議 員 會 議 員  
 後 列 同 右 ヨリ  
 藤渡毛後都後 後 財財吉渡安河 前 列 向 右 ヨリ  
 本邊利藤甲藤 藤 前 前 田 邊 藤 野 野 野 野  
 策千福善治 薰 機 次 克 儀 太 太 太 太  
 藏吉治六郎平 市 郎 已 晋 作 勝 郎



員委查調志村染田

全全全委 史 委 委 調  
 員 員 員 員 員 員  
 後 列 同 右 ヨリ  
 安河渡畑 豐 渡 渡 財 前 列 向 右 ヨリ  
 藤野邊尾 田 邊 邊 前 前  
 丈要義 田 左 儀 楫 楫  
 次 藏 美 實 清 太 作 一  
 郎 藏 美 實 清 太 作 一



## 叙

田染の名、史典に現はるゝや久し、西陲單り宇佐文化の流芳餘韻を存するもの國東半島あるのみ。而して我が郷風に其の中核たり。政府遍く王朝藝術の遺跡を搜訪するに當り、本村内に於て、國寶竝に特別保護建造物を指定せられたる、亦偶然に非ず。某の山某の水、何れか當年文化の遺影ならざらむ。予史乘を閲し、將た故老に質して、稔聞熟知すること此に年あり。而も未だ之を勸するの舉なきを憾こす。今乏を本村長に承くるに當り、其の永く閑事業視す可らざるを痛感し、考古の士豊田清氏に囑して、専ら史料の物色に努め、又前田多三郎



氏を煩はして、編纂に著手し、茲に脱稿を告ぐ。受けて之を讀むに、編次宜しきに適ひ、要を記するに於て、肯綮に中れり。庶幾くば、吾が郷宿年の缺典を補ふべし。茲に一言を述べて叙す。

昭和六年辛未孟夏

田染村長 渡邊儀作

### 卷頭辭

西叡の山、崔萃たるの邊、泉甘うして地肥えたり、稱して田染と曰ふ。蓋し山峽の盆地、境平曠なり。水垢田の水垢を謂ふ滙して、土質膏腴なるの謂ひか。中古宇佐八幡宮の神領たり、又六郷満山發祥の地たり。靈蹤遍地、佛教藝術の淵叢寶庫として、其の名夙に江湖に著聞す。加ふるに建久鎌府以還、大友氏の支族重臣、累葉此の地に據り、史蹟の饒富なる、他に多く其の比を見ざるなり。今にして之を存録するに非れば、恐らくは貴重の史料、長へに湮晦に歸せむことを。渡邊村長之を憾とするや久しかりき。則ち余をして敢て撰述の任に當らしむ。素よ



り識淺く慮短なり。唯だ懇囑の責重し、勉強して事に従ひ、搜訪考證、四閱月にして稿を脱す。徐ろに成稿を閲するに、蕪雜眞に慙づべしと雖、要を撮り實を記するに於ては、滿身の努力を傾注せり。亦以て斯の史的重價値を有する田染村の眞面目を、後昆に傳ふるに足らむか。茲に來由を攄べて、卷頭に辯ず。

昭和六年六月

禾刀 前田多三郎

## 凡例

- 一、村志の体記事叙述、凡て紀傳の式様に依りて、一事一章に結束したるを以て、歴年の順序に依るを得ず。故に之を見るに便するが爲め、卷末特に村志年表を附せり。
- 一、史實諸書異同あり、正確の史料あるものは、其の的確と信するものを録し、疑はしきものは、兩者併せ録す。間々私見を加へたるものあり、以て後考に便す。
- 一、人物の名義、間々字面を異にするものあり、疑はしきものは兩者併せ存す。
- 一、史傳の体、通例人物に敬稱を附せざる習ひなり。故に事皇朝に關する以外は、故人なると否とを問はず、一切の敬稱を附せず、讀者之を諒せよ。
- 一、度量衡は、一切舊制に據る。山岳高距等、間々メートル制を用ひたるものあり。



# 田染村志

## 目次

第一章 總說	一
第一節 位置 面積 區劃 人口	一
第二節 地勢	二
第三節 氣候	三
第二章 田染郷沿革	四
第三章 政治	六
第一節 奈良朝以降の概説	六
第二節 村政機關	三
村長 助役 收入役 村會議員 區長 神職	
附 村選出郡會議員 村出身縣會議員	



第四章 財政・經濟……………四五

第一節 古今田數對照……………四五

第二節 村財政……………四九

第三節 徳川幕府の節儉令……………五〇

第四節 舊田染組村勢……………五四

第五章 交通・通信……………五五

第一節 高田港道……………五五

第二節 路高田道路……………五五

第三節 立石道路……………五七

第四節 郵便局……………五九

第六章 産業……………六〇

第一節 農業……………六〇

一 水利

二 築堤沿革

第二節 島原藩農政……………六三

第三節 島原藩租法……………七一

第四節 現代農業……………七六

一 耕地整理

二 村農會

三 農事小組合

四 養蠶組合

五 農産物計數

第五節 林業……………七九

一 舊藩林政

イ 御林山

ロ 御免許山

ハ 請山

ニ 四壁

二 山林保護政策

三 現在の村林業



第六節 其他の産業…………… 六六

第七章 教育…………… 六八

第一節 小學校…………… 六八

第二節 田染農業補習學校…………… 九五

第三節 田染青年訓練所…………… 九五

第四節 青年會…………… 九六

第五節 處女會…………… 九六

第八章 兵事…………… 九七

第一節 各步兵聯隊創設…………… 九六

第二節 熊本鎮臺並ニ第六師團戰歴…………… 九八

第三節 步兵第四十七聯隊戰歴…………… 九八

第四節 戰病死軍人名簿…………… 一〇一

第五節 徴兵検査成績…………… 一〇一

第六節 帝國在郷軍人會田染村分會…………… 一〇二

第九章 神社…………… 一〇三

第一節 村社高良社…………… 一〇五

第二節 村社愛宕社…………… 一〇七

第三節 郷社八幡社…………… 一〇七

第四節 村社二宮八幡社…………… 一〇七

第五節 村社猛島社…………… 一〇八

第六節 村社熊野社…………… 一〇八

第七節 村社三ノ宮八幡社…………… 一〇九

第八節 村社北野社…………… 一〇九

第九節 村社大年社…………… 一〇九

第十節 村社富貴社…………… 一〇九

第十一節 無格社大社…………… 一〇九

第十二節 無格社熊野神社…………… 一〇九

第十三節 無格社山神社…………… 一〇九

第十四節 列外神社…………… 一〇九



第十章 寺院

第一節	六郷満山	一三八
第二節	神佛習合	一四六
第三節	六郷満山載籍	一四八
第四節	西叡山高山寺	一五〇
第五節	日野山岩脇寺	一五二
第六節	寶珠山龍泉寺	一五三
第七節	光隆山延壽寺	一五四
第八節	寶池山安養寺	一五七
第九節	普光山大應寺	一五八
第十節	大久保山極樂寺	一五九
第十一節	馬城山傳乘寺	一六〇
第十二節	今熊山胎藏寺	一六一
第十三節	稻積山慈恩寺	一六三
第十四節	清立山西生寺	一六四

第十五節	龍器山金福寺	一六五
第十六節	吉祥山願正寺	一六五
第十七節	蓮華山富貴寺	一六六
第十八節	寺跡竝に堂宇	一六九

第十一章 衛生・消防

第十二章	官公署	一八五
------	-----	-----

田染村役場 田染郵便局 巡查駐在所

第十三章	會社・組合	一八六
------	-------	-----

田染水力電氣株式會社 西國東郡養蠶同業組合田染支部  
上野信用組合 勤勉貯蓄組合

第十四章	名所舊蹟	一八七
------	------	-----

第一節	田染盆地の大觀	一八七
第二節	田染耶馬	一八九
第三節	田染八景	一九〇



第四節	温壽泉	一九一
第五節	真木大堂	一九二
第六節	路大堂附大栢樹の傳説	一九三
第七節	西叡山附高山寺の焼佛	一九四
第八節	烏帽子嶽の城趾	一九五
第九節	小崎城趾	一九六
第十節	牧城趾	一九六
第十一節	荒平薬師堂趾	一九七
第十二節	池部年ノ神社	一九七
第十三節	御鷹岩	一九八
第十四節	鍋山八幡の神話	一九九
第十五節	上野市場	一九九
第十六節	熊野社の磴道附赤鬼の傳説	二〇〇
第十七節	鎧淵の悲劇	二〇一
第十八節	菊山領住民なし	二〇一

第十九節	穴井戸の鶏	二〇一
第二十節	鐘 淵	二〇一
第二一節	岩脇權現の狐狸石	二〇三
第二二節	庚申松	二〇四
第二三節	石ノ玉垣城趾	二〇四
第二四節	朝日夕日の觀音	二〇五
第二五節	釣鐘巖の阿彌陀	二〇五
第二六節	鈴ヶ谷の狐と幼僧	二〇六
第二七節	愛宕宮の雩祭	二〇六
第二八節	塔尾寺趾の四面畫像碑	二〇七
第二九節	大久保城趾	二〇七
第三十節	名工正宗の爐跡	二〇七

第十五章

第一節	佛教藝術	二〇八
第一節	磨崖石佛	二〇九
第二節	國寶竝に特別保護建造物	二一三



一路大堂

二 真木大堂

第三節

金石工藝銘有

一 富貴寺碑

二 板牌

三 懸佛

四 國東塔

五 寶篋印塔

六 國東五輪

七 五輪塔

八 石殿

九 角塔

第十六章 郷土詞藻

第一節

田染八景漢詩

第二節

手毬歌(一一二)

第十七章 人物と事業

第三節

新童謡(一一三)

第十七章

人物と事業

第一節

圓龜禪師

第二節

豊山正義禪師

第三節

安藤助三郎 後藤四良右衛門

第四節

渡部重之

第五節

河野通達

第六節

豊田九阜

第七節

渡邊眞澄

第八節

吉田建士

第九節

河野通卿

第十節

二宮雄策

第十一節

渡邊顯正

第十八章 旌表



第十九章 行事・風俗……………二五八

第一節 正月行事……………二五八

第二節 宇佐行幸會……………二六〇

第三節 三社八幡宮大祭……………二六一

第四節 田染八幡宮零祭……………二六三

第五節 俳諧笠著の神事……………二六四

第六節 奉納演伎興行……………二六六

第七節 賭博と石打……………二六八

第八節 武射の神事……………二六九

第九節 峰入神事……………二七〇

田染村志年表……………二七三

田染村志目次(終)

田染村志

第一章 總說

第一節 位置・面積・區劃・人口

田染村は大分縣西國東郡に屬し、郡の南部に位す。西は河内村、北は西都甲村、東は田原村に接壤し、南は山脈を隔て、速見郡立石町及び同郡中山香村に界す。東西一里七町、南北壹里貳拾九町に亘り、面積一方里六を算す。之を七箇大字(嶺崎、真中、平野、上野、相原、池部、蔭)に分ち、更に又之を左の十區に區分す。

第一區 横峰 第二區 小崎 第三區 中村 第四區 眞木

第五區 陽平ヒナタヒラ 第六區 熊野クマノ 第七區 上野 第八區 相原

第九區 池部 第十區 蔭

人口は、昭和四年末の統計に依れば、本籍人口男二千六百八人、女二千六百十九人合



計五千貳百貳拾七人、現住世帯數八百三十一、男貳千〇八十四人、女貳千一百七十九人、合計四千貳百六十三人にして、出寄留一千〇四十七人、入寄留百十九人を算せり。

### 第二節 地勢

田染村は環山四周の一大盆地にして、西方には西叡山崢嶸として聳へ、南方には鋸山一帯の峨々たる縋山あり。東北方亦丘陵を繞らす。中央には桂川の上流なる田染川、蜿蜒として流れ、一望快濶なる平蕪を現出せり。而して真中大字を中心として、放射線状の小丘陵、村内に亘るを以て、到る所路、相原、小崎、陽平、平野等の狭長なる小谿谷を構成し、各々別天地の觀あり。中央の盆地は、古來沃野良田を以て聞ゆ。地質は概ね新火成岩より成り、其の山岳部は、水蝕莓亂の作用を受けて、所在奇巖怪石を聳て、風光の美、行客をして坐るに低回顧望、去るに忍びざらしむるものあり。所謂田染耶馬の名を以て、江湖に艶稱せらる。就中鍋山耶馬井上甫水博士南屏山と命名す 間戸耶馬、熊野耶馬最も著はる。

山嶽 西叡山を大宗として、はなたけ華岳山、烏帽子嶽、鋸山又田原山と稱す 等あり。西叡山標高五百七十米、突九、華岳山同五百九十二米、突八、鋸山同五百四十三米、突、烏帽子嶽四百九

十三米、突六とす。

河川 田染川を宗として、陽平、相原、池部、蔭、小崎、菊山、大曲の諸川あり、何れも田染川の支流とす。流程長からず、且水量豊かならざるが爲め、水運の便なしと雖も、灌漑に利する所鮮少ならず、田染平野の水利に富むこと、復自然の地勢に負ふ所大なるを看る。

### 第三節 氣候

田染村は、周防洋の汀線より、地勢漸次高隆の度を増せるを以て、冬季霜雪多きを免れず、殊に山地は雪の深きを觀る。附近に嵩嶽大山あるを以て、氣象の變化一般に甚しきが如し。特に斯の地方局地觀測の材料なきを以て、適確に氣象狀態を知るに難しと雖も、試みに村内田染尋常高等小學校昭和五年竝に六年の日誌に依れば、昭和五年七月八日中の最高溫度は、華氏九十五度、昭和六年一月二日の日中最低溫度は、華氏氷點下一度八を記録せり。然れども通例盛暑華氏九十度を上ること稀に、嚴寒の候同三十度を下らず。夏季に於ては、一般に冷涼なるを常とす。



## 第二章 田染郷沿革

田染郷の名甫めて載籍に現はれたるは、實に源順著の和名抄なりとす。抄に曰く「國埼郡田染郷」と。而して吉田東伍著の大日本地名辭書は、之を解して「今田染村、河内村、田原村、朝田村是なり」とせり。是豊後圖田帳等、普通に謂ふ田染郷と其の境域を異にせり。蓋し王朝の制、所謂田染郷は、田原莊竝に來繩郷の一部を包含し、凡て之を田染郷と稱せしも、鎌府將軍頼朝、諸國に守護地頭を置くに及び、權門漫に公田を占有し、王制漸く行はれず、遂に田染郷を割いて、田原莊を置くに至りしものならむか。現に豊後圖田帳國崎郡の條には、左の如く記せり。

田原郷 六十町 宇佐宮領

本郷 四十町 本守護所豊前大炊入道女子、持明院別當之後室之跡、而豊前六

郎藏人泰廣、或號借上質券、或買得相傳之由申處、辻殿雜掌論之

小野一萬名 十町 伊賀國住人八十島左衛門太郎頼忠爲私領、藏人泰廣借上之

田染郷 九十餘町 宇佐宮領

本郷四十二町辨府云

領主大藏卿法眼有寛、小田原五郎景泰法名寂佛論之

吉丸名 二十一町 名越尾張入道

糸永名 三十町 肥前國御家人曾根崎淡路法橋慶增富貴寺碑廣増と書す

櫛來浦 十五町 地頭職大炊判官次郎親元

藏人泰廣は、大友氏の支族田原泰廣なり。其の借上質券と謂ひ、或は買得相傳と謂ふもの、彷彿として横領私占の痕跡を留む。蓋し田原、田染を包含したる當初の田染郷は、其の全部宇佐宮領なりしか、若は宇佐宮領の外に、若干の公田、若は朝臣の位田、職田ありしならむも、歲月の久しき、遂に守護地頭の采邑に充てられ、或は私領となりしこと疑を容れず。豊後國志の著者唐橋世濟は、國志卷之二、國東郡莊名の條に論じて曰く

莊者非古之制也、蓋王者政令寢衰、綱紀不密、位田職田、遂不致、漸以爲私田、割郷置之、是莊園名所由起、故莊或有大於郷者、是以相混、竟悞其稱也

と。田染郷の宇佐宮領たるや久し。其の起源を審にせずと雖も、故宇佐神宮少宮司糸永茂昌の著宇佐能志袁利に依れば、朝廷が、宇佐神宮の前身たる八幡鷹居たかみ瀬社



を立てしは、元明天皇和銅五年とす。されば田染郷の宇佐宮領となりしは、奈良朝なること略々推測すべし。宮成宇佐大宮司家の支族田染氏、夙に少宮司として宇佐神宮に奉仕す。其の後胤、權擬神主總檢校田染孫三郎忠基、大友氏第六代貞宗に依りて、武家を兼ね、小崎城に治して大友氏に事ふ。貞宗乃ち左の知行狀を忠基に與ふ。

當宮領豊後國田染庄末次、永正名内、近松内、池部、荒平、西法岐及尾崎、爲延、小峰、畠地以下事、任武家興行下知、領掌不可相違之由、可被下知忠基給旨、被仰下候也、仍執達如件

正和五年二月四日

左衛門尉

謹上

宇佐總檢校殿

是より田染郷宇佐宮領の一部、田染氏の采邑となる。降りて建武年間、田染定基同族田染孫三郎入道法光と領地を争うて、之を朝廷に訟へ、建武元年六月十八日、左の繪旨を賜はる。

雜訴決斷事 牒宇佐宮神官田染庄司定基前豊後國田染庄市安、恒任、永正、小手則

末次、重安、爲延、近松内、池部、荒平、西法岐、尾崎、小峰、永弘、小竹、柳坪、糸永、綿田、辨部、吉松、末繩郷内小野、豊前國廣津小向野等、田畑山野産數等之事、右件前々地頭職當知行不可有相違者、天氣如此詳之以狀

建武元年六月十八日

藏人頭高階朝臣奉

左小辨藤原朝臣判

同時に左記警斷書<sup>判決</sup>を賜はる

警斷

八幡宇佐宮神官田染庄内定基當知行田染庄内永正名田地屋敷荒野産數之事一族田染孫三郎入道妨事<sup>具解</sup>

停帶正和興行之鎮西下知當知行之處法光等狼藉云々當知行有無被尋之處數狀分明之上者止其妨先右之沙汰付下地於定基若宜相觸法光等者以條

建武二年九月十日

勘解由判官 三善朝臣

前筑前守 藤原朝臣

明法博士兼左衛門少尉左京大進 中臣朝臣

中納言兼大藏左京大夫大判事侍從 藤原朝臣



修理大夫 藤原朝臣  
 信濃守 藤原朝臣  
 右少辨 藤原朝臣  
 右中辨 藤原朝臣

然るに田染氏同族間の爭議は、南北朝時代、北朝康安年間に至りて再燃し、遂に大友第七代氏時は、左の諭告を發せり。

宇佐宮權總檢校内重代宣村申田染總三郎入道其阿打入豊後國田染庄重安、永正、小手則、末次、恒任名等、濫妨狼藉由事、手訴狀具書、可此子細見之狀、早河野鶴龜丸相共蒞役所、停止其阿達亂沙汰、付内重裁許事、隨詞可被注申也、仍執達如件

康安二年十一月十八日

刑部大輔 花押

種田大輔坊殿

田染氏は忠基以降、累代武職を兼ねて大友氏に臣事し、其の後裔田染刑部少輔鎮基に至り、大友義統、朝鮮役に於て小西行長に赴援せざりしに依り、豊太閤の譴を蒙り、文祿貳年封土を沒せらるゝや、鎮基亦其の采邑を褫はれて尾崎城を退く。其の

子田染孫兵衛富基、田染八幡宮官代職に補せられ、又姓を荒平と稱す。  
 豊後國志國東郡、村里の條に云ふ。

觀音堂 熊野 上野 眞木一作馬城 又作牧 菊山眞木之支 大曲 田口 藺木 陽平 間戸

中 相原 池部

以上十三村、舊屬田染郷、郷在郡之南、接速見郡北境

と。是蓋し田原泰廣が大友氏の封を受けて、田原莊を領せし後の田染郷なり。泰廣は大友第一代能直の第十二子なり。而して現代田染村に屬する横嶺、尾崎の兩村は、當時來繩郷に列し、同じく路は田原莊に列せしなり。

豊太閤、大友氏の封土を沒收するや、鳥取城主宮部善祥、坊法印繼潤をして、國東、速見、玖珠、日田の四郡を檢地せしむ。文祿貳年六月八日、繼潤木付に着し、高田に在りて四郡を管し、七月上旬より檢地の事に従ふ。即ち王朝以來の田制三百六十歩一反を改めて三百歩となし、翌年三月檢地を了る。三浦梅園の丙午封事に依れば、當時繼潤は丈量尺一間六尺五寸を用ふ。依りて時人之を法印竿と稱し、深く之を徳とせりと云ふ。豊太閤乃ち岡城七萬四千石に中川秀成、府内城一萬七千石に早川長敏、臼杵城六萬石に福原直高、佐伯城二萬石に毛利高政、日出城三萬石に毛利重政、



安岐城一萬五千石に熊谷直陳、富來城三萬石に笈家純、高田城一萬五千石に竹中重隆を封じ、其餘は之を幕府の直轄とし、前田德善院玄以をして其の地を管轄せしむ。德善院大阪に在り、代官宮木長次郎を日田に置く。是に於て田染郷は豊太閣の直轄となる。

慶長四年八月、丹後田邊城主細川越中守忠興、豊太閣の遺命に依り、豊後に於て國東、速見の兩郡を加増せられ、尋いで慶長五年庚子十二月、豊前竝に豊後國東、速見兩郡三十九萬石に封せらる。忠興依りて小倉城に移り、重臣松井佐渡守康之、有吉四郎左衛門尉立行を派して兩郡を管轄せしむ。是に於て田染郷竝に來繩郷三村は、左記の通り分轄せらる。

有吉四郎左衛門尉立行 田染郷間戸、觀音堂、眞木、菊山、陽平、園木、田ノ口、熊野、大曲、相原、中村 來繩郷横嶺、尾崎 以上十三箇村

志水伯耆守 田染郷池部 來繩郷小田原 以上二村

田中兵庫介 田染郷野上 一村

降りて慶長九年甲辰、河野民部少輔通置、始めて大里正大庄屋に補せらる。寛永九年壬申年十月、杵付侯の先代松平丹後守重直、攝州三田より、豊前龍王城に轉封せらる。

此の時田染郷、龍王城主松平重直の所領に歸す。同十七庚辰年更に國東郡高田城に移封せられ、田染郷を所轄する舊の如し。正保貳乙酉年正月十一日、松平英親重直木付城に移封せらるゝに及び、田染郷竝に都甲莊、來繩郷の一部は、幕府の直轄に歸し、木付侯竝に中津侯小笠原長次の委任統治御預りとして、左の如く分轄せらる。

木付侯預り 田染郷一圓、田原莊露村、下杵掛村 都甲莊新城村、松行村、築地村、荒尾村 來繩郷大力村、横嶺村 以上諸村

及び見目、香々地の諸莊を通じ一萬七千石餘 大里正河野四郎兵衛通長

衛通長

中津侯預り 來繩郷小崎村、奥如村、小田原村、佐野村、森村 以上三千石

大里正河野四郎兵衛通長兼攝

然るに西國東郡志には、田染村より郡志編纂當時提供したる通達野の履歷書に、田染郷十九箇村六千五百石の總差配たる大庄屋の家に生れ云々として、十九箇村を註書したれども、下杵掛、新城、梅木、一ノ畑、加禮川、森、佐野、小田原の諸村は、田染郷に非すと指摘したり。勿論此處に擧げたる下杵掛以下の諸村は、古制定むる所の田染郷に非ず。されど徳川氏に及び、田染郷竝に附近各村を併合管治する必要に迫られ、田染郷竝に併合各村を田染組と總稱したり。現に天明八年の落村指出帳に



は、田染組落村と書せり。故に田染村提出の履歷書に、田染郷とせしは田染組とすべきを誤りたるものなれども、大里正河野通達が貳拾箇村履歷書には十九箇村は疑ひなき所なり。即ち田染村拾貳箇村拾三箇村なれど菊山に落、下沓掛、新城、松行、築地、荒尾、大力、横嶺の八箇村を加へ合計二拾箇村となる。但し履歷書擧ぐる所の、十箇村名稱は、田染組諸村と中津預り諸村とを混同せり。所謂田染組は結局左記諸村の集合に依りて成れる也。

田染郷 觀音堂、熊野、上野、眞木、大曲、田ノ口、藺木、陽平、間戸、中、相原、池部

來繩郷 横嶺、大力

都甲莊 新城、松行、築地、荒尾

田原莊 下沓掛、落

尋いで寛文九己酉年、松平主殿頭忠房、丹波福知山より、肥前島原城に轉封するに及び、豊前、豊後兩國の内九拾九箇村貳萬七千七百石餘を加封せらる。依りて從來木付侯の委任統任に屬せし一萬七千石餘の内、七千石餘を除く外、凡て島原侯の所領となり、田染組の諸村は凡て其の所轄となれり。乃ち河野又三郎通恒、天和元年、田染組の大里正大庄屋に補せらる。正徳貳年壬辰八月十四日、木付を杵築と改めら

る。同年十二月、牧野備後守、三州吉田より日向延岡舊名に轉封せらるゝに及び、國東郡に於て七千石を加封せられ、田染郷眞木村の支村菊山村も亦延岡侯の所轄に入る。降りて延享四年三月十九日、磐城平の城主内藤備後守政樹、延岡に轉封せられ、亦菊山村を領す。寛延貳己巳年、島原侯野州宇都宮に轉封を命せられ、宇都宮城主戸田能登守一に因幡守、三書す島原に轉ず。依りて田染組一時戸田侯の所領となる。當時領内五組の大里正は源助高田辨左衛門津橋新三郎長洲正太夫山藏久次郎田染なりき。久次郎は河野久次郎通門なり。安永三甲午年一に安永四年未だあり松平、戸田兩侯各々舊領に復歸し、田染組再び島原侯松平氏の管治に歸し、以て明治維新に及ぶ。

舊藩制郷村の行政は、郷若は組に大里正大庄屋、各村に里正小庄屋、組頭を置き、直接其の管治に當らしむ。今天明八年申四月、田染組落村指出帳に依れば、里正は四石、組頭三人は一石五斗の給料を給せられ、又里正は、自己の持高四拾石に對する諸役夫代、組頭は同じく持高九石に對する諸役夫代を免除せらる。天保七年申七月現在の田染組大里正竝に里正の氏名は左の如し。

田 染 組 大里正 河野 欣平 通達

熊野 四ヶ郷熊野田ノ口、大曲、觀音堂 里正 生地 彌惣助



上野村	里正	渡邊傳左衛門
相原村	里正	吉田勇之助
池部村	里正	財前準平
落村	里正	柏木正平
横嶺村	里正	渡邊忠八郎
小崎村	里正	安東源三郎
中村、間戸村	里正	渡邊與助
眞木村	里正	渡邊義八郎
陽平村、蘭木村	里正	後藤京平
菊山村 <small>(延岡藩)</small>	里正	藤田軍右衛門

因に記す、寛文四年甲辰の所謂眞宗法度に坐し、陽平の里正後藤四良右衛門及び上野村里正安東助三郎は、極刑に處せられたる結果、木付侯松平市正英親より、其の職を継はる。上野村里正渡邊氏は、蓋し此の時前里正安東氏の後を承けたるものなり。陽平村は同族後藤氏、前里正後藤四良右衛門の後を承けたるものならむか。

初め松平英親の、國東郡公領幕府直轄の委任統治に任ずるや、奉行澤與市左衛門、同原太右衛門を置き、大里正、里正をして其の下に隸せしむ。島原侯松平忠房、宇佐、國東兩郡の諸村を鎮するに及び、高田芝崎の舊城を修めて、支廳を置く。稱して豊州陣屋と曰ひ、奉行、代官を特派し、目附、手代、物書等の吏僚を之に屬せしむ。是等の僚屬克く上旨を体して、牧民の職に任じ、島原藩は今猶ほ其の善政を頌せらる。

因に記す。速見郡石垣村、亦公領にして、島原侯の委任統治に任ずる所なり。歳の凶するや、嘗つて銀を賜うて賑恤の典を行ふ。事猶同村の舊日乘に存録さる。明治元年貳月、王政復古、明治貳年三月、明治天皇東京に行幸し給ひ、其の六月、諸藩の藩籍奉還を許し、大中小三等の藩を置いて政治を委任す。幾ばくもなく、同四年七月十四日、廢藩置縣の詔下り、舊豊後七藩に七縣を置くと共に、舊島原藩領に島原縣を設け、舊藩主を以て知事となす。是に於て田染郷一時島原縣の管轄に屬す。同四年十一月十四日、以上諸縣を廢し、豊後一圓を以て大分縣を置き、同五年貳月、縣下に八箇所の出張所を設けると共に、舊島原縣高田管下に、高田出張所を置き、舊豊州陣屋を其の廳舎に充つ。後漸次に出張所を廢止し、明治五年六月二日、八部を劃して八大區とし、國東郡一圓を第一大區とし、舊高田出張所に第一區會所を設け、區



長、權區長、戸長、副戸長の諸員を置きて、行政事務に當らしむ。同六年三月二十五日、大區會所を廢し、各大區に小區を劃し、用務所を置き、區長、戸長、保長をして事務を處辨せしむ。此の時田染諸村は、第一大區三ノ小區に屬す。所屬十七村名左の如し。

横嶺村 小崎村 中村 間戸村 眞木村 菊山村 陽平村 菌木村 田ノ口村 熊野村 大曲村 觀音堂村 上野村 相原村 池部村 落村 小田原村

明治八年三月十三日、更に大小區分合改定を行ひ、依然として、第一大區三小區に屬す。擧げらるゝ所の村名左の如し。

嶺崎村 横嶺 小崎 眞中村 中 眞木 間戸 平野村 陽平 熊野 菌木 田ノ口 觀音堂 上野村 相原村 池部村 落村

明治十一年七月、太政官第十七號を以て、郡區町村編制法を發布せらる。乃ち之に基きて、大分縣は同年十一月一日、大小區制を廢し、國東郡を西國東、東國東の二郡に分つと共に、田染郷は、西國東郡下に左記七村を置く。

嶺崎村 眞中村 平野村 上野村 相原村 池部村 落村

明治十七年内務卿の訓示に基き、同年八月三十日縣は、從前の町村役所を廢し、更に町村役所所轄區域並に町村役所位置を定む。仍りて田染局地は、左の通り改定さ

る。

役所位置

所轄區域

池部村	落村	池部村	相原村	上野村
眞中村	嶺崎村	眞中村	平野村	

斯くて時世の進運に伴ひ、漸次地方自治体の外形と内容とは其の整頓充實を告ぐると共に、明治貳拾壹年四月、市町村制の發布あり、同貳拾貳年四月一日より施行せらる。仍りて大分縣知事西村亮吉は、明治貳拾貳年三月貳日、縣令甲第十二號を以て町村區域名稱を定め、又同年三月三十日縣令甲第二十號を以て町村役場位置を定め、何れも四月一日より施行すべきを公布したり。田染村に係るもの左の如し。

村名

區域

田染村	(嶺崎村 眞中村 平野村 池部村 相原村 上野村 落村)
-----	------------------------------

役場位置

田染村	眞中
-----	----



備考 同時に「舊町村名は大字として之を存すと公布せらる。

### 第三章 政治

#### 第一節 奈良朝以降の概説

王朝時代の田染は國東郡と共に、邈焉として其の眞を稽ふるに由なし。但し此の地方が上代に於て、已に文化の中心地たりしや略々想像すべきなり。由來半島地は、草昧未開の時代に於て、夙に文化の惠澤に浴するを常とす。之を大にしては、歐羅巴に於ける希臘、羅馬、亞細亞に於ける印度、朝鮮、之を小にしては、我が邦に於ける伊豆、紀伊乃至國東半島等が、嘗つて最も人類繁榮の地たり將た十二分に文化の開展を見たることは、記録史實の昭々として證明する所なり。斯る時代に於て、國東半島が如何なる統治者に依りて支配されたるか、其の詳細は今之を知るに由なしと雖も、孝德天皇大化の新政を布き、國司郡司を置かれし以前は、國造に依つて統治されたることは、史典の記録する所なり。古事記中卷には、大倭根日子賦斗爾命之御子、日子刺肩別命、豐國國前臣祖也と書し、舊事記國造本紀には、志賀高穴穗朝

御世、吉備臣同祖、吉備郡命六世牟佐自命、定賜國前國造と録し、日本紀景行天皇の條には、景行天皇十二年秋九月、到周防婆磨時、天皇南望之、詔群卿曰、於南方烟氣多起、必賊將在、則留之、先遣多臣、祖武諸木、國前臣祖菟名手物部君、祖夏花、令察其狀云々と記せり。以上の記録に依りて之を觀れば、日子刺肩別命、牟佐自命、多臣、祖等は、國造時代に於ける知名の統治者として知られたる人々なり。殊に日子刺肩別命、菟名手命二柱が、現今田染村郷社八幡社の攝社北野社元中村字に齋祀され居るに徴すれば、吾が田染郷の歴史が、相當に古きを證すべきのみならず、多臣、祖武諸木の名が、後に田染の地名となりて永遠に遺りし事も、亦奇しき因縁とせざるを得ず。蓋し牟佐自命の名は、國東郡武藏郷に、多臣、祖の名は、田染郷に冠せられたるものとすれば、武藏郷、田染郷は相並びて上世以降、其の永き歴史を後昆に傳ふるものなり。斯くて大化新政以後、國司郡司を諸國に置ける郡縣政治が、幾何年間繼續したるかは、適確に知り難しと雖も、今大日本史卷三百九十、國郡司表に依れば、國郡司の任命は、天平年間に始まり、文永弘安の間に了れり。従つて多臣、祖の名を殘せる我が田染郷も、奈良朝以降、文永弘安年間に至るまで、國郡司の治下に屬し、兼ねて和銅年間以降、宇佐神領に屬し、宇佐宮の神權下に、殆んど其の武陵桃源的平和寧靜を樂みしを疑は



す。而して宇佐少宮司田染氏の田染郷を管せしは、今より約七百六十年前に在り。田染氏の高祖從五位下田染式部少輔宇佐宿禰國弘、永萬年間六條天皇田染尾崎に館す。降りて正和五年、其の後胤八幡宇佐宮權擬神主兼總檢校從五位下田染忠基、大友貞宗に依りて、武家兼職を請ひ、爾來大友氏の末葉に至る迄、田染氏は、神權武權を該ね有して、田染郷に君臨し、歷世實に十代、遂に大友氏の凋落に殉じて、家聲を墜すの已むなきに至れり。宇佐宮領、由來不可侵の特權を有すと雖も、武門權を挾み、王綱漸く弛むに従ひ、亦多少の消長なしとせず。現に大友能直の第十二子田原藏人泰廣が、田染郷を割きて、田原莊を領せしは、前已に之を説けり。降りて建武年間、木付大炊介源親重は、田染庄槇村の内本方三拾町を領す。建武元年六月十六日付の雜訴決斷所牒之を證す是宇佐神領に、武門武士竄入の端を啓きたる實例なり。尋いで大友氏の重臣古庄氏、嘗つて烏帽子嶽城及び牧城に鎮し、其の裔古庄右馬允重長、天正六年、日州耳川戰に戰歿せり。此の間田染郷は、神領、武家領、犬牙錯綜して、政令一途に出でず。大友氏國除細川氏國東郡を領有するに及び、土豪河野民部少輔越智通置、始めて田染庄大里正に補せられ、續いて木付侯松平氏、島原侯松平氏及び同戸田氏等の相次いで、田染庄を領有管治するに及びても、河野氏連綿十一世、大里正の職に在り、管下の里正を督して、封

建治下の民政を理すること茲に三百年、以て明治維新に及べり。

政府新政を布き、明治三年庚午從來の大里正、里正、組頭を廢して、總名主、名主、乙名を置くに及び、舊大里正河野欣平通卿、明治四年辛未七月、名主を命せられ、同年十一月十四日、島原縣廢止と共に、豊後八縣亦廢止されて、新に大分縣を置き、高田に大分縣出張所を設く。尋いで明治五年八郡を八大區に劃し、國東郡を第一大區とし、高田に第一會所を設くるに及び、中村茂八第一大區々長に任じ、河野通卿戸長を命せらる。明治六年癸酉三月、更に各大區に小區を劃し、用務所を置くに當り、明治七年十一月十九日、吉田建士、第一大區三小區田染副戸長を命せられ、續いて戸長に進む。後相原村戸長、池部村外三村戸長、真中村外二村戸長に歴任し、頗る治績あり、明治貳拾貳年四月、町村制を實施せらるゝに及び、衆望を負ひ、名譽職田染村長に選舉せらる。爾後選舉を経ること十一回、以て現村長に至る。何れも其の職に適ひ、村民輯睦、農事に精勵せり。今左に村政執行機關、同議政機關、並に田染村選出若は出身の郡縣會議員、其の他を採録す。



第二節 村政機關  
村長

就當職選	年月日	退滿職期	年月日	事由	職別	氏名
明治二十二年	五月二十二日	明治二十四年	三月二十七日	辭退	名譽職	吉田建士
同	二十四年四月十三日	同	二十八年四月十二日	命令	臨時村長	吉田純一郎
同	二十八年四月二十三日	同	二十八年六月三日	命令	代理者	吉田純一郎
同	二十八年六月四日	同	三十二年六月三日	命令	名譽職	渡邊太郎
同	三十二年六月二十七日	同	三十二年九月一日	辭退	同	財前村太郎
同	三十二年十月二日	同	三十六年十月一日	命令	同	河野三郎
同	三十六年十月六日	同	三十六年十二月二十七日	命令	村務管長	西國東郡書記 竹ノ内八五郎
同	三十七年九月六日	同	四十一年九月五日	命令	有給	吉田純一郎
同	四十年九月六日	同	四十年九月五日	同	同	河野兼松
大正	元年九月八日	同	五年九月三日	辭退	同	二宮傳郎
同	五年九月二十五日	同	九年九月二十四日	命令	名譽職	河野兼松
同	九年九月二十五日	同	十三年九月二十四日	同	同	河野要藏

助役

同	十三年九月二十七日	昭和三年	九月二十六日	同	同	渡邊儀重
昭和三年	九月二十七日					桑尾重代

就當職選	年月日	退滿職期	年月日	事由	職別	氏名
明治二十二年	五月二十一日	明治二十三年	三月三十一日	辭退	名譽職	財前村太郎
同	二十三年四月五日	同	二十七年四月四日	命令	同	渡邊村太郎
同	二十七年四月十二日	同	二十八年三月二十八日	辭退	名譽職	財前村太郎
同	二十八年八月一日	同	三十二年七月三十一日	命令	同	河野三郎
同	三十二年八月十六日	同	三十二年十月一日	命令	同	河野三郎
同	三十二年十二月一日	同	三十六年十月四日	命令	同	二宮代八郎
同	三十七年九月八日	同	四十年九月七日	命令	同	二宮代八郎
同	四十年九月八日	同	四十年九月七日	命令	同	二宮代八郎
大正	元年九月二十七日	同	五年九月二十六日	命令	同	河野要藏
同	五年十月二十五日	同	九年十月二十四日	命令	同	伊美喜市
同	九年十月二十五日	同	十三年十月二十四日	命令	同	伊美喜市
同	十三年十月二十五日	同	十三年十月二十四日	命令	同	安藤丈二
昭和三年	十月二十五日	同	昭和五年十月二十四日	命令	同	松岡萬次郎



收入役

就當職選	年	月	日	退滿職期	年	月	日	事由	職別	氏名
明治二十二年	六月	二十九日	明治二十三年	四月	六日	助役兼掌	渡邊太			渡邊太
同	二十三年	四月	七日	同	二十七年	四月	六日	滿期		渡邊太
同	二十七年	四月	七日	同	二十八年	四月	一日	辭退		渡邊太
同	二十八年	四月	二十日	同	三十二年	四月	十九日	滿期		渡邊太
同	三十二年	四月	二十六日	同	三十二年	十一月	三十日	助役		二宮代八
同	三十二年	十二月	二十一日	同	三十六年	十二月	二十日	助役		二宮代八
同	三十六年	十二月	二十一日	同	三十七年	九月	七日	轉職		渡邊信十
同	三十七年	九月	二十四日	同	四十一年	九月	二十三日	滿期		河野要
同	四十一年	九月	二十四日	大正元年	九月	二十三日	同	同		河野要
大正元年	九月	二十八日	同	三年	九月	二十日	辭退			後藤正勝
同	三年	九月	二十一日	同	五年	三月	十三日	同		豐田正之
同	五年	三月	二十七日	同	九年	三月	二十六日	滿期		渡邊嘉太
同	九年	三月	二十七日	同	十二年	四月	十六日	辭退		渡邊嘉太
同	十二年	四月	三十日	昭和二	年	四月	二十九日	滿期		後藤正勝
昭和三	年	八月	十日							

村會議員

就當職選	年	月	日	退滿職期	年	月	日	事由	職別	氏名
明治二十二年	四月	二十八日	同	明治二十八年	三月	三十一日	滿期		二級	河野正治
同			同	同	二十五年	三月	三十一日	抽籤		小關字平
同			同	同	二十八年	三月	三十一日	滿期		河野用三
同			同	同	二十八年	三月	三十一日	抽籤		後藤鹿二
同			同	同	二十五年	三月	三十一日	抽籤		後藤源三
同			同	同				同	一級	二宮雄策
同			同	同	二十八年	三月	三十一日	滿期		安東真彦
同			同	同	二十二年	五月	四日	辭退		安東卓太
同			同	同	二十八年	三月	三十一日	滿期		河野好馬
同			同	同	二十五年	三月	三十一日	抽籤		財前準平
同			同	同				同		永松勘吾
補			缺							河野三郎
同										生地彌六
同										渡部左馬
同										財前村太











同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭 和 四 年 四 月 二 十 四 日	同	同	同	同	同	同	同	同	同
												同	同	同	同	同	同	同	同	同
												同	同	同	同	同	同	同	同	同
毛	河	財	後	後	藤	都	渡	安	後	財	吉	財	豐	吉	柏	江	毛			
利	野	前	藤	藤	本	甲	邊	藤	藤	前	田	前	田	田	木	口	利			
福	惣	克	磯	善	策	幸	千	藤	薰	玉	克	克			重	福				
治	太郎	己	市	六	藏	郎	吉	勝	平	郎	晉	己	清	晉	好	整	治			

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大 正 六 年 四 月 二 十 四 日
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大 正 十 年 四 月 二 十 三 日
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	滿 期
																					二 一 級 級
都	安	渡	後	松	渡	財	永	安	後	渡	財	坂	渡	畑	安	松	渡	後			
甲	藤	邊	藤	桐	邊	前	松	藤	藤	邊	前	藤	邊	尾	部	桐	邊	藤			
幸	文	久	善	萬	儀	彌	米	文	善	千	克	乙	邊	實	萬	久	正				
次	藏	男	六	次	作	六	吉	藏	六	代	己	四	學	實	次	男	勝				
郎				郎		郎				吉		郎	學	實	郎	男	勝				



區長 第一區

就職年月日	退職年月日	退職事由	氏名
明治二十二年十月二十五日	明治二十六年十月二十五日	滿期	小田原平
同 二十六年十月二十六日	同 三十年十月二十五日	同	小田原平
同 三十年十月二十六日	同 三十二年三月二十九日	同	小田原平
同 三十二年三月三十日	同 三十五年三月二十三日	辭退	小田原平
同 三十五年三月二十四日	同 三十七年四月十二日	同	宇留島喜松
同 三十七年四月十三日	同 四十年三月二十二日	同	田原龜二
同 四十年三月二十三日	同 四十二年二月十日	同	河野三郎
同 四十二年三月二十九日	同 四十五年二月一日	同	小關眞太郎
同 四十五年二月八日	大正四年一月十三日	同	伊美藤太郎
大正四年一月十四日	同 四年四月二十五日	同	河野理平
同 四年四月二十六日	同 五年二月十六日	同	小關逸太郎
同 五年二月二十七日	同 七年一月十五日	同	都甲末次郎
同 七年一月十五日	同 九年一月十一日	同	河野儀六
同 九年一月十四日	同 十年一月十一日	同	田原幸二
同 十年一月十二日	同 十二年二月二十一日	同	河野幸二

區長 第二區

就職年月日	退職年月日	退職事由	氏名
同 十二年二月二十二日	同 十五年一月二十二日	同	伊美新太郎
同 十五年一月二十三日	昭和三年一月十一日	同	小田原直郎
昭和三年一月十四日	同 五年三月三十一日	同	都甲熊太郎
同 五年三月三十一日			小關吉郎

就職年月日	退職年月日	退職事由	氏名
明治二十二年十月二十六日	明治二十五年三月三十日	辭退	渡邊健造
同 二十五年三月三十一日	同 二十九年三月三十日	滿期	安東眞彦
同 二十九年四月二十八日	同 三十三年四月二十七日	同	河野榮七
同 三十三年四月二十八日	同 三十五年三月二十二日	辭退	河野增平
同 三十五年三月二十四日	同 三十九年四月十二日	滿期	渡部新十郎
同 三十九年四月十三日	同 四十二年四月十二日	同	渡部新十郎
同 四十二年四月十三日	同 四十四年九月二十四日	死亡	後藤鐵平
同 四十四年十二月五日	大正三年一月十四日	辭退	渡部鶴松
大正三年一月十五日	同 七年一月十四日	滿期	渡部長次郎
同 七年一月十五日	同 九年一月一日	辭退	河野熊之助
同 九年一月十四日	同 十三年一月十三日	滿期	渡邊眞藏
同 十三年一月十四日	昭和三年一月十三日	同	河野惣太郎



同 昭和三 四年一月十三日	昭和四 年一月十二日	辭退	渡河 邊野 武長 士松
------------------	---------------	----	----------------------

第三區

就職年月日	退職年月日	退職事由	氏名
明治二十二年一月二十六日	明治二十四年九月二十一日	辭退	渡邊 俊六
同 二十四年九月二十二日	同 二十八年九月二十一日	滿期退	倉成 友平
同 二十八年九月二十二日	同 二十九年六月二十四日	辭退	倉成 友平
同 二十九年六月二十五日	同 三十一年四月一日	同	河野 柳月
同 三十一年四月二日	同 三十五年四月一日	滿期退	渡邊 勇次
同 三十五年四月二日	同 三十八年三月十六日	辭退	渡邊 勇次
同 三十八年三月十七日	同 四十年十二月五日	同	渡邊 伊太
同 四十年十二月六日	同 四十一年七月十三日	同	河野 袈裟五郎
同 四十一年七月十四日	同 四十二年一月十一日	同	渡邊 部秀五郎
同 四十二年二月十六日	同 四十三年十二月二日	同	渡邊 邊建十郎
同 四十四年十二月三日	大正元年九月三十日	同	森田 長次郎
大正元年十月六日	同 三年一月十四日	同	豐田 久次郎
同 三年一月十五日	同 五年一月二十日	同	渡邊 嘉太郎
同 五年一月二十一日	同 五年二月二十六日	同	渡邊 佐太郎

同 五年二月二十七日	同 七年十二月二十日	同	渡邊 千代吉
同 七年十二月二十六日	同 八年十二月三十日	同	倉成 權六
同 九年一月十四日	同 十年一月十一日	同	渡邊 邊
同 十年一月十二日	同 十一年二月二十一日	同	渡邊 長太郎
同 十一年二月二十二日	同 十二年二月二十一日	同	渡邊 仁太郎
同 十二年三月二十二日	同 十三年一月三十一日	同	渡邊 豐三郎
同 十三年二月一日	同 十四年一月二十三日	同	渡邊 邊
同 十四年一月二十四日	同 十五年五月四日	同	野田 清實
同 十五年六月三十日	同 十五年七月二日	同	渡邊 與實
昭和二二年二月四日	昭和四年一月十二日	同	河野 藤一
同 四年一月十三日	同 五年五月二十日	同	渡邊 義策
同 五年五月二十日			渡邊 義策

第四區

就職年月日	退職年月日	退職事由	氏名
明治二十二年十月二十六日	明治二十四年九月二十一日	辭退	河野 順平
同 二十四年九月二十二日	同 二十八年九月二十一日	滿期退	河野 用三郎
同 二十八年九月二十二日	同 三十二年三月二十八日	辭退	河野 用三郎











就 職 年 月 日	退 職 年 月 日	退 職 事 由	氏 名
明治二十二年十月二十六日	明治二十六年十月二十五日	滿 期	二 宮 馬 十
同 二十六年十月二十六日	同 三十年十月二十五日	同	二 宮 馬 十
同 三十年十月二十六日	同 三十一年四月一日	辭 退	二 宮 馬 十
同 三十一年四月二日	同 三十五年一月十二日	同	渡 邊 郁 太
同 三十五年一月十三日	同 三十九年一月十二日	滿 期	河 野 利 太
同 三十九年一月十四日	同 四十二年一月十一日	辭 退	財 前 彌 六
同 四十二年三月十六日	同 四十四年一月二十日	同	財 前 圓 次
同 四十四年一月二十五日	同 四十二年一月二十七日	同	吉 田 與 次
大正二年一月二十八日	同 四年七月二十五日	同	財 前 文 太
同 四年七月二十六日	同 八年七月二十五日	滿 期	渡 部 馨 學
同 八年八月十三日	同 八年十二月十日	辭 退	二 宮 部 馨 學
同 九年一月十四日	同 九年三月二十二日	同	財 前 權 算
同 九年五月二十六日	同 十一年二月二十一日	同	伊 藤 權 算
同 十一年二月二十二日	同 十二年二月二十一日	同	財 前 辰 太
同 十二年二月二十二日	同 十四年一月二十四日	同	財 前 勝 次
同 十四年一月二十五日	同 十五年一月二十五日	同	二 宮 健 茂
同 十五年一月二十六日	同 十五年一月二十五日	同	有 田 繁 健
昭和五年二月二十五日	昭和五年二月二十二日	滿 期	財 前 繁 健

第九區

就 職 年 月 日	退 職 年 月 日	退 職 事 由	氏 名
明治二十二年十月二十六日	明治二十三年四月二十八日	辭 退	財 前 寬 造
同 二十三年四月二十九日	同 二十六年六月二十七日	同	財 前 太 次
同 二十六年六月三十日	同 二十九年三月二十五日	同	河 野 清 太
同 二十九年三月二十六日	同 三十一年七月四日	同	河 野 清 太
同 三十一年七月五日	同 三十二年十二月七日	同	河 野 久 造
同 三十二年十二月八日	同 三十六年七月九日	同	毛 利 茂 平
同 三十六年七月十日	同 三十六年九月二十日	同	河 野 清 太
同 三十六年九月二十一日	同 三十八年四月二十六日	同	瀧 口 幸 次
同 三十八年四月二十七日	同 三十八年十一月二十七日	同	加 藤 八 十
同 三十八年十一月二十八日	同 三十九年九月二十七日	同	河 野 喜 三
同 三十九年九月二十八日	同 四十一年十一月十九日	同	河 野 喜 三
同 四十一年十一月二十日	同 四十三年十二月二日	同	坂 藤 乙 四
同 四十三年十二月三日	同 四十五年四月二十四日	同	財 前 市 十
同 四十五年四月二十五日	同 四十五年七月二十九日	同	毛 利 市 十
同 四十五年八月二十日	大正二年二月二十六日	同	毛 利 市 十
大正二年二月二十七日	同 六年二月二十七日	滿 期	河 野 茂 六



郡會議員

就當 職選	年 月 日	退滿 職期	年 月 日	事退 由職	職 別	氏 名
	大正十三年十月二十九日				社	財前楫一
	同十四年五月十九日				社	渡邊義美
	昭和六年四月三十日				同	河野要藏

神職

同	大正二年一月二十八日	同	四年一月十三日	同	同	後藤壽
同	同四年一月十四日	同	六年四月十三日	同	同	柏木三六
同	同六年五月一日	同	十年四月三十日	滿期	同	永松章
同	同十年五月一日	同	十四年四月三十日	同	同	江口清太
同	同十四年五月一日	同	昭和四年四月三十日	同	同	加藤作太郎
同	昭和四年五月一日	同	同六年四月一日	辭退	同	永松吉
同	同六年八月十四日					

第十區

就 職	年 月 日	退 職	年 月 日	退職事由	氏 名
同	明治二十二年十月二十六日	同	明治二十六年十月二十五日	滿期	柏木文平
同	同二十六年十月二十六日	同	同三十年十月二十五日	同	柏木文平
同	同三十年十月二十六日	同	同三十一年四月一日	辭退	柏木文平
同	同三十一年四月二日	同	同三十五年四月一日	滿期	永松勘吾
同	同三十五年四月二日	同	同三十六年三月十一日	辭退	後藤千代
同	同三十六年三月十二日	同	同三十九年三月一日	同	安藤半平
同	同三十九年三月二日	同	同四十三年三月一日	滿期	永松太郎
同	同四十三年三月二日	同	同四十四年三月二十五日	辭退	永松太郎
同	同四十四年三月二十六日	同	同四十五年二月二十六日	同	田邊福太郎
同	同四十五年二月二十七日	同	大正元年十月十七日	同	柏木庄太郎



明治二十四年四月二十七日	明治三十年四月	滿期	財前村
同 三十年四月二十九日	同 三十二年九月二十九日	選舉法改正後退任	河野兼松
同 三十二年九月三十日	同 三十六年九月二十九日	滿期	安東卓太郎
同 三十六年九月三十日	同 四十年九月二十九日	同	後藤鹿二
同 四十年九月三十日	同 四十四年九月二十九日	同	二宮傳郎
同 四十四年九月三十日	同 四十八年九月二十九日	同	渡邊儀作
大正四年九月三十日	同 八年九月二十九日	同	吉田儀作
同 八年九月三十日	同 十二年三月三十一日	郡制廢止	財前克己

### 縣會議員

當選職	年月日	退職期	年月日	退職事由	氏名
大正四年九月二十五日	大正八年九月二十四日	滿期	財前克己		
昭和二年九月二十五日					

## 第四章 財政・經濟

### 第一節 古今田數對照

農村に於ける經濟財政の主体は、勿論農事の消長に係る。而して農事の消長は、畢竟田地の廣狹肥瘠に左右せらる。今試みに田染局地に於ける水田に就き古來増減の趨勢を検するに、王朝時代は今之を稽ふるに由なし。降りて弘安年間の豊後圖田帳に依りて其の數目を觀るに、田染郷の條下に、

九十餘町 宇佐宮領

本郷四十二町 辨府云

と記せり。即ち其の九十餘町は、宇佐宮領に屬し、別に四十二町の別勅賜田あることを示せるものなり。辨府は別府なり。吉田東伍著大日本地名辭書、隱岐國別府の條に云ふ。

別府とは蓋別勅符の義にして、古來府符往々相通用せり。即田制に出でたる名目とす。集古文書、元久年中のものに、正しく別符と記するものあり。符符相通、



田令に凡別勅賜人田者名賜田と云ひ、集解に位田職田及口分田雜色田等別勅指人給耳と釋く類聚國史三代格等に見ゆる勅旨田てんも亦別勅賜田なり。光孝紀仁和元年の條に以帝潛龍時在畿内外水陸田地皆爲勅旨田下符諸國知とあるにて勅旨田は別勅符を以つて定められしを知るべし。斯くて此の別符田は田制の敗亂に伴れて全く莊園私墾と同性同狀のものとなり、郷村と並び稱せられて地名にも轉換したるなり。

と。要するに辨府即ち別府は別符を以て賜はる田地と云ふ意味なり。而して神領若は別勅賜田は大概上田ある土地に就きて定むる慣例あり。試みに圖田帳に就き、豊後國內に於ける宇佐宮領を物色するに、國崎郡の安岐郷武藏郷と謂ひ、將た大野郡の緒方莊と謂ひ、何れも水利に富み膏腴肥沃の良田に非ざるはなし。別勅賜田亦然り。己に田染郷が王朝以還神領に屬し將た別勅賜田あるに徴すれば、夙に良田の所在地たりしことを肯定するに難からざる也。更に是等の良田地が鎌府以降如何なる消長隆替を辿れるかを檢するに、宇佐宮領九十餘町、辨府四十二町合計百三十二町餘は何れも王制の三百六十歩一反なるを以て、是を現制に換算するときは、正に百五十八町四反餘となる。是豊後圖田帳に録する田染郷水田の總

面積と觀て、敢て失當ならざるべし。然るに天保七申年七月の日附ある田染組里正庄の調製に係る繪圖面に登録せる田數は左の如し。

眞木村	七町 <small>反</small> 、三 <small>畝</small> 、二 <small>歩</small>	相原村	二七町 <small>反</small> 、八 <small>畝</small> 、一 <small>二</small>
池部村	二三、六、一、二四	横嶺村	三二、一、四、九
小崎村	二八、七、五、二四	中村	一九、六、一、四
間戸村	四、一、〇、二四	陽平村	五、六、五、二四
菌木村	五、八、三、六	上野村	三一、五、五、一八
大曲村	四、九、一、二二	田ノ口村	三、二、七、九
露村	二九、八、三、六		
合計	二三四、三、二、一三		

六(本村ハ天明八年申四月指出帳)

備考 觀音堂、菊山、熊野三村ヲ缺ク

以上は三村の計數を缺くを以て、聊古今對照の便を缺ぐと雖、假に熊野、觀音堂、菊山三村の總計數を二十町と積算するときは、田染組總面積貳百四十四町餘となる。即ち圖田帳登載百五十八町四反餘に比するときは、約八十六町の増加となる也。而して新編入有租田新切は、以上の計數に含まず、且つ舊島原藩の征稅態度は、寧ろ寛裕なりしと信すべき理由あるを以て、實際の田數は、以上の計數に比して、尙若干の増加を見るべし。是時世の進運に伴ひ、稼穡の道、漸次改善されたるに由ること



勿論なりと雖も、又島原藩が歴代勸農培本に留意し、民政に努力したる惠澤餘徳ならずんば非ず。従つて徳川幕府の末年、全國一般不景氣に脅され、幕閣屢次節儉令を下されたるに拘らず、田染組民間の經濟状態は寧ろ頗る良好にして、邑民は鼓腹擊壤の安樂郷に在りしを推測するに足る。今三社八幡宮祭禮に關する記録に依れば、同年より萬延元年に至るまで、祭典に際しては、毎年俳優を聘して、劇を演せしめたる次第を詳細に記載せり。以て戸々富贍、所謂足りて樂むの概あるを觀るべし。當時幕府の節儉令頗る苛察、劇を催すものと雖も、漫に京阪有數の俳優を招聘するを許さず、唯だ所謂他所川原もの通掛芝居に限られたり。然るに萬延元年申秋の祭典に當りては、私に大阪俳優嵐徳十郎一座を聘せり。同記録に曰ふ。

十月八日九日は御領主様御不例に付右十一月十日十一日に相成申候尤芝居之儀は杵築仲太郎座之御届申上候實は大阪芝居八月濱ノ市崩別府逗留いたし夫を約束いたし候云々

羊頭を掲げて狗肉を賣るに非ずして、狗頭を標榜して羊肉大牢の珍羞を味ふものなり。田染邑民の富める一斑を窺ふべきか。本章曩に天保繪圖面登載の田數は、寧ろ實數以下なるべきを指摘せり。左表を一瞥せば、思ひ半に過ぐべし。

田染村民有租地細別 昭和四年末  
臺帳面

田	四一四、七	畑	二七一、四
宅地	四一、〇	山林	四五五、〇
原野	一一五、三	雜種地	一、四
計	一、二九八、八		

### 第二節 村財政

都市の如く、普通行政事務の外、施設すべき科目多からず、従つて歳出の多額を占むるものは、教育費、役場費、勸農費等に止まるを以て、例年の歳計は二萬五千圓乃至三萬圓に止まれり。今左に既往六箇年の歳出決算額並に昭和四年度歳入豫算の計數を提示して、財政の一斑を知らしむ。

大正拾貳年度	二九、一七七	大正拾參年度	二五、五五〇
大正拾四年度	二二、二二八	昭和貳年度	二三、〇〇三
昭和三年度	二九、〇三〇	昭和四年度	二五、二三九

昭和四年度歳入豫算

國稅附加稅	四、七四四	縣稅附加稅	五、一三二
戶數割其他	一四、〇三九	其他	九七



使用料及手数料	二六四	交	付	金	八三九
下	四、八三七	補	助	金	五九五
繰	一〇	雑	收	入	六九
計	三〇、六二六				五〇

### 第三節 德川幕府の節儉令

德川氏末季の財界不況は、殆んど天下通有の現象と謂ふべく、遂に天保九戊戌年以來、屢次公料各地其の他に彌りて、節儉令を降せり。其の民間經濟に影響する所鮮からざりしを以て、特に其の梗概を録して本章に附す。

蓋し斯の財界不況は、其の由る所固り一にして足らずと雖も、大要三箇の原因あるを觀る。其の一は元和假武以後、文恬武熙、上下漸く奢侈淫蕩、爲に國用給せざるに至りしことなり。其の二は國用の給せざる結果、幕府が屢次幣制を改惡し、硬貨大小判の改鑄を行ひ、惡貨を流布して經濟界を攪亂せしめたることなり。其の三は良貨正貨漸く市場より影を潜めて、上下等しく金錢の匱乏に苦みたる結果、諸藩が熾んに不換紙幣を濫發したること是なり、所謂藩札なり。凡そ斯の三箇の素因は、互ひに因となり果となり、米價の暴騰を起し、江戸府内を首め、各地に飢民を生ずるに至り、遂に天保七丙申同八丁酉兩年に亘り、甲州郡内、越後柏崎に一揆の蜂起するあり、大鹽平八郎大阪に亂を作す。是に於て幕閣は大いに鑒みる所あり、天保八年四月を以て節儉令を發せり。其の條項頗る煩瑣にして、一々歴擧するの煩に堪へずと雖も、今田染村上野某藏する所の節儉筋申渡候箇條書と題する記録に依り、左に其の一斑を摘録す。

#### 御目見之分

- 一、男女共一統に綿服襟袖口絹紬、帯は太織紬以下相用可申事
- 一、日傘並蛇目傘無用の事

但問屋傘相用可申事、七歳以下の小兒模様付日傘は不苦

右は御目見格以上の規程なり、御目見以下は別に規定あり、町人百姓肩衣袴着用不相成事と令し、其の他衣食住、冠婚葬祭の儀式、民間の贈答に至るまで、殆んど水をも洩さぬ干涉を試み、

節句飾幟一本に限人形毛槍其外ともに無用、雛は紙雛一對に限屋形雛其外共に不相成取遣

と言ひ、又物品購入に關しても、



一、紀州椀屋年々御領分へ立入吳服物等商賣致候儀は差留可申事  
 と嚴命し、果は高田神事能<sup>の</sup>に従事する者、從來絹衣裳を用ひ來りしを、向後は綿服た  
 るべしと令せり。恐らく濱口内閣の緊縮政策と雖も、亦斯くまでに深刻徹底せざ  
 るべし。然りと雖も、久しく奢侈に馴れたる民間にては、容易に禁令を遵奉せざり  
 しと見ゆ、水野越前守忠邦執政の職に就くに及び、天保十三壬寅年、更に反覆して節  
 儉を令せり。「豊州御領村方御取締ヶ條書」の末尾に曰く、

右之趣天保十三年寅十月中御代官御廻村に而被仰渡候

と。幕閣は勿論、諸藩の官憲が如何に鞠躬如として節約の御趣旨を宣傳したるか、  
 此の記録以て一斑を窺ふべし。

是より先、白河樂翁公執政の時代は、水野閣老以上に、勤儉を令せられたるは、世間周  
 知の事實なり。幕府の令達、寛政十一未年の條に曰く、

在々において神事祭禮之節、或は作物蟲送風祭杯、與名付芝居見せ物同様之事を  
 催し、衣裳道具等をも拵、見物人を集、金錢を費し候儀有之由、相聞不埒之事に候

以上煩苛なる節、儉令が、公料各地、其の他諸藩の民間經濟に如何なる影響を與へし  
 か、羽倉簡堂廣瀨淡窓門人の幕府の納戸頭の西上記には、先是縮緬を織ること西陣に於て、月に千端なりしが

奢侈禁止の令下りたれば、日に織ること二十反に過ぎずと記し、極端なる節儉令を  
 否定せり。其の是非急に斷す可らずと雖も、演劇干涉は寛政以來幕府の傳統的政  
 策なり。然るにも拘らず、通り掛りの川原者芝居を免許されたる田染が、大阪俳優  
 を聘して秋祭を賑はしたる一事に、徴すれば、他はイサ知らず、少くも田染の民間經  
 濟は、官憲が取越し苦勞をなす程、爾く窮迫せるものに非ず、否寧ろ富裕なりしなら  
 む。否か、しばらく記して後考を待つ。

硬貨改鑄、惡貨流行して人民之を嫌忌し、爲に財界を攪亂せし次第は、前已に之を  
 説けり。是に於てか、人々良貨を死藏して之を吝みたるは、左の記録之を證して餘  
 あり。

從公義出候御書付寫

去申年中大判吹直被仰付、新大判壹枚ニ増分金三拾兩相添、古大判與引替古大判  
 者通用停止被仰出候間、引替差出可申筈之處、今以引替殘多分有之通用停止之品  
 貯置候ハ、心得違候間、聊茂不貯置兼而觸置候引替所、江差出引替可申事文久二年四月  
 新大判壹枚ニ金參拾兩の打歩をなしてさへ尙引替を肯せざる者ありとは、以て新  
 貨の如何に粗惡なりしかを想像し得べし。



第四節 舊田染組村勢 (天保七年各村里正調査)

村名	草高	新草地	田反別	畑反別	百姓家數	人口	牛頭數	馬頭數	山林方	山定	納札
横嶺	三七九、一八三	二七、七六〇	四、九〇二	一六、八三三	一〇七	六〇七	八	八	九	二〇	二〇、五
小崎	三六二、九三三	四六、三三三	四、四二五	一、六七六	八	四九五	九	四	一	二	二、五
中村	二五、七三三	二、八二八	一九、六二四	六、六〇九	八	三九六	六	三	一	一	一、〇
間戸	六、四〇一	五、一四四	四、一〇四	七、五二四	三	二〇〇	四	一	三	三	三、〇
眞木	二六、六六〇	四、三三九	七、三三三	一、三〇〇	五	四八二	六	四	六	三	三、〇
陽平	九四、二六八	九、八九五	五、六五四	六、八一五	九	一三三	七	一	四	一	一、〇
田口	六〇、五二二	五、九九二	五、八三六	三、六〇六	七	四七	四	二	四	一	一、五
熊野	四、七二六	六、七一九	三、二七九	二、六〇〇	三	七〇	二	一	三	一	一、五
大曲	六〇、六三三	八、九三四	四、九三三	三、五三四	六	八六	六	三	五	一	一、〇
上野	三〇、五八八	八、一四八	三、五八八	八、三三五	五	二八〇	四	二	八	七	七、五
相原	四二、八七四	七〇、八九四	二七、八三三	二七、八〇六	四	四三	五	二	三	一	一七、〇
池部	三三、三三二	一九、六六五	二二、六二四	一八、七〇二	八	三九六	三	二	七	一〇	一〇、五

第五章 交通・通信

第一節 高田海道

高田海道 是村内を通過せる唯一の縣道にして、又最も重要な幹線なり。西北高田、宇佐を経て中津に通じ、東南田原村、波多方峠を過ぎて杵築に通ず。蓋し王朝時代に於ては宇佐神宮竝に其の分祠たる奈多八幡宮に通ずる重要な官道なりと共に、當時に於ては寧ろ豊前豊後を連繫する幹線たりしを疑はず。降りて大友氏に至り、其の邊北防備に關心する所尠からず、殊に大内氏、毛利氏の對岸中國に於て、勢漸く強大となるに及び、切に其の須急を感せり。是に於てか大友氏は、親秀の六男木付大炊六郎親重を木付に、親秀の末弟田原藏人泰廣を沓掛城に、泰廣五世の孫吉弘又三郎正堅を屋山城に封じ、以て高田城に於ける高田氏と東西策應するに便せり。従つて本線道路は、唯一の官道たると共に、又征戰行軍の通路としても亦樞要なる使命を有したること無論なり。即ち其の初めは宇佐宮道として慣用せられ、後軍道としても重要視されしは、是自然の勢ひなり。やがて大友氏國除の後



も、本線は依然として豊前豊後連繋の官道として、其の重要性を失はず、國內國外、徂徠の行客、笠を傾けて田染耶馬の景勝を賞しつゝ、本線谿谷を辿りて旅行せし光景、彷彿として眼底に在るを覺ゆ。元祿七年貝原篤信益軒著の豊國紀行に云ふ。

高田より木付の間には馬驛なし山中を通るに其間田染と云ふ村有高田より三里有此所は軽く休み田染より木付へ四里半あり田染より東半里計行て道の西の傍に大岩、川の邊に高くそは立る有て凡十五六つらなれり其高さ十間餘り或八九間有り奇觀也羅漢寺のまへなる大岩に似たり其外かやうの珍しき岩まれなり其所をなへ山と云夫より南の方をこへ行此間路險しく坂長し東西の方へ山をのぼる事半里計、嶺より木付の方へ下る事一里半有此坂をはたかた峠と云ふ云々

蓋馬驛なきは、道路峻險、馬を利用する道程少かりし爲なり。殊に田染川中流、清瀧最も難道たり。是に於て田染組大里正河野所助通達、人馬の行に艱むを憂ひ、天保三年工を起し、清瀧の難路を避け、河岸に沿うて横嶺、高田間の新道を開鑿せり。是現縣道の嚆矢なり。次で明治五六年頃池部村地内に於て其の幅員を擴張し、上野村地内は舊道を廢して大石河原より下沓掛に至る新道を開鑿せり。然るに從來の縣道は、七田に於て、田染川を左岸より右岸に渡り、田井を経て見世に至りしを、明治三十六年三月十二日線路を左岸に變更し、以て現在の線路となる。現時田原、高田間には、日々數回自動車の定期運轉あり。交通頗る便に、以て高田驛發參宮鐵道を経て日豊線上下列車に連絡す。

### 第一節 落高田道路

富貴寺大堂參詣者の便を圖らむが爲め、高田より清瀧北方を經、直接に落の谿谷に入れる道路にして、坦道砥の如く、自動車を驅るに適す。

### 第三節 立石道路

真中より平野陽平を經て、速見郡立石町、日豊線立石驛に通ず。本線は田染より別府、大分若は中津方面に出づる最短距離の道路なるを以て、夙に田染立石兩町村間に於て、改築を企て、双方より其の大部分を竣功せしめ、中間半里許を残すに過ぎず、切に縣費開通を希望せり。

中山香道路 熊野、妙善坊を經て東山香村廣瀬と日豊線中山香驛とに通ず。路



面險惡なり。

里道 其の他村内各部落には夫々里道あり、交通に缺ぐる處なければども、間々路面の改善を要すべきものあり。

里程表 村内各地に至る距離左の如し。但小學校を起點とす。

井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	八、一四町
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一六、三九
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	三三、一〇
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一、〇二、〇二
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一二、〇八
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	二〇、五三
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	三〇、三二
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	三三、二七
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	二一、一九
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	三五、二五
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一、一三、三六
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一五、四三
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一〇、三六
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一四、二九
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一、〇二、〇九
井柳中二七落大上田今菊	下小升臺村	下真藤淵	小藤淵	升淵	臺村	村役場	一五、二七
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一二、三二町
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一五、二五
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一、〇〇、四一
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	二五、四七
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	九、五九
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一、〇二、三九
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一、〇四、一二
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一、〇五、四〇
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	二五、〇八
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	三〇、一二
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一二、二四
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	三五、五三
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	四、三九
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一六、二七
金相大落池落觀熊蘭陽間七穴原岩	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	福原日河ノ部中音野木平字戸枝木脇	一一、五四

現在交通機關 田染村に於ける昭和四年度現在交通機關は左の如し。

縣道 一里十五町

町村道 十一里三十三町

車輛數 自動車 四 自轉車 一七五 馬車 三〇 荷車 三

### 第四節 郵便局

田染郵便局は田染村大字真中に在り。高田郵便局を距ること二里二十二町とす。大正五年九月二十一日開設して一般事務を開始し、同年十二月電信事務を開始す。大正拾五年三月更に集配事務を開始せり。初代局長は二宮傳郎にして、現任局長は二宮靖男なり。事務員貳名、集配手四名を使用す。昭和五年の取扱高左の如し。

普通郵便受付	九九、二九二通	同	同	一九二、二七一通
小包郵便受付	一、一七七箇	同	同	二、三七二箇
電報受付	二、一七三通	同	同	二、四九〇通
爲替受付	三四、八六三圓	同	同	二三、五五一圓
貯金預付	六六、四七一圓	同	同	六九、五五二圓
保險契約	三〇三件	同	同	二八、四四一圓



# 第六章 産業

## 第一節 農業

### 一 水利

田染村は古來土地膏腴なるを以て聞へ、従つて米の産額多く、且つ米質優良に、舊藩政時代に於ては、島原藩の米廩として、他藩の羨稱する所となる。而して其の素因は専ら水利を得たるに歸す。田染平野を潤すものは實に田染川なり。源を田原村小野竝に朝田村波多方に發し、平野の中央を貫流して河内村に入る。支流に平野川、相原川、兩田川、池部川、小崎川、落川等ありて各々部落の灌溉用水となる。堰の主なるものは三ノ宮堰、堀田堰、大堰、大平堰等あり。左の池沼と相須ち相助けて、水田養水の供給潤澤なり。

- 惠良池 横峰 空木池 小崎 愛宕池 小崎 二ノ宮池 村中
- 燒山池 小崎 鳥越池 真木 大曲池 熊野 新池 上野
- 三ツ石池 相原 西原池 相原 兩田池 相原 一ツ石池 池部

- 山門池 池部 小河内池 露 山門池 露 甲ヶ平池 露
- 水ヶ迫池 露 三郎池 露 内ヶ迫池 相原 瀬戸池 田口
- 下池 田口 無畑池 熊野 一塚池 村中 鳥ヶ迫池 熊野
- 松原池 村中

### 二 築堤沿革

空木池 小崎村空木部落、峽間の高地にして、古來水利に乏し。依りて安永年中、戸田侯島原を領せし際、築堤の議ありしも、侯の轉封に會ひて果さず。寛政年中再び松平侯に稟請せしも其の容るゝ所とならず。偶々享和貳壬戌年大雨に逢ひて、假堤防を決潰し、下流の民家流失の厄に逢ひし者少からず、遂に天保五年更に出願の結果、同六年七月申兩年度に修築を許可せられ、代官高橋彌兵衛、命せられて工を督す。乃ち大里正河野所助通達に諮り、上野村里正庄屋渡部傳左衛門、小崎村里正安藤源三郎、横嶺村里正渡邊忠八郎等をして、直接土工指揮の任に當らしむ。尋いで代官清宮隆平、手代植木五十馬、彌兵衛の跡を承けて工事を督し、田染組越夫他村の應援夫三千四百七拾四人貳分、高田組越夫千九百九十三人壹分、通計五千四百六十七人三分を費して、天保七年春斯の大工事を竣功せしめし也。爲に官給の米九拾五石七



斗一升内小麥八石五斗四升六合を換算して五石七斗一升を算せりと云ふ。亦以て工事の尋常ならざりし一斑を見るべし。爾後再び旱魃乃至堤防決潰の虞なし。越夫供給の諸村は實に左の多きに達す。

森佐野、小田原、奥畑、二畑、真木、梅木、相原、上野、香掛、陽平、藤高、田芝、崎、檜林、加禮、川荒尾、松行、長岩屋、入津原、黒土、大平、大力、下來、繩上、來、繩志手、中村、算所、横嶺、熊野池、部草、地、知恩寺、中依、拂田、鴨尾、高宇田、田福、雷野、部、大原

新池池、荒田 田染村大字上野は舊上野村なり。里正渡部傳左衛門之を管す。田數三拾三町餘の内、三拾町歩は鍋山堰三ノ宮に、堰云に、貳拾町歩は小山堰に、九反七畝歩は自然水に各々其の養水を仰げり。而も鍋山堰上流は、杵築侯の所領に屬し、流に沿ひて數箇所の堰堤を設く。爲に水量潤澤ならず、年々旱害に苦む。加ふるに杵築領内の堰、從來の芝堰を赤土堰に改めたる爲め、流量愈々減じ、且小山堰は谿谷の細流にして、其の水量言ふに足らず。上野部落の旱害、忍び難きものあり、是に於て傳左衛門大いに憤を發し、文化三丙寅年、地を荒田に相し、築堤を請願せしも、藩は其の計畫の龍大なるを以て、成功を危み容易に之を許さず。傳左衛門深く之を憾み、已むなく文化十四年、官費を受けて鍋山大堰を修築し、以て一時の危を救ふ。而も灌漑猶意の如くならず、文政八年乙酉再び荒田築堤を建議し、遂に其の許す處となる。傳

左衛門乃ち欣躍奮起して率先事に當り、銳意工を督し一春を閲して竣功せり。堤長壹百參拾間、隧道を穿ち水路を通すること八十間。爾來全く旱害なきに至れり。降りて天保十五甲辰年再び荒田池の前提を修築す。

### 第二節 島原藩農政

島原藩風に民政に留意し、農事に賦歛に、一に人民の休戚を念とするを以て、民庶其の徳に悦服せることは、天下の周知する所に屬す。現に松平侯の寛政二己巳年、宇都宮に轉封を命せらるゝや、管下の人民は深く之を惜み、豊後國國東郡内五拾ヶ村、豊前國宇佐郡内四拾九ヶ村總代中村の九左衛門外六名は、江戸に赴きて松平侯留任の直訴を企てたり。事や不幸にして幕閣の容るゝ所とならざりしと雖も、徳澤民心に浹洽するに非ざるよりは、焉ぞ斯の如くなるを得んや。

島原侯由來農政に心を用ふること深し。農事を施政の第一義に置き、屢次告諭を發して、村民各々農事に精勵すべきを戒め、亦部下官憲を督して、上旨徹底の方法を講せしむ。天保九戊戌年節儉筋申渡候箇條書の一節に云ふ。

一、田畑作毛荒し候者共此柱江くゝり付置、可訴出と申杭村々へ立可申事



と、言ひ、亦天保十三年壬寅の豊州御領村々御取締箇條書に曰ふ。

一、村々共庄屋組頭繁々作場見廻り耕作方精不精之程心懸不精之者有之候はゞ  
吳々致教諭農業怠り無之様可申付事

と。以て農事に意を注ぐこと親切に、其の振否に關心するの痛切なるを知るべし。而して農事の振否、一に農民の生活状態、宜しきを得ると否とに基く。故に農民にして、風旱害に將蟲害に遭遇して、飢寒に迫る者あれば、間々米穀を貸し、若は惠與して以て之を救ふを常とす。其の償還を約して貸附したるものと雖も、民の清還に堪へざるに至れば、往々藩主は、其の債權を棄捐し以て、負擔を免れしむ。稱して夫食と云ふ。蓋し救恤米の義なり。記録寛政四十年正月の條に云ふ。

一、豊州御領村々夫食年々拜借の分返納穀數相重り難儀に及候に付去る戌年廿ヶ年賦に被仰付一統御憐憫之程難有奉存候以來格別之凶作に茂無之候得共容易に夫食拜借等願申間敷旨存入罷在候趣に相聞候處、尤亥夏大小麥至而不作に付秋作迄夫食取續兼無據願出候趣にて又候拜借被仰付候左候得は是より先年荷返納在之上右返納相重り小高無高者等は彌々難儀に及可申候に付格別之以御憐愍去夏御貸付之雜穀六百五拾六石三斗五升七合五勺三分捨り

償還免除 被仰付候誠に御憐愍之程難在恐入候儀に候間下方一統能々理解申聞農

業相勵夫食取續此末容易に拜借等不願出様に可申付候且又是迄追々夫食致借用節極々夫食實に及飢渴に候與申者計に不限相應之高持又は村役人等之内に茂却而餘分割賦受取候も有之趣に相聞候然時は自然と願名數も多分に相成極々差支候段申立候趣意に致相違且御時節柄をも不憚旁々恐入義に候間以來右躰之所聊心得違無之可成丈下方にも救合至而差支取續之手段茂無之及飢渴に候與申者在之節は組合之者より心を付村役人江申出候はゞ不捨置村役人實否相糺無相違趣に候はゞ大庄屋へ申出し候様申付、申出候上者餘組に申談等に不及組切に早速役所江可申出候其節は爲御救被下方可被仰付旨此度被仰出候間御趣意厚相心得組下村々役人江茂吳々申含置候様大庄屋より右之段可申渡候

正月

更に天明八年申四月の落村指出帳に曰く

難儀百姓夫食御願申上候得は冬より春迄に穀類段々に買方御出被下候代銀之儀者夏より秋迄に上納仕候別而難義之年柄には御救として穀類被下竝糶麥大



豆種不足之節は是又同前に無代銀被仰付候尤種類は石返納に被仰付來候  
と凶作飢饉に際して、救恤米を恩賜貸與さるゝのみならず、種子不足の際には、無料下  
附の恩典あるは、島原藩の仁政、到れり悉せりと謂ふべし。

文久貳年<sup>戌</sup>御用<sup>觸狀</sup>諸願<sup>日</sup>記控帳と題する記録に云ふ。

態申觸候、然者當麥作生立之様子申上候様御沙汰に付村々與當時之模様書付を  
以明後三日迄此方へ御申出可有之候

一、夫食御貸渡相成候に付而者友救急に取調申上候様御沙汰に付御取調來る四  
日迄此方へ御差出可有之候以上

四月朔日

田 染 所 助

以上の諸記録を一瞥せば、島原侯が農村の爲に圖りて忠且親切なるの狀、彷彿とし  
て目睹するの感あり。

又積極的に農事改良に盡瘁せし事蹟は、肥前海屢次鯨族の漁獲あり、鯨油豊富な  
るを以て、之を農民に貸附し、水田殺蟲に使用せしめたる實例あり、某家所藏記録帳  
寛政三亥年の際に云ふ。

樽數拾貳挺

一、鯨油四石八斗

田 染 組

田方反數 五百拾五町四反廿一步割

但壹町に付九合三勺少し餘に當る

一、同四斗

但一挺

追割分

同一升

追割熊野村へ遣し缺に相成り

合五石貳斗

右五石壹斗九升

但三分一御償、三分二村取立に被仰付候

壹挺に付八貫壹文に直段被仰付候

右代反數百四貫拾三文

但五石壹斗五升割

壹升到付貳百文四分一厘少餘に當る

右割之事

一、丁錢六貫貳百拾三文

上 野 村

十二月十三日納



油三斗  
追割一升

右者當夏永雨にて田方蟲氣強有之候に付鯨油御役所より御許借被仰付田方町數に割賦致相渡し申候所此度三分一御償に被仰付相殘三分二銀御取立被仰付候依之致割荷申候違等候はゞ早々御申出可有之候取立之義來八九月限に無相違手代方へ御差出し可有之候爲其申入候以上

十二月三日

田染勝太夫

酒井三郎左衛門殿

谷川岩右衛門殿

大島彌惣治殿

重ねて云ふ。以上の如く凶作飢饉に際し、細民の困窮を賑恤せむが爲め、島原藩は隨時夫食貸與を許可したりと雖も、而も窮民其の清還に耐へざるに至れば、藩は往々にして其の債權を棄却したり。所謂「捨り」是なり。元治貳年貳月、田染組大里正河野所助通の觸狀に云ふ。

態申觸候然者

殿様御入に付而者去る酉年飢夫食、同年早魃夫食同借之分共悉皆御捨方にも可被仰付處御時節柄に而其義不被爲届依之右口々四歩一捨方、殘石年賦之義者是迄之通相納候様被仰付候間此段御承知  
御仁惠之程村々者端々迄不洩様御申聞可有之候以上

二月

田染所助

右村々庄屋中

又窮民にして不幸疾病に罹り、自ら醫療の費を辨ずる能はざるもの、若は生活不能に陥れるものに對しては、隨時官金を貸與したり。左記の證券之を證して餘あり。

差上申證文之事

一金拾五兩 病難拜借來寅より午迄五ヶ年賦

三内

三 夕

寅年返納

貳 夕

同 斷



三 同 斷  
三 同 斷  
三 同 斷

右者病難拜借書面之通被仰付重疊難有奉存候返上納之儀者來寅より午迄無間  
違五ヶ年賦年貢中急度上納可仕候萬一拜借元御返納相滯候はば村役人加判之  
頭百姓引受辨銀可仕候爲後日奉差上候證文如件

元治二年

拜借人

丑正月

以上記する所、以て歴代の島原侯が、農政に留意盡瘁したる一斑を想見すべし。  
其の領内農事に直接間接影響したる處、蓋し鮮少なからざる也。至誠は天に通ず、況  
んや人に於ておや、島原侯の如きは、眞に牧民綏撫の眞諦を得たるものと謂ふべし。  
是に至りて君民猶ほ父子の如し、相依り相助けて一箇和樂の福苑を現出し來るこ  
と偶然ならざるなり。上野某家所藏記録帳の一節に云ふ。

一天明二寅年

殿様寸志指上候右に付御酒御肴頂戴被仰付候尤七月九日に大庄屋本に而庄屋

組頭罷出頂戴仕申候、御盃汁椀五合入、か蛤御吸物一通、引肴三通、村中頂戴七月十  
二日庄屋本に而頂戴、御酒汁椀三献、御肴さばのすし人數百五人

所謂御酒下されなり。無邪氣なる農民、人頭大の汁椀にて滿を引き、鯖鮓に舌鼓打  
ちたる光景睹るが如し。史に記す、天明元年辛丑上州武州五十三ヶ村の農民、市場  
端物並貫目改所設置を憤りて一揆を起し、降りて同四年甲辰東國飢饉にて餓死す  
る者數十萬人と。斯の修羅悲鳴裡に於て、九州單り斯の歡樂郷を觀ること、決して  
偶然ならざるなり。

### 第三節 島原藩租法

地租の輕重は、農事の隆替に影響する所尠からず。本邦正税租法の沿革を案す  
るに、大化の新政、正税は收穫米百分の三を課せり。而も武門權を執るに至り王制  
紊れて度なし。殊に足利氏苛斂誅求甚しく、八公二民の比率を示し、豊臣氏は六公  
四民となり。徳川氏五公五民の法を用ひたりと雖も、其の實際に行はれしは殆ん  
ど公料即直轄地に限られ、諸侯は概ね七ツ成即ち七公三民を採用せり。三浦梅園  
の丙午封事にも、徳川氏の法五公五民と云ふと雖も、實際に積算すれば七ツ成なり、



杵築藩の如きも七ツ成の計算となる旨を記せり。上野村舊里正渡邊左間太の語る所に依れば、島原藩亦大要七ツ成を採用せりと云ふ。七ツ成は決して輕き稅率に非ず、島原侯の善政主義と稍矛盾する傾なきに非ずと雖も、元來徳川氏の農民駕御は所謂死せず、富まさる程度に搾取するを、主義方針としたれば、單り島原藩のみ、此の主義を無視して、徳川氏に睨まるゝを不得策とし、表面租率のみは之を世間並とし、一面石盛、取箇に手加減を加へ、以て誅求に陥らざるを期したるに非ざるか。由來島原侯の善政は、單に編者の私言に非ず。三浦梅園の封事にも、此の點を唱道しあれば、當時一般に喧傳されたるを想像すべし。石盛とは租を賦課するが爲め、設くる等の穫米率にして、所謂坪刈を行ひて其の粃を量り、以て一反の粃高を知る。即ち一步に粃一升ならば、一反の粃は三石なり。五合摺一升を摺りて米に五合を得るこにして、米一石五斗を得。即ち一斗を一箇として上田十五箇の石盛を算出す。稱して取箇と云ふ。即ち課稅の基準なり。之に奇零七を乗じて一石五升の租米を得る也。而も取箇算出は決して奇零以下を逸せず、何分何厘何毛何絲迄計算するを常とす。稱して厘取と云ふ。徳川氏の法、從來田畠の等級は、上中下の三等なりしを、貞享三年上々下々の二等を追加して五等となす。今天明八年申四月の指出帳を見るに、

落 村

田染組落村は、田畑共に左記の如く六等に、同上野村は田六等畑五等に分てり。

上	上々一石一斗五升	上	上々六斗
中	一石一斗	中	五斗
下	九斗	下	四斗
下々	八斗	下々	三斗
三下	五斗五升	三下	一斗五升
三下	四斗		

田方石盛

畑方石盛

上野村

上	上々一石四斗	上	上々六斗
中	一石貳斗五升	中	五斗
下	一石一斗	下	四斗
下々	九斗	下々	三斗
三下	七斗	三下	二斗
三下	六斗		

田方石盛

畑方石盛

地租徵收の方法に二あり。檢見又毛見取、定免是なり。定免とは、十年十數年平均の石盛を算出し、或期間課率を据置くもの、檢見取とは、年々地頭より、吏僚を派出し、實際に立毛を檢せしめ、其の豊凶に依り、隨時取箇を定むるものなり。而して檢



見に、小検見、大検見、居検見、遠検見若は投検見等あり。蓋し居検見は、單に村役人の報告を査閲し、遠検見若は投検見は、遠く立毛状態を觀望するに止まるものなり。故に縦令七ツ成の租率を定むと雖も、検見の方法に依りては、所謂御仁政の斟酌調節を加へ能はざるに非ず。要は租率の高低に拘泥すべきに非ず。結局其の基準たる石盛取箇の算定に緩嚴の差あるのみ。思ふに善政の德澤、民心に浹洽せる島原侯の用意、亦那邊に透徹せるものあるを信ず。今唯適確なる記録數字の是を證し能はざるを憾とするのみ。但し現代より觀察するとき、上々田一反の石盛壹石壹斗五升乃至壹石四斗は、決して苛察なる査定に非ざる也。

因に記す。右指出帳に依れば、當時各村の庄屋給、組頭給は、何れも村高より之を控除せり。即ち上野村は庄屋給四石、組頭貳人給壹石、落村は庄屋給四石、組頭三人給壹石五斗を控除す。其の他庄屋帳簿紙代米三斗宛は、何れも村民の課出に係る。指出帳の一節に云ふ。

一 御役人様方御廻村之節、村賄代錢朝夕百拾文、晝燒飯代貳拾文、下等賄の意朝夕九拾文、晝燒飯代貳拾文、宛被下候

即ち郷村巡視代官手代の旅費食料官給に屬するを云ふ。一食二錢の燒むすびを

咀りつゝ、民政に努力したる當時吏僚の簡素なる、頗る隔世の感あり。又以て藩主牧民の態度如何を窺ふべきか。今検見實狀を窺ふの便に供せむが爲め、指出帳より左記二條を抜抄す。

一 田方合付出來方検査御出郷被遊候節は、郡御奉行様御越被遊村々御廻り中晩田に而壹歩刈被成村々庄屋本にて頭百姓共糶拵へ仕、有現在糶量何程と御書付並田位等級地主名御書付御通退被成候

一 早中晩田共に不作仕候坪、檢見大積り概算の意仕村役人並頭百姓每年初秋頃大庄屋本、氏神宮に而誓紙血判仕夫より田方坪々立毛見平見ならし一步刈仕、尤定合御究出來高決定被仰付下改め道引帳豫備査定報告出來仕候得者、大庄屋本相改申候下改相違無御座候得者、御代官様御見分之上、向升中毛之方出來方中等の箇所に而一株越に御刈被成候

第二項は凶作田租減免の場合を謂ふ。檢見豫備査定に従事する組頭、頭百姓等、大庄屋本の氏神前にて、神明に私心なきを誓ふなど、何ぞ其の事の莊重なるや、而して代官の實地査定に當りても、公平適確を期するため、一株越に刈取らしむる等、以て用意の周到なるを看る。



#### 第四節 現代農業

大政維新、明治六年七月、地租改正條例を公布し、全國の土地を丈量し、官民有の區分を明かにすると共に、各所有者に地券を下附し、土地の收穫と金利とを參酌して地價を定め、其の百分の三を課稅率となす。是に於て租法甫めて王朝の古に復せり。爾後農業長足の進歩を來し、天保七申年、貳百四十餘町歩を算したる田染組の田數は、昭和四年度現在、田染村臺帳面に依れば、四百拾四町七反を算し、約百七十四町歩を増加したり。是一面逐年農業の進歩と、檢地丈量の精密とに依るべしと雖、又島原藩領有時代に於て、檢地丈量の寛裕なりしを反證するものに非ずや。否か、又以て松平子爵家累代の善政が、田染村に惠賜したる所鮮少なからざるを知る。

##### 一 耕地整理

政府耕地整理法を實施するに及び、速見郡八坂村先づ之を實施して唱首となり、西國東郡中眞玉村亦夙に之を行ふ。本村池部整理區、由來沮洳の地にして泥濘の深五尺餘に達し、常に鷺群の集散地たり。爲に牛馬耕耨に依るを得ず、一毛作田にして年收一反步四斗に過ぎざるを以て、土地所有者相諮りて、整地を企て、明治三十

九年十月工を起し、同四十年五月竣功せり。整理前の地區面積は七町七反七畝十步、並に國有地一反一畝二十八步、整理後の面積七町七反七畝十五步、並に國有地を編入し、總面積八町貳反三畝貳十壹步とす。工費總額貳千九百五拾圓

##### 二 村農會

田染村農會は、事務所を大字眞中字戸原四〇九番地の一に置く。政府農會令を發布するに當り、明治三十拾年創立す。

##### 三 農事小組合

現在村内に四十四箇の農事小組合を設置し、村農會と提携して、地方農事の改良向上に努力す。

##### 四 養蠶組合

本村農業中、普通農事米麥作に亞ぎ、最も重要な位置を占むるは養蠶業なり。現に全村畑貳百七十一町四反の内、桑園反別は實に百〇七町五反に達し、畑全面積の約四割を占め、昭和貳年より同五年に至る四ヶ年平均計數は、養蠶戸數四百、蠶種掃立枚數貳千五百枚、産繭額一萬六千貫、金額七萬五千圓を示す。依りて斯業振興の爲、大正七年相原養蠶組合、同八年南部養蠶組合、並に横嶺養蠶組合、同九年小崎、池部



の兩養蠶組合、同十年落養蠶組合を組織せしが、其の後組織を改めて、西國東郡養蠶同業組合田染支部となし、支部に二十四箇の養蠶小組合を設置し以て現在に及ぶ。事業成績優良にして、高田、香々地に亞ぎ、郡内第三位を占む。

### 五 農産物計數

昭和四年度田染村々勢一覽登載の農産物計數左の如し

品名	數	量	價	格
米		五、九二七石		一六〇、六一〇
麥		一三、六七二貫		八六、三八八
繭		四、九〇〇石		六、〇三三
桑葉		二五〇、七〇〇貫		四九、三六五
七島		一一、二〇〇貫		五、六〇〇
蠶種		三、〇〇〇枚		四、五〇〇
大豆		二六〇石		四、六八〇
青芋		二、一〇〇貫		三、一〇五
甘藷		二、三〇〇貫		二、八七〇
生柿		一一、〇〇〇貫		一、六五〇
其他		六、〇〇〇貫		一、五〇〇
計				三二六、三〇一

### 米麥検査俵數

種類	昭和三年度	昭和四年度	昭和五年度
米	一三、一〇四俵	一〇、九九三俵	一四、六七八俵
麥		八三五	一二五
小麥		五二〇	二二六

但昭和五年度ハ翌年三月迄ヲ含ム

## 第五節 林業

### 一 舊藩林政

舊藩林政は、目下農林省乃至營林局、營林署等に於ても、調査考究中に屬し、未だ成稿を告げざるを以て、其の適確なることを知り難しと雖、天明八年申四月、田染組落村並に同上野村の指出帳に依れば、略々島原藩林政の梗概を窺ふを得べし。即ち領内凡ての山林を分ちて、御林山御留山、御免許山、請山、仕立山、四壁の五種となす。御林山は即ち純粹の官林にして、御免許山は當今の所謂部分林、請山は村民に於て地上權を設定して造林する者にして、其の實質は私有林なり。四壁は村民各自宅の



外園にある雜木林を謂ひ、仕立山は、新に造林せる土地を謂ふ。而して請山、四壁は何れも相當の地租を納入したるが如し。今記録に依り、各種山林の内容性質を左に叙せんとす。

八〇

### イ 御 林 山

落村指出帳は、其の一節に「當村御林山貳拾七ヶ所此反別拾壹町貳反歩」と記し、一仕立山は仕立主材木御願申上候節は半直段に被仰付候末木末葉は仕立主に被下來候本直段は壹人持に付代銀四分宛枝葉下刈は御斷不申上伐取申候と記し、尙兩村指出帳に左の記事あり。

- 一 往來の道橋入用之竹木は御林山にて被下方に申請來候
- 一 用水方並に往來道具入用之竹木は御林山にて被下方に申請來候
- 一 火難の節類焼百姓屋作入用之竹木御林にて被下候
- 一 百姓屋作修理方等入用之竹木御林ニ而買方ニ御願申上來候但材木壹人持代銀七分小柄竹貳尺五寸廻り壹束ニ付代銀八分五厘、中柄竹壹束ニ付九分五厘之御定直段に御座候
- 一 御林山之内落葉草茅百姓薪ニ取來候其上田畑こやし芝士取來候

但松葉春ニ至難儀百姓爲渡世半直段又は被下方にも被仰付來候尤本直段ハ壹束ニ付貳分五厘

一、大庄屋大里正小庄屋小里正自分薪御林山ニ而被下候壹荷三尺廻り貳束指代銀三分五厘、松葉五尺廻壹束代銀貳分五厘差上來候  
以て、純官林と云ふと雖も、亦村民に對し、種々の恩典あるを觀る。

### ロ 御 免 許 山

落村指出帳は、御免許山に關し、免許山拾五ヶ所、此反別七町壹反歩」と記し、御役所納薪等伐申候成木下草等は勝手次第伐申候尤用水入用の節三尺廻り以上ハ御斷申上伐申候

と註し、上野村指出帳は  
一、用水川除ケ土木柵不時欠損候而御田地障り成り急成節ハ免許山之内ニて披棄投棄杭木等村役人山留立合急損相繕申候大立候儀ハ臨時ニ御斷申上候と記せり。

### ハ 請 山

請山に關し、落村指出帳は「一請山貳百貳拾九ヶ所此反別拾壹町壹反五畝廿一步」



と記し、但入用之節請主勝手次第ニ竹木伐取申候尤三尺廻り以上之木は御斷申上  
伐取申候御用竹木御伐被成候得者相應之代銀被下來申候と註せり。地上權設定、  
村民の造林に係ると雖も、巨樹伐採に關して若干の干涉を加ふるは、注目すべき點  
なり。

二四 壁

露、上野兩村指出帳共に、各々其の所屬四壁面積を記し、其主竹木入用之節は伐取  
申候尤三尺廻りハ御斷り申上村役人山留立會爲伐申候と註せり。此處にも亦藩  
官憲の林業政策として多少の檢束干涉を加ふ。

二 山林保護政策

島原藩の制、各村に庄屋、組頭の外、特に山留の一職を置き、専ら森林監守の責に任  
せしむ。而して庄屋高四十石、組頭三人高九石露村の例の諸役夫代高割免除に對し、山留  
には高拾石の諸役夫代を免し、且出務日當を給す。出務日當一人一日米五合とし、  
勤務日數を大庄屋に報告し、六月十二月の兩度に、高田役所より支給せらる。又村  
民の漫に山林に入るを禁じ、豫め山札、步行札若干枚を各村に給付し、以て隨時官林  
に入る者の査照となす。而して山札、步行札共に若干の運上税を課す。上野村指

出帳には、一山札拾五枚此銀七匁五分、但步行札一枚ニ付五分、沓掛村山運上銀納來  
候と記せり。別に立花眞松札貳枚あり。蓋し立華に用ゆる松樹眞幹採取の爲め  
山林に入る者に給付する特許券なり。然るに立華眞松札は島原侯入國の際、其の  
發行を停止し、既に給付せられたるものは返還を命じたりと云ふ。又以て植林保  
護の周到なるを觀る。又積極的植林政策としては、毎年正月十一日御林山即ち官  
林に、松苗を植栽せしむるの制あり。

三 現在の村林業

村現在林業の狀況は、大要左の各表に具するが如し。

村内公私有林面積

所有主	林況		木		地		計
	針葉樹林	闊葉樹林	針闊混在林	竹	林	無立木地	
道府縣有	反		反		反		反
郡有							
村有	三〇				三〇		六〇
部落有	六〇〇				六〇〇		一、二〇〇
其他公共	一〇〇				一五〇		二五〇
有							
公							



位置	所有者	面積	植村年月	樹種	備考
小崎	上組共有地	一、三、八、一四	大正四年	杉、松、檜、竹	郡農會ニ貸付造林
小崎	上組共有地	一、三、八、一四	大正四年	杉、松、檜、竹	郡農會ニ貸付造林
小崎	上組共有地	一、三、八、一四	大正四年	杉、松、檜、竹	郡農會ニ貸付造林
小崎	上組共有地	一、三、八、一四	大正四年	杉、松、檜、竹	郡農會ニ貸付造林

部落共有地造林

樹種	面積		樹種	面積	
	公有	私有		公有	私有
計	1	1	計	1	1
杉	1	1	杉	1	1
扁	1	1	扁	1	1
松	1	1	松	1	1
櫟	1	1	櫟	1	1
苦竹	1	1	苦竹	1	1

人工造林

合計	面積		合計	面積	
	公有	私有		公有	私有
計	25	5	計	170	200
針葉	1	1	針葉	150	160
樹林	1	1	樹林	20	20
潤葉	1	1	潤葉	1	1
樹林	1	1	樹林	1	1
混在	1	1	混在	1	1

天然造林

計	面積		計	面積	
	公有	私有		公有	私有
計	2,730	5,000	計	400	21,400
社寺	1	1	社寺	1	1
神社	1	1	神社	1	1
寺院	1	1	寺院	1	1



字路川原畑	字路二田野	兩相田川内原	字相ハヤマ原	字平地嶽石野	字眞城中	字平小曲野	字平小曲野	字平小曲野
山路下分	山路下分	共有地名	共有地名	共有地名	共有地名	共有地名	共有地名	共有地名
五、五〇、〇〇〇	二、六、二九	一八、四、〇〇〇	一、九、〇、〇〇	二、一、〇、〇〇〇	〇、二、四、〇〇〇	三、〇、〇、〇〇〇	一〇、〇、〇、〇〇〇	一〇、〇、〇、〇〇〇
大正六年	大正六年	大正五年ヨリ三年	明治四十年二月	大正六年			大正四年	
松	松	松	松	杉	松	杉	竹	松、杉、檜
一六、五〇〇	一〇、〇〇〇	五五、二〇〇	一六、八〇〇	六、三〇〇	九二〇	一〇、五〇〇	四二、〇〇〇	四二、〇〇〇
實測面積	臺帳面積	實測面積	臺帳面積 學校基本林	實測面積		實測面積		實測面積

第六節 其の他の産業

田染村は、由來純農村なれば、農林蠶業の外特に着目すべきものなく、工業、鑛業、水産、畜産は、現下甚だ盛ならず、依りて單に其の産額を掲げて、一斑を知らしむ。

工産物 昭和四年末現在

品	種	數	量	價	格
清酒	細工	二五〇	石	二二、五〇〇	円
石	製	一一、〇〇〇	枚	九、八五〇	
木	製	三、一〇〇		三、一〇〇	
菓	子	三、〇〇〇		三、〇〇〇	
器	粉	一、八〇〇	斤	一、八〇〇	
其計	他	七、五〇〇		七、五〇〇	
		五〇、八五〇		五〇、八五〇	

鑛産物 昭和四年末現在

品	種	數	量	價	格
灰	石	無	盡	六、〇〇〇	円
鑛	水	無	盡	六、〇〇〇	円

畜産 昭和四年末現在

品	種	數	量	價	格
鶏	卵	一〇、五六六	個	四、二六六	円

第六章 産業







並に同位置を改定さるゝや、舊七村は池部村原村、池部村、相原村、上野村、真中村嶺崎村、真中村、平野村の二村となる。依りて學校組合も亦分離して二となり、池部村は從來の校舎を襲用して、東田染學校と稱し、真中村は、字真中渡邊駒平宅に校舎を置き、西田染學校と呼べり。

相原尋常小學校 明治十九年、小學校令の新に公布せらるゝに及び、村民は過去三年間の經驗に徴し、兩校分立の不利なるを感じ、翌貳拾年、東西兩田染學校を併合して相原尋常小學校と改稱す。乃ち從來存續せる落分校を簡易學校に改め、又字平野に平野簡易學校を設く。明治貳拾貳年、町村制を實施し、池部村、真木村を合して田染村と稱す。

田染尋常小學校 明治二十四年五月、校名を改めて田染尋常小學校と稱し、同貳拾五年、落、平野兩簡易學校を本校の分校となす。同年八月、田原、朝田兩村と聯合して學校組合を組織し、西國東郡南部高等小學校を、田原村大字沓掛に設置す。明治三拾年四月、就學兒童の増加と教室狹隘、且つ朽敗せるとに鑒み、校地を擴張し、校舍新築の功を起し、同年十月十八日落成式を舉ぐ。明治三十一年十月十五日、本校内に、南部高等小學校田染分校を開設す。明治三十三年、平野分校就學區域内の寄附金と村費補助とに依り、大字真中字田ノ口尻に、同分校校舍新築の工を起

し、翌三十四年二月一日落成式を舉ぐ。明治三十五年、大字落字堀口に、落分校校地を設定し、校舎を新築す。校地は篤志家の寄附に係り、工費は區内寄附金並に村費補助に須つ。同年九月十四日落成式を舉行す。

田染尋常高等小學校 明治三十五年、本校に高等科併置の前提として、校地を擴張購入すると共に校舎を増築す。同三十六年三月二十三日竣工、四月一日を以て田染尋常高等小學校と改稱す。是に於て田原、朝田兩村との學校組合を解く。明治三十七年四月、修業年限三ヶ年の高等科を四ヶ年程度に延長す。明治三十九年四月廿七日、校舎増改築の前提として、貳箇年繼續支出として、校地隣接地田買収を村會に可決し、敷地約貳反六畝歩を増す。

明治三十九年五月、落分校教場接續の畑地約四畝歩を借用して運動場を擴張す。

明治三十九年十一月、從來平野分校教場敷地に借用せる畑六畝歩を購入し、且同分校場校舍に大營繕を加へ、教室を四坪半擴大す。

明治四十年五月、縣道に沿ひたる本校々地の外柵を改造し、同年九月、從來木造の校門を撤して石門に改む。

明治四十一年五月、校舎増築の設計成り、同月三十一日村會に於て、明年度増改築



實施を議決す。

明治四十一年八月、當時拂下げ民有となれる國有林を購入して本校栽樹地となすの議を決し、大字相原字葉山に就き、伐木跡地壹町九反歩を購入す。

明治四十一年十一月二十日、當年度内に於て、増改築工事準備金參千圓蓄積を議決す。

明治四十二年六月十八日、校舍増改築豫算議決、同年七月校地南隣の宅地壹畝六歩を購入擴張し、同月三日移轉改築及増築の認可を受け、同二十日移轉改築の分を請負に附し、八月一日改築に着手す。同年八月十一日増築校舍工事を請負に附し、九月三十日移轉改築竣工、明治四十三年三月、増築工事竣工、五月二十五日を卜して、未曾有の盛大なる落成式を舉行す。本工事計畫樹立より凡五閱年、工費土地買收費合計約一萬三千圓を算す。

大正十四年七月十日、御眞影奉安殿建築認可指令あり、同十五年五月十三日成功検査を受く。依りて同年六月七日午前八時、神職を聘して奉安殿の修祓を行ひ、同日午前十時嚴肅に御眞影遷座式を舉行せり。

御眞影下賜記念日

天皇陛下 御名睦仁 皇后陛下 御名美子 明治四十三年五月十七日

天皇陛下 御名嘉仁 皇后陛下 御名節子 大正四年十月廿七日

天皇陛下 御名裕仁 皇后陛下 御名良子 昭和三年十月十日

昭和六年二月八日

(御取替下賜)

學校創立記念日

明治七年五月二十五日

就學兒童計數

年 度	就 學 兒 童 計 數		年 度	就 學 兒 童 計 數	
	尋 常 科	高 等 科		尋 常 科	高 等 科
昭和五年	五七七	一一三	明治三十三年	三二二	三二二
大正十四年	五一七	一一三	明治三十八年	二九八	二九八
大正九年	四八八	一〇二	明治二十三年	二〇九	二〇九
大正四年	四八〇	九四	明治二十一年	一一〇	一一〇
明治四十三年	四九六	五三	明治七年	—	三五
明治三十八年	三七〇	一四二			



歷代學校長 首席教員

職名	氏名	任命年月日	轉退年月日
訓導	米良亮 藏晦堂	明治十年二月 東田染學校	明治十八年一月
同	浦山清太郎	明治十七年 西田染學校	明治二十年
同	平井正利	明治十八年一月 東田染學校	明治二十年
同	磯矢恒男	明治二十年	明治二十一年
同	近藤章太郎	明治二十二年	明治二十三年四月
同	中川彌六	明治二十三年八月	明治二十三年十二月
同	得能笑吾	明治二十四年五月	明治二十四年十一月
同	村岡常二郎	明治二十四年五月二十九日	明治二十五年七月二十五日轉任
同	佐藤二十二郎	明治二十六年五月二十九日	明治三十五年四月十日退職
兼訓導	瀧口壽一	明治三十六年五月四日	大正五年四月十七日轉任
同	加藤重作	明治三十八年八月三十一日	大正八年八月三十一日轉任
同	桑尾重代	大正十三年九月二十五日	大正十四年三月三十一日
同	本明徳藏	大正十四年三月三十一日	昭和四年十月十四日
同	桑尾重代	昭和四年十月二十八日	
同	小野與十郎		
同	廣岩了忠		
同	土屋忠		

教育費

年	度	經常費	臨時費	計
昭和二年		一三、九〇八		一三、九〇八
昭和三年		一四、五八三		一四、五八三
昭和四年		一二、四六五		一二、四六五
計				一三、九〇八

第二節 田染農業補習學校

位置 田染尋常高等小學校內  
 創立 大正三年四月七日  
 校長 土谷 忠  
 現任 男五二 女四八 計一〇〇  
 生徒數

第三節 田染青年訓練所

位置 田染尋常高等小學校內  
 創立 大正十五年五月廿九日



職員 主事 土谷 忠

教練指導員 財前利策 永松安敏 豊田袈裟治

生徒數在 一年次 一六 二年次 一五 三年次 一八

四年次 一三 計 六二

### 第四節 青年會

事務所 田染尋常高等小學校内

創立 明治四十三年五月二十一日

### 第五節 處女會

事務所 田染尋常高等小學校内

發會 大正七年四月廿四日

現員數在 一五七名

## 第八章 兵事

明治戊辰の戰役終局を告ぐるや、政府は地方警備に當らしむる爲め、明治四年四月、始めて西海道鎮臺を小倉に、分營を博多日田の二ヶ所に置く。乃ち熊本、佐賀の二藩より歩兵各一個大隊を徴して、二箇所に分屯せしめ、兵部大丞井田讓を其の長官となす。尋いで同年八月二十日、西海道鎮臺を廢して、鎮西鎮臺を熊本に置き、豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後、壹岐、對馬の八ヶ國を管轄せしめ、本營を熊本に、第一分營を廣島、第二分營を鹿兒島に置く。同年九月二日、井田讓、陸軍少將に任ぜられ、依然兵部大丞として、其の長官たり。明治六年一月九日、鎮西鎮臺を改めて熊本鎮臺と稱し、九州及び壹岐、對馬を管轄せしめ、本營を熊本、小倉の二箇所に、分營を日田に置く。而して小倉本營を小倉營所と稱す。同五年四月、陸軍少將桐野利秋前名中村、熊本鎮臺司令官に任ぜらる。明治廿一年五月廿一日、從來の兵制を更め、師團組織となすに及び、熊本鎮臺を改めて、第六師團司令部と稱す。此の間、國東郡、西國東郡は、明治四年以來、順次西海道鎮臺以降、第六師團の所管に屬し、日清戰役直後、明治廿九年九月、陸軍常備團隊配備變更の結果、歩兵第四十七聯隊を、小倉市外北方に創設し、



第十二師團に屬せらるゝに及び、始めて第十二師團の管下に入る。尋いで大正拾四年、軍備整理に由り、五月一日、歩兵第七十二聯隊を編合して、歩兵第四十七聯隊を大分に置くに及び、復び第六師團の管下に屬す。

### 第一節 各歩兵聯隊創設

歩兵第十三聯隊 明治八年三月二十七日創設、同年九月九日、軍旗を親授せらる。

歩兵第廿三聯隊 明治十七年七月一日第一大隊のみを熊本に新設す。明治十九年六月五日、聯隊本部及び第二大隊を設く。明治十九年八月十九日、軍旗を親授せらる。

歩兵第十四聯隊 明治八年四月一日創設、明治八年九月九日、軍旗を親授せらる。

歩兵第四十七聯隊 明治二十九年九月創設、明治三十一年三月二十四日、宮中に於て軍旗親授、同二十九日聯隊に到着す。

### 第二節 熊本鎮臺竝に第六師團戰歴

熊本鎮臺竝に第六師團の戰歴は、歩兵第四十七聯隊創設以前の分左の如し。

一、明治六年一月十三日 大分縣に土寇起り、日田分營に在りし兵一小隊を遣り之を鎮定す。

一、明治七年二月十四日 佐賀江藤新平の亂鎮定の爲、歩兵第十大隊熊本を派遣し、三月一日之を平定す。

一、明治七年四月五日 臺灣征討の命を受け、歩兵第十九大隊熊本派遣、同年十一月廿五日凱旋す。

一、明治九年十月廿四日 熊本神風黨の變あり。

一、明治九年十月 筑前秋月に暴徒起り、歩兵第十四聯隊倉小第一、二大隊を派遣し之を鎮定す。

一、明治十年二月二十二日 西南戰役鎮定に參加し、同十月六日終局を告ぐ。

一、明治二十七年十二月 日清役出動の命を受け、同二十八年五月二十五日凱旋す。

### 第三節 歩兵第四十七聯隊戰歴

日露戰役 明治三十七年貳月五日、動員令下り、翌六日先遣大隊出發、次に主力は十



六日長崎出發出征の途に就く。全軍の魁たり。渡韓後第一軍の戦闘序列に入り五月一日九連城の攻撃を緒戦とし、八月下旬に至るまで山地を跋渉、各地に轉戦せり。尋いで右翼師團たる第十二師團に屬し、遼陽、沙河、奉天の會戰に参加し、同三十八年三月十日興甸附近の敵を撃攘し、長驅之を追撃したるを最後の戦闘とす。同年十月十六日平和克復し、十二月八日屯營に凱旋せり。該戦役に於ける戦死者將校十、下士卒三百拾貳名、負傷者將校貳拾八名、下士卒一千〇九十名なり。

韓國駐劄 明治四十年七月二十六日、門司港出發、同二十七日釜山上陸、同九月七日以降所々の暴徒討伐を行ふ。明治四十一年六月十二日、屯營に歸還す。

西伯利事件 大正七年八月二日動員下令、八月二十六日、浦鹽斯德上陸、九月十四日アルハラ附近の列車戦闘に於て、第一機關銃隊及び特殊砲隊は、師團長より感状を授與せらる。爾後各地の過激派討伐を行ひ、大正八年六月二十八日、浦鹽斯德港出發、七月三日屯營に歸還す。

濟南事變 昭和三年四月十九日、山東出動準備命令を受領し、同四月二十四日、門司港出帆、同二十八日濟南に到着す。五月三日支那南軍掠奪に端を啓き、濟南商埠

地の市街戦となり、三日、四日に亘りて之を掃蕩す。五月八日より十一日に亘り、濟南城攻撃に参加し、九日外城占領、同拂曉濼源門を占領す。爾後商埠地の警備に任じ、八月三十一日青島出發、九月五日屯營分に凱旋す。本事變に於て、戦死下士卒拾三名、負傷者將校五名、下士卒三十四名なり。

第四節 戦病死軍人名簿

氏名	階級	戦役	戦病死年月日	戦病死箇所	墓地所在地
江口太郎吉	重砲兵一等卒	日清	明治二十八年七月十三日	清國柳樹屯病死	大字露富貴寺南方約十五町
富田泰龍	重砲兵上等兵	日露	明治三十七年八月二十五日	長嶺子定立病院戦傷病死	大字峰崎延壽寺東方約一町
田邊實	歩兵軍曹	同上	明治三十七年九月四日	清國大達連溝戦死	大字露富貴寺南方約二町
岩田宜尋	歩兵少尉	同上	明治三十八年二月二十六日	盛京省牛永堡戦死	大字相原、小學校東方約四町
安部勇	輜重輸卒	同上	明治三十八年三月十九日	小倉豫備病院	大字露富貴寺東方約二町
柏木仲市	輜重輸卒	同上	明治三十八年五月二十七日	盛京省橋頭患者療養所	同北方約一町
渡邊權治郎	現歩兵一等卒	西伯	大正八年三月三日	西伯利バヘマフカ戦死	大字上野
財前龍藏	海軍三等機關兵	志難	大正八年八月十五日	鹿兒島縣下種子島沖遭難	大字相原田染小學校北方約十町



### 第五節 徴兵検査成績

田染村昭和五年度徴兵検査成績は、壯丁四十八名中、甲種合格者八名を出せり。壯丁教育程度は概要左の如し。

壯丁四十八名	尋常小學校卒業	四五	高等科卒業	二八
	中等學校卒業	四五	同 未卒	四
青年訓練受了	一〇	一	一〇	一
程度不明	三			

### 第六節 帝國在郷軍人會 田染分會

帝國在郷軍人會田染分會の濫觴は、遠く田染軍人團に發す。同軍人團は、明治四拾貳年八月の發會に係り、軍人の本領に基き、會員相互、智見の涵養と品性の向上とに勉むるを主義方針として益々結束を固め、成績大いに見るべきものあり。爾來會員愈々奮勵して同會の振興を期待し、他町村に範を示すに至れり。明治四十四年四月、勅令を以て帝國在郷軍人會組織の公布あり、各聯隊區管内に支部、各市町村

に分會を設置さるゝに及び、軍人團を改めて田染分會となし、總會に於て會長以下役員の選舉を行ふ。昭和五年末現在分會員は准士官以上九名、下士十名、兵卒貳百七十二名、通計貳百九十一名にして、昭和四年度の實施事項は、拜賀式、總會、遙拜式、陸軍記念日祝典を舉行したる外、徴兵受檢者貳拾五名に對し、豫習教育貳回、簡閱點呼受閱者四十六名に對し、豫行點呼一回を實施したり。歴代會長氏名左の如し。

#### 歴代會長

- 小關久喜松 都甲幸治郎 小關吉郎 豐田正三 渡邊 保 財前吾郎
- 豐田正三 二宮 亨 安岡忠治 永松正士 財前近松 小關 滿

### 第九章 神社

田染郷は、古來宇佐八幡宮の神領にして、且つ應神天皇行幸の靈蹤古跡として、和銅年間に齋祀されたる三社八幡宮の鎮座せるを以て、縱令中朝一時神佛習合の事ありしと雖も、郷中夙に敬神の思想、深く民心に浹洽し、一千貳百年の年所を経たる三社八幡宮を首め、天神地祇の遍く郷中に齋祀されたるもの、正社、列外社を合し、其の數百十餘社の多きに達せり、就中國東郡創始の偉人たる日子刺肩別命、菟名手命



を奉祀せる郷社八幡社攝社たる北野社竝に南朝の忠臣豊前馬ヶ嶽城主新田小市郎義氏の靈を奉祀せる郷社八幡社攝社金刀毘羅社相原無格社大社及び其の他に



一ノ社良高

在る小市郎靈社の如きは最も著目すべきものにして之あるが爲め田染郷土の悠久なる歴史に富める一斑を窺ふに足るべし。殊に三社八幡宮に關する神話の由緒は以て既往千貳百年來國廟たる宇佐八幡宮の神權が如何に田染郷を風靡し且つ田染郷に惠賜する所多かりしかを物語るものにして今猶ほ春秋の齋祀を絶たざるもの亦偶然ならざるを觀る。若夫僧仁聞其の他の佛徒が宇佐八幡宮の神權を利用し以て佛教の弘通に便したる事蹟は次章寺院の條に之を審かにす。本郷齋祀の神社が嘗つて比較的濃厚に佛臭を帯びたるもの全く茲に因せり。例すれば明治維新前郷社八幡社に梵鐘を備へ若は村社熊野社に六所權現を祀りしが如きもの是なり。

### 第一節 村社高良社



二ノ社良高

高良社は田染村大字嶺崎宇サセリの西叡山麓亂松蔚乎たる靈域に在り。蒼古幽邃以て社格の久しきものあるを見るべし。境内に妙見社を合祀す。妙見社は嘗つて嶺崎宇横嶺の高山西叡山の中腹に在り養老年間の開拓と傳へられしが後廢滅に歸したるを以て此處に合祀するに至りしなり。

- 一、祭神 武内宿禰命 天御中主命 高皇產靈神
- 神皇產靈神 軻遇突智命 菅原神柱二
- 磐土神 底土神 大直日命
- 大綾津日神 赤土神 大地海原諸神
- 高たか 龜かみ神

一、由緒 不詳維新後明治六年癸酉村社に列す。祭神天御中主命以下三柱は元本村字野地軻遇突智命は字丸山菅原神二柱は字田尾伊塚磐土命以下六柱は



字岩脇高竈神は字辻ノ下に鎮座せしを明治十一年本社に合祀す。

一、神殿 竪横各一間 申殿 竪一間三尺横四間 拜殿 竪二間横六間三尺

一、境内 三百三拾九坪 内 竪百九拾七坪 官有地第一種 四拾貳坪 民有地第二種

一、境内神社

琴平社

祭神 大己貴命

由緒 不詳

石祠 方一尺

一、境外所有地

耕地八畝貳拾八步

嶺崎字常塔

地價金四拾貳圓貳錢

耕地壹反貳畝廿七步

同字 中畑

地價金五拾七圓拾六錢

山林壹反壹畝貳步

同字 山ノ首

地價金壹圓拾壹錢

山林三畝四步

同字 水ヶ元

地價金參拾壹錢

### 第二節 村社愛宕社

村社愛宕社は田染村大字嶺崎字多多良に在り。

一、祭神 軻遇突智命 火産靈神 大山祇神二柱 天之水分神 國之水分神

市杵島姫神

一、由緒 詳かならず。祭神火産靈神は元本村字空木に大山祇神一柱は字小藤に、

天之水分、國之水分神は字雨引に、市杵嶋姫命は字野地に、大山祇命一柱は字堂山に鎮座せしを明治拾一年に至り、本社に合併齋祀せり。

一、神殿 方一間 拜殿 竪壹間參尺横貳間

一、境内 百九拾三坪 官有地第一種

### 第三節 郷社八幡社

郷社八幡社は田染村の總社にして、大字真中字宮田に在り。西は背後に林樹鬱鬱たる丘陵を負ひ、前面東は田染川在岸の迢々たる平蕪を望みて、山水頗る明麗なり、所謂田染八景中の本宮ノ晴嵐是なり、朝暉夕陽氣象萬千の概あり。御手洗の清



溪社前を流れ、轟々たる老杉社頭に聳え、境地頗る森嚴、坐ろに神在すの感に堪へざるものあり。社前に金剛力士の石像二軀を安んず。本殿の左側に摩天の一大巖



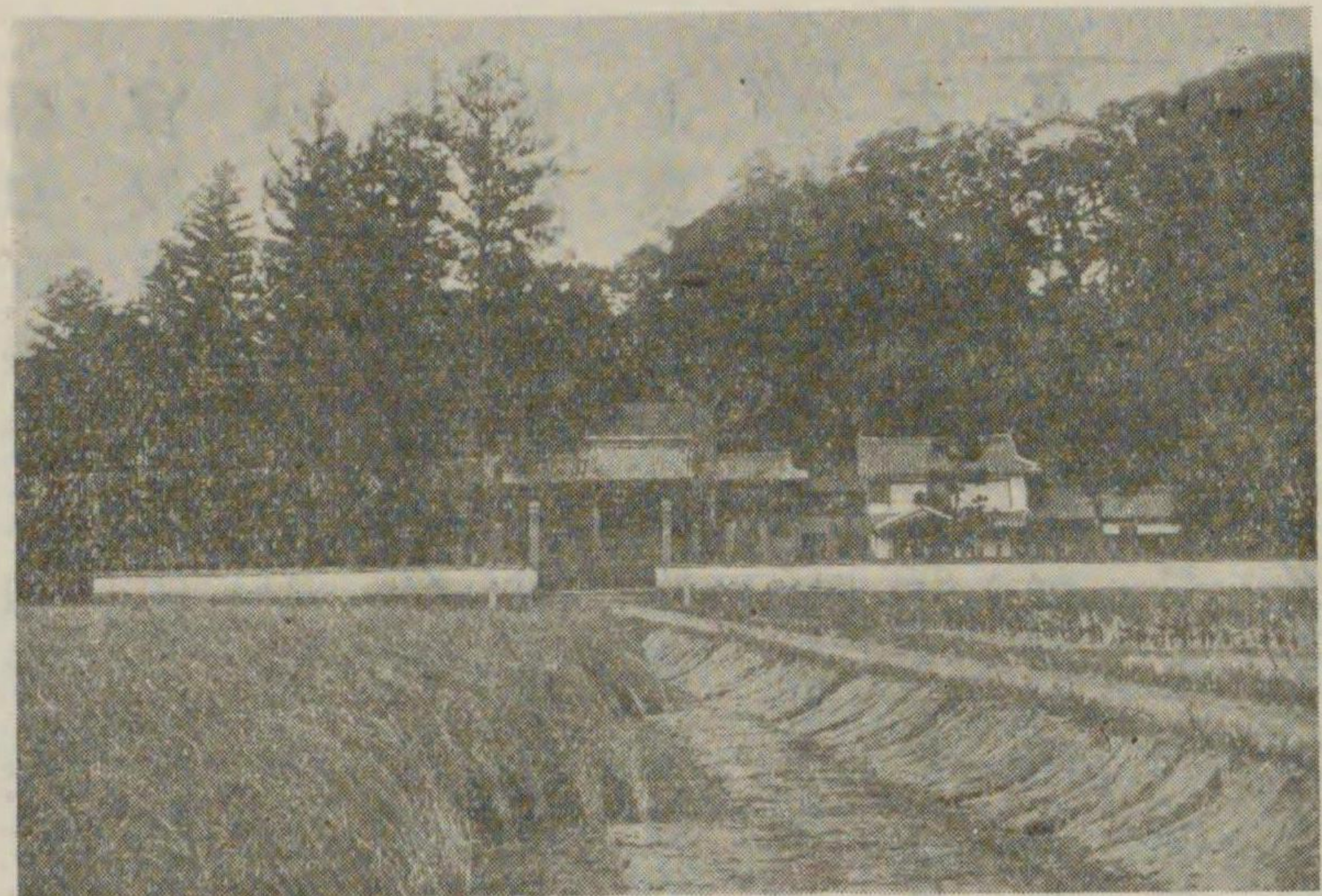
石の壁立せるを觀る。所謂御鷹岩にして、巖脚に注連繩を纏ふ。其の左に屏立せる巖壁には、三軀の磨崖佛を觀る。手法雄勁、撲素にして、一大傑作たり。僧仁聞の手刻する所なりと傳ふ。所謂中村の不動堂趾にして、岩壁に屋椽を架したる痕跡を存す。蓋し兩部神道時代の遺物なり。今は佛宇を撤し、露佛となれり。

- 社  
一、祭神 田心姫命 譽田別尊 弟日賣命  
足仲彦命 息長足姫尊 大鷦鷯命  
大葉枝皇子 小葉枝皇子 鳩鳥皇女命  
建内宿禰命柱二 猿田彦大神柱二

一、由緒 傳に曰く、此の地は古來聖域と傳へられたる所にして、應神天皇の御宇、天皇豊前國宇佐より、豊後國安岐郷に還幸せられし時、行宮を置かれたる古跡なり

と。宮田の名蓋し是より起るなり。欽明天皇の三十一年宇佐能志袁利には卅二年辛卯二月十日癸卯と誌す應神天皇の神靈、大神比義おほびのひぎ、宇佐公池守神の兩翁に憑りて神勅あり、八幡大神と現はれ給うて、豊前國八ヶ社等を首め、所々に靈行あり、種々の奇蹟を現じ給ふ。元明天皇の和銅貳年己酉

郷一ノ宮八幡社



二月五日、八幡大神の神靈、國前くにさき豊足に憑りて託宣あり、種々の靈異を示し、當一ノ宮八幡宮に降臨し給ふ。時に忽焉として金色の鷹、赫灼たる光芒を放ちて、宮田の巖頭に翔下す。則ち金鷹の下りし巖を御鷹岩と稱して、特に尊崇し、其の地に就きて、宮殿を營み、庶民子の如く來りて參拜したりと云ふ。降りて稱徳天皇の天平神護元年乙巳、閏十月八日、國前郡大領栗長、靈夢を感じ、應神天皇現身うつしみの砌、行幸し給ひたる古跡宮田に、八幡大神降臨の事を朝廷に以聞し、新に宏壯なる神殿を造營して、八幡大神竝に比咩神を齋き祀り、十月八日を祭日と定む。丹碧の宮殿、綠翠滴る神苑に映帶し、轉た神域の崇嚴を加へたりとぞ。年中祭祀



此の時に起る。又宇佐行幸會あり、祭典に際しては、豫め先豊前國下毛郡野中村にある大貞宮三角池の眞薦まこを刈り採り、之を以て宇佐宮にて神体を封じ奉る神事をば、嚴かに執行し、やがて神体を神輿に奉遷す。乃ち奈多八幡宮より、勅任祠官竝に鍛冶、大工、其の他の諸職司、上下都べて八百餘人、宇佐宮に參集し、八幡大神八ヶ社に行幸の神事を行ふ。終りて奈多宮の社人、神輿を奉じて行幸の途に就き、十一月四日、先づ高田若宮八幡社へ駐輦、翌五日、當田染八幡宮に駐輿し、神事を執行せらる。洵に當社は、八幡大神、未だ宇佐小倉山に崇祀されざる前、巡幸ありし靈地なるが爲めなり。依りて豊前八ヶ社に準じ、國東五社奈多八幡宮、田原若宮八幡宮、田染八幡宮、高田若宮八幡宮、椿八幡宮の一に居り、宇佐宮と齊しく、神殿南に向ひ後に靈池あり。其の後仁明天皇の承和五年、丙申八月、田染郷司統安磨郡大領吉弘候、龍麻呂の弟、神殿を再建す。鎌府將軍天下の政柄を掌握するに及びて、大友能直、豊前豊後の守護職に補せらる。乃ち建久八年、丁巳十一月、左近將監能直、百六十貫の神領を田染八幡宮に寄進し、大友氏歴世の崇敬最も渥し、四條天皇の嘉禎貳年、丙申三月、豊後の守護代古庄四郎重吉、復神殿を造營す。北朝崇光天皇の觀應貳年、辛卯二月、番長、神主重輔、竝に郷司、民部左衛門尉景家に憑りて神託あり。神託を遵奉して、湍津姫命を間戸大明

神に、市杵嶋姫節を稻積大明神に還座し奉る。蓋し田心姫命、湍津姫命及び市杵島姫命は、素盞鳴尊の三女神なり。延文四年、神主從五位下田染日向守、宇佐言基田原八幡若宮神社由緒書には、定基とあり、大友刑部大輔氏時に屬して出征し、肥後國三船に陣す、時に七月八日なり。此の日、味爽一抹の朝靄、言基の陣營を蔽ふ。言基其の凶兆なるを悟り、遙かに田染三所八幡宮に祈請せしに、忽ち神驗あり、言基偉勳を奏して凱旋す。依りて同五年、庚子十月八日、田染八幡宮の浮殿を上野村に移し、又間戸、稻積兩社の神輿を新造し、毎年十月八日、三社の神輿、上野村頓宮新御旅所に神幸の例を開けり。後奈良天皇享祿三年、庚寅貳月、大内周防之介多々良義隆、田染八幡宮に歸敬して、神殿回廊を造營し、神領として國東郡糸永、辨分、久末等都合三拾五町を寄進す。尋いで正親町天皇の永祿年中、大友宗麟は、田原近江入道紹忍をして、其の二十餘町を褫はしむ。後陽成天皇の文祿二年、癸巳六月、豊臣秀吉、宮部善祥坊繼潤をして、國東郡を檢地せしむるに當り、悉く當社の神領を没入す。慶長八年、癸卯二月、渡邊吉左衛門は、神殿、告殿、拜殿を新に造營す。同年細川忠興、新に國東郡に封せらるゝに及び、神領八石を寄進す。明正天皇の寛永六年、壬申十二月、無格社となる。靈元天皇の延寶六年、辛戌、島原侯松平忠房、神領六石貳斗四升を寄進す。寄



進狀左の如し。

豊後國東郡中村三社八幡宮社領之事

高六石貳斗四升境内山林竹木共目錄在別紙所

右於當社先規依無神領雖爲私領開發新地永代令所附早諸役等共令免除也仍而寄附狀如件

延寶六年八月十五日

主殿頭源忠房 判

當社人中

明治六年癸酉郷社に列せらる。湍津姫命、大山祇命、草野姫命、岩長姫命、武内宿禰命、猿田彦大神は、田染村字櫻畑に鎮座せしを、明治十一年本社に合祀し、大正五年三月六日更に二宮八幡社を立て、村社に列せらる。

一、神殿 横貳間 横貳間 拜殿 横貳間 神輿庫兼神職控所 横六間 横六間

一、境内 六百四拾貳坪 官有地第一種

一、境内神社 拾四社

北野社

祭神 菅原大神 日子刺肩別命國前臣 菟名手命

由緒 不詳、日子刺肩別命以下一柱は、本村字迫へ鎮座の處明治十一年本社境内に移轉す。

神殿 横參尺 横參尺 素屋 横壹間 横參尺

今宮社

祭神 八やちまた衢比古神 八衢比賣神 久那斗神

由緒 不詳 横壹尺 横壹尺 素屋 横參尺

神殿 横壹尺 横壹尺 素屋 横參尺

日枝社

祭神 大山祇神

由緒 不詳

石祠 横壹尺 横壹尺 參寸

金刀比羅社

祭神 大己貴命

由緒 不詳

石祠 横壹尺 横壹尺 參寸

稻荷社

祭神 保食神

由緒 不詳

石祠 横壹尺 横壹尺 參寸

稻荷社 祭神 保食神

由緒 不詳 元本村字鳥越鎮座の處明治十一年本社境内に合併



石祠 横壹尺參寸

貴布禰神社 祭神 高麗神

由緒 元本村字戸原へ鎮座の處明治十一年本社境内へ合併

石祠 横壹尺參寸

稻荷社 祭神 保食神

由緒 不詳、元本村字秋吉へ鎮座の處、明治十一年本社境内に合併

石祠 横壹尺五寸

金刀毘羅社 祭神 大己貴命

由緒 不詳、元本村字大平へ鎮座、明治十一年本社境内に合併

石祠 横壹尺五寸

山神社 祭神 大山祇命

由緒 不詳、元本村字岩ノ下に鎮座、明治十一年本社境内に移轉

石祠 横壹尺五寸

祖靈社 祭神 當地姓氏祖靈

由緒 不詳、元本村字觀音寺へ鎮座、明治十一年本社境内へ合併

石祠 横壹尺參寸

金刀毘羅社

祭神 大己貴命 天御中主命 大山祇命<sup>二</sup> 八衢彦神 八衢姫命 久那斗神

小一郎靈 市杵島姫命

由緒 不詳、大己貴命は、元本村字馬城山に、天御中主尊は、字眞木に、大山祇命二柱は、

字眞木字合ノ追に、八衢姫命、久那戸神は、字川ノ上に、小一郎靈は、字大久保に

市杵島姫命は、字屋敷に鎮座の處、明治十一年本社へ移轉

石祠 横壹尺五寸 小一郎靈は、豊前馬嶽城主新田小市郎義氏を謂ふ。南朝の忠臣なり。

北野社

祭神 菅原神五柱 大山祇命 豊受姫命

由緒 不詳、祭神菅原神五柱は、元本村字櫻畑、平野村字本名、同村字山下、同村字小回

ノ、同村字前山に、大山祇命は、同村字下屋敷に、豊受姫命は、同村字後山に鎮座、

明治十一年本社に合併、菅原神社一柱は、大正五年三月六日、更に二ノ宮八幡

社に遷さる。

石祠 横壹尺

稻荷社 祭神 保食神

第九章 神社



由緒 不詳、元本村字塔之尾に鎮座、明治十一年本社境内に合併  
石祠 横壹尺五寸 竖壹尺五寸



二ノ宮社

一、境外所有地 合計九筆

耕地貳畝參歩	真中字瀬戸口
地價金拾四圓拾八錢	
耕地貳畝拾七歩	同上
地價金拾六圓八拾七錢	
耕地九畝拾九歩	真中字宮前
地價金六拾壹圓七拾貳錢	
耕地參畝貳拾六歩	同字染田
地價金貳拾圓五拾五錢	
耕地四畝拾歩	同上
地價金貳拾參圓四錢	
耕地六畝歩	嶺崎字龍田
地價金參拾貳圓七拾貳錢	
耕地六畝七歩	同字西田
地價金參拾壹圓四拾貳錢	
耕地七畝貳拾貳歩	上野字市場
地價金四拾七圓四拾四錢	
芝地貳畝拾四歩	同上
地價金四錢	

第四節 村社二宮八幡社

村社二宮八幡社は、田染村大字真中字間戸に在り。茂林蔚として森嚴なる靈域なり。南に鏡池と稱する池沼あり。

一、祭神 湍津姫命、大山祇命、草野姫命、岩長姫命、武内宿禰命、猿田彦命

一、由緒 郷社八幡社に同じ、明治十一年、湍津姫命以下六柱を郷社八幡社に合祀せしに、大正五年三月六日、更に二宮八幡社を分離齋祀し、村社に列せらる。

一、神殿 横壹間貳尺 竖貳間壹尺 拜殿 横拾間參尺 申殿 横貳間 神樂殿 横壹間貳尺 神輿庫 横貳間

社務所 横四間五尺 竖貳間壹尺

一、境内 四百四十九坪

一、境内神社一社

北野社 祭神菅原道真公

神殿 横四尺 竖五尺 素屋 横壹間參尺 竖壹間四尺

由緒 審かならず、明治十一年、郷社八幡社境内社に合祀、大正五年三月六日、更に本社境内社に復す。



第五節 村社猛嶋社

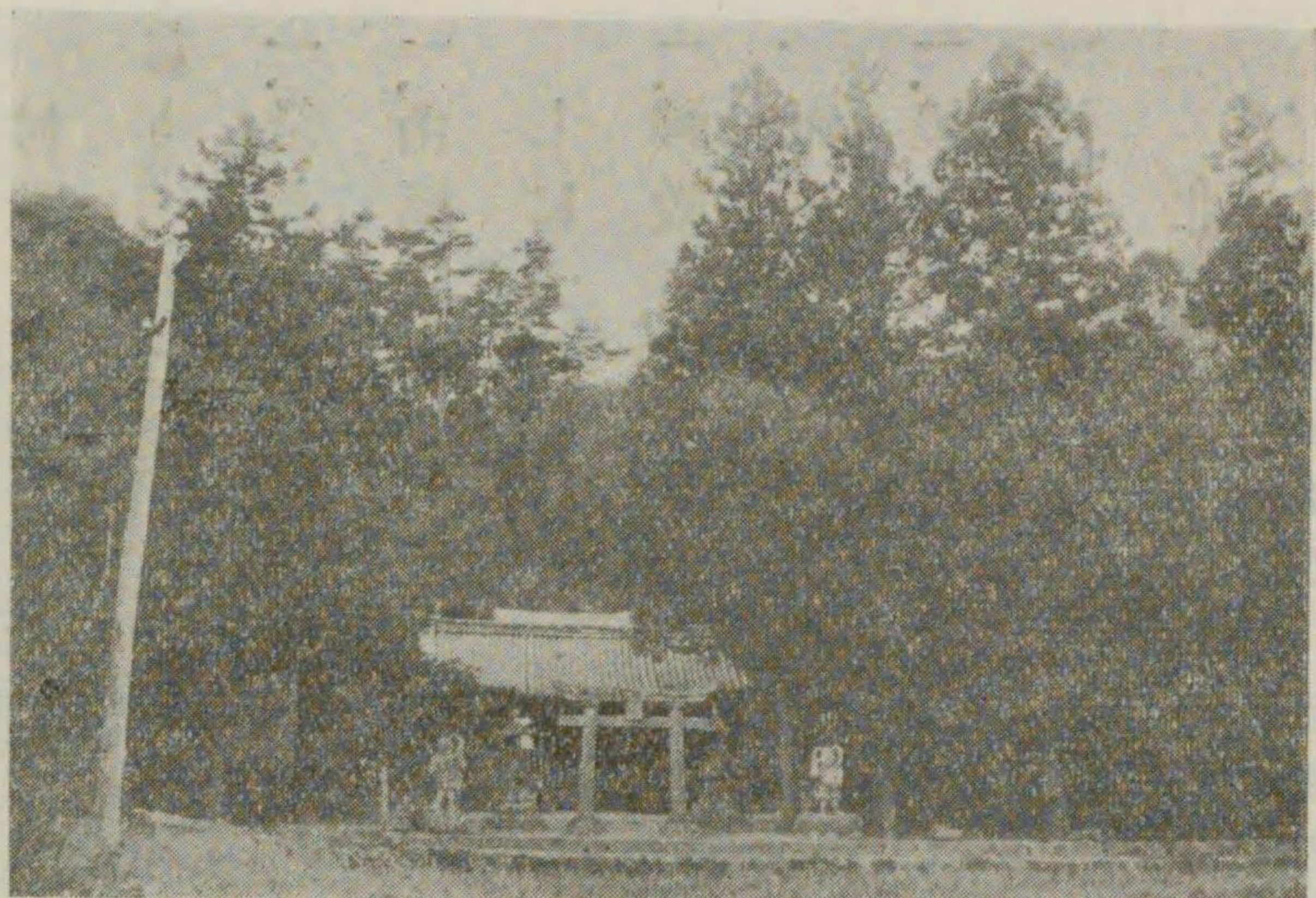
猛嶋社は、田染村大字平野字宮、迫に在り。

一、祭神 白日別神 豊日別神 豊久土地泥別神

大山祇命

一、由緒 不詳明治六年癸酉村社に列せらる。大山

祇命は、元本村字宮、山鎮座、明治十一年本社に合併す。



社 島 猛

一、神殿 横壹間 素屋 横貳間參尺 拜殿 横貳間參尺

一、境内 四百五十九坪 官有地第一種

第六節 村社熊野社

熊野社は、田染村大字平野字登尺こじやうに在り。熊野耶馬の奇巖、鋸山に連互し、別に一峰を抽けるもの、其の頂上に熊野社あり。附近に礪こたる怪石、嶄巖多く、社殿左側に稚子落しと稱する懸崖あり。華表を潜れば、一條の磴道、直ちに社頭に通す。崎嶇突兀として容易に歩すべからず、俗に鬼神の築きたるものなりと稱せらる。境内老杉巨樹多く、全く塵寰を絶せる靈域なり。磴道の側、巖壁に阿彌陀竝に不動尊の磨崖佛あり。委曲は今熊山胎藏寺の條に具す。

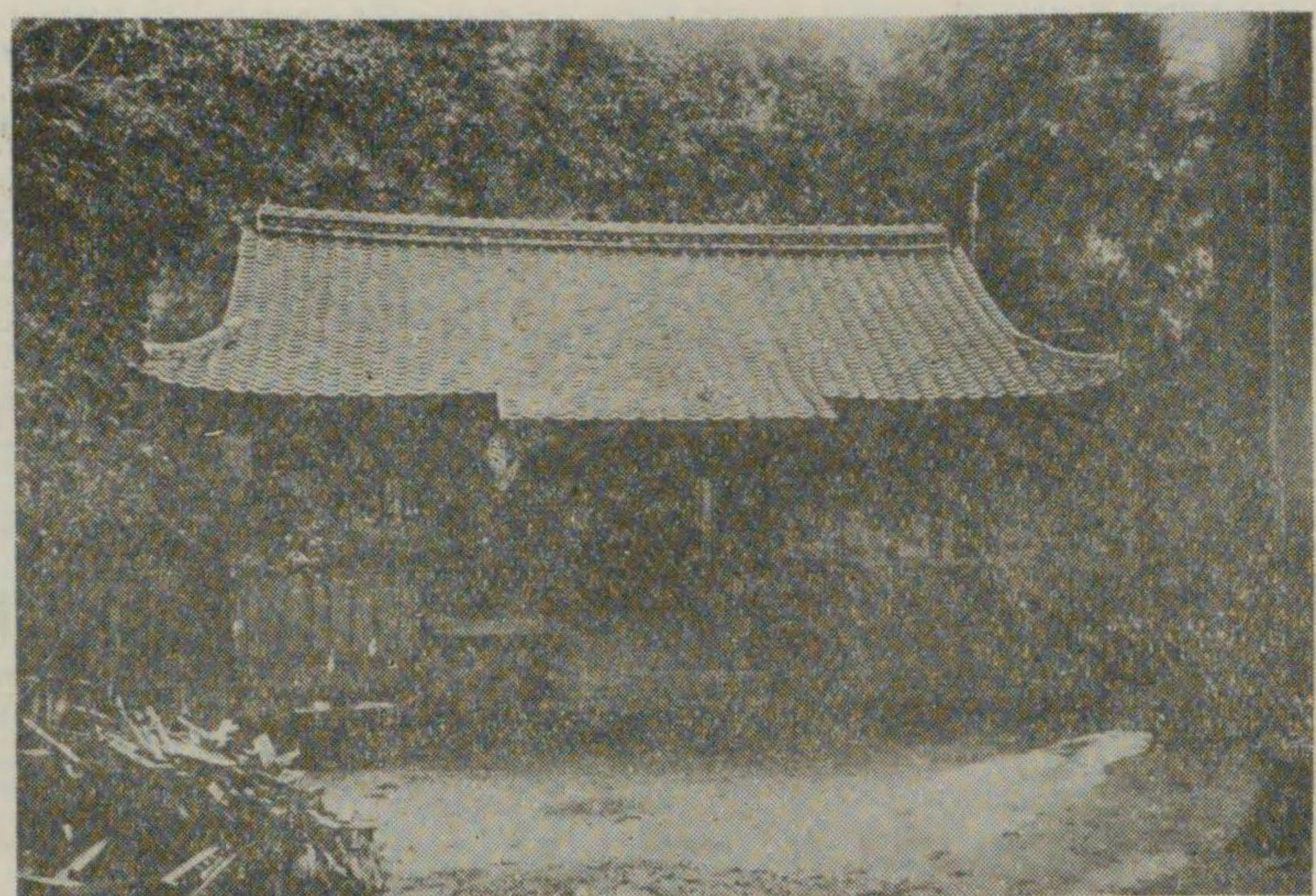
一、祭神 速玉男命 事解男命 伊弉册尊

大山祇尊柱 正鹿山津見神 奥山津見神

關山津見神 淤勝山津見神 羽山津見神

志藝山津見神 戸山津見神 原山津見神

大己貴命



社 野 熊

一、由緒 不詳傳へ云ふ神佛習合時代、本社は熊野權現と稱して、今熊山胎藏寺に屬したるに、明治維新、神佛分離の際、獨立して熊野社となると。明治六年村社に列



せらる。正鹿山津見神以下八柱及大山祇尊一柱は元本村字迫田に、大己貴尊一柱は、字山ノ平に鎮座、明治十一年本社に合併さる。

一、神殿竪壹間 横參間 拜殿竪貳間 横貳尺

一、境内 貳百五拾四坪 官有地第一種

### 第七節 村社三ノ宮八幡社

三ノ宮八幡社は、田染村大字上野字鍋山に在り。俗に三ノ宮と稱す。地は田原村に通ずる縣道に沿ひ、田染川の上流に枕む。所謂鍋山耶馬の境域にして、社頭數十丈の懸崖屏立し、頗る形勝の地なり。

一、祭神 市杵島姫命 稻積大明神 久々能知神 武内宿禰命 猿田彦大神 木華咲耶姫命

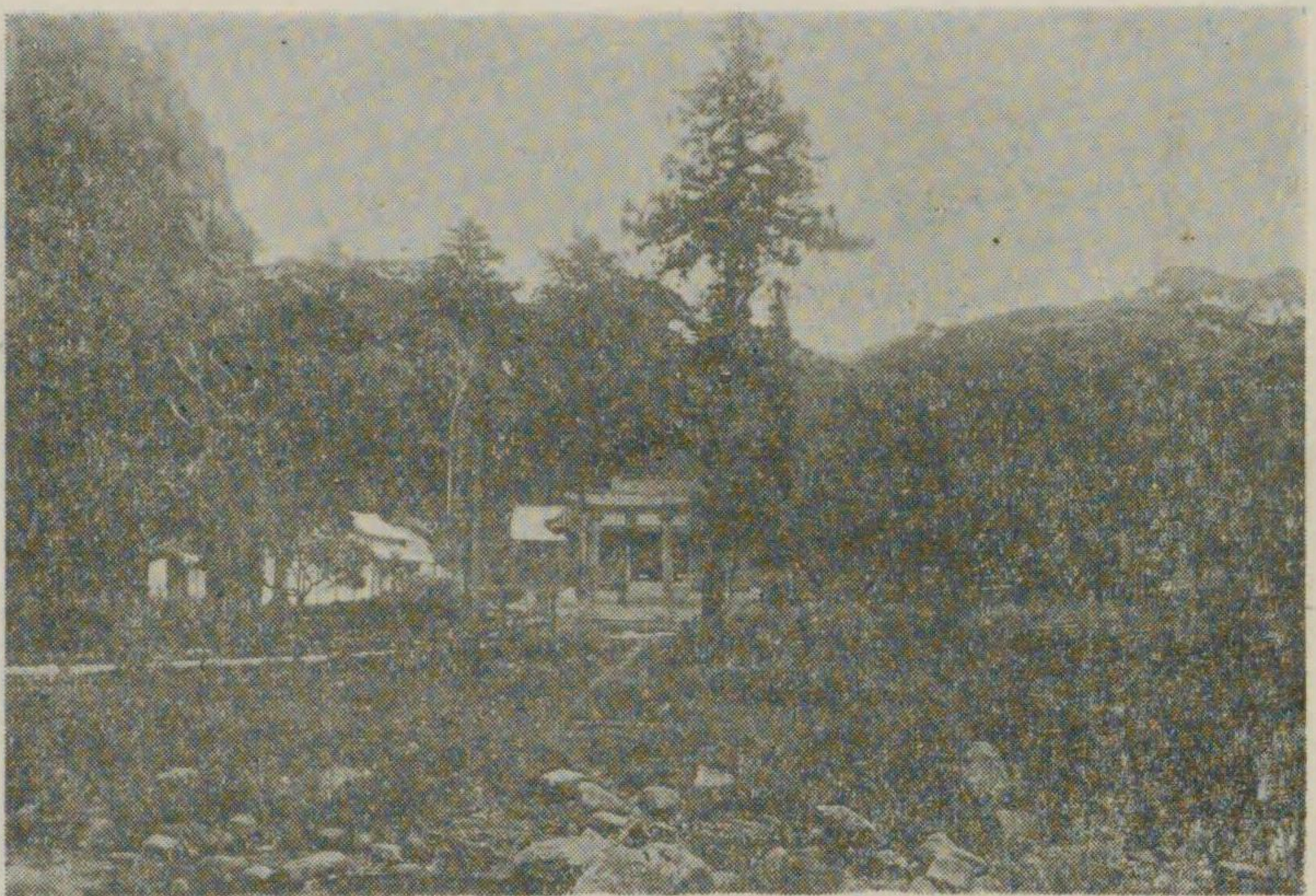
一、由緒 觀應貳年神託に依り市杵島姫命を稻積大明神に還座奉齋す委細は郷社八幡社の條に具す。明治六年癸酉村社に列せらる。

一、神殿竪壹間 横同 素屋竪四間 横參間 拜殿竪貳間 横六間 神輿庫竪貳間 横壹間 參尺

一、境内 三百九十四坪 官有地第一種

### 一、境内神社五社

山 社 祭神 大山祇命



由緒 不詳、元本村字臺へ鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。石祠竪壹尺 横壹尺

三ノ宮 姫島社 祭神 譽田別命 比賣語曾神

由緒 不詳、元本村字屋敷へ鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。神殿竪貳尺 横貳尺

宮 稻荷社 祭神 保食神

由緒 不詳、元本村字フカサコ鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。石祠 方壹尺

社 稻荷社 祭神 保食神

由緒 不詳、元本村字尾辻へ鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。石祠 方壹尺

稻荷社 祭神 保食神

由緒 不詳、元本村字差竹へ鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。石祠 方壹尺



第八節 村社北野社



一、境外所有地

耕地壹反三畝壹歩 相原字前田 地價金八拾六圓六拾錢  
耕地拾四歩 同 上 地價金八拾貳錢

北野社は、田染村大字相原字桃園に在り、願正寺の精舎と相接す。地高埠に在り、北一面相原の峽谷を望み、頗る眺望に富む。境内に旗檣目通り、銀杏同八尺等の老樹あり。

一、祭神 菅原道真靈

野 一、由緒 不詳、明治六年癸酉村社に列せらる。同貳拾年丁亥三月神殿を建築す。

社 一、神横殿壹間 拜横殿貳間

一、境内 三百五十八坪 官有地第一種

一、境内神社六社あり、即ち稻荷社、山神社、北野社、愛宕社、山神社、稻荷社はなり。

第九節 村社大年社



大年社は、田染村大字池部字年ノ神、田染河畔に在り。境内幽寂、恰好の社地にして、林樹蒼鬱、自ら森嚴の趣きあるを覺ゆ。

大 一、祭神 大年神 御年神 若年神

大己貴命 崇徳天皇 吉備聖靈

大地主命 埴安姫命 大山祇命

木花咲耶姫命 景清靈 高たか靈を神み

彌都波能賣神やつはのめのみ 菅原大神

一、由緒 不詳、大己貴命は、元本村字峰ノ上、崇徳天皇、

吉備聖靈は字千乗丸、大地主命、埴安姫命は字清福、

大山祇命、木花咲耶姫は字植田、景清靈は字カシヤ、

高靈神、彌都波能賣神は字日ノツル、菅原神は字宮ノ前に鎮座、何れも明治十一年本社に合祀す。毛利氏嘗つて氏神として尊崇したりと傳へらる。



- 一、神殿 方一間 拜殿竪壹間參尺 神職控所竪壹間參尺
- 一、境内 七拾六坪 官有地第一種
- 一、境内神社二社

今日 靈社 祭神 當地姓氏祖靈

由緒 不詳、元本村字荒平鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。石祠竪壹尺五寸

今日 靈社 祭神 同上

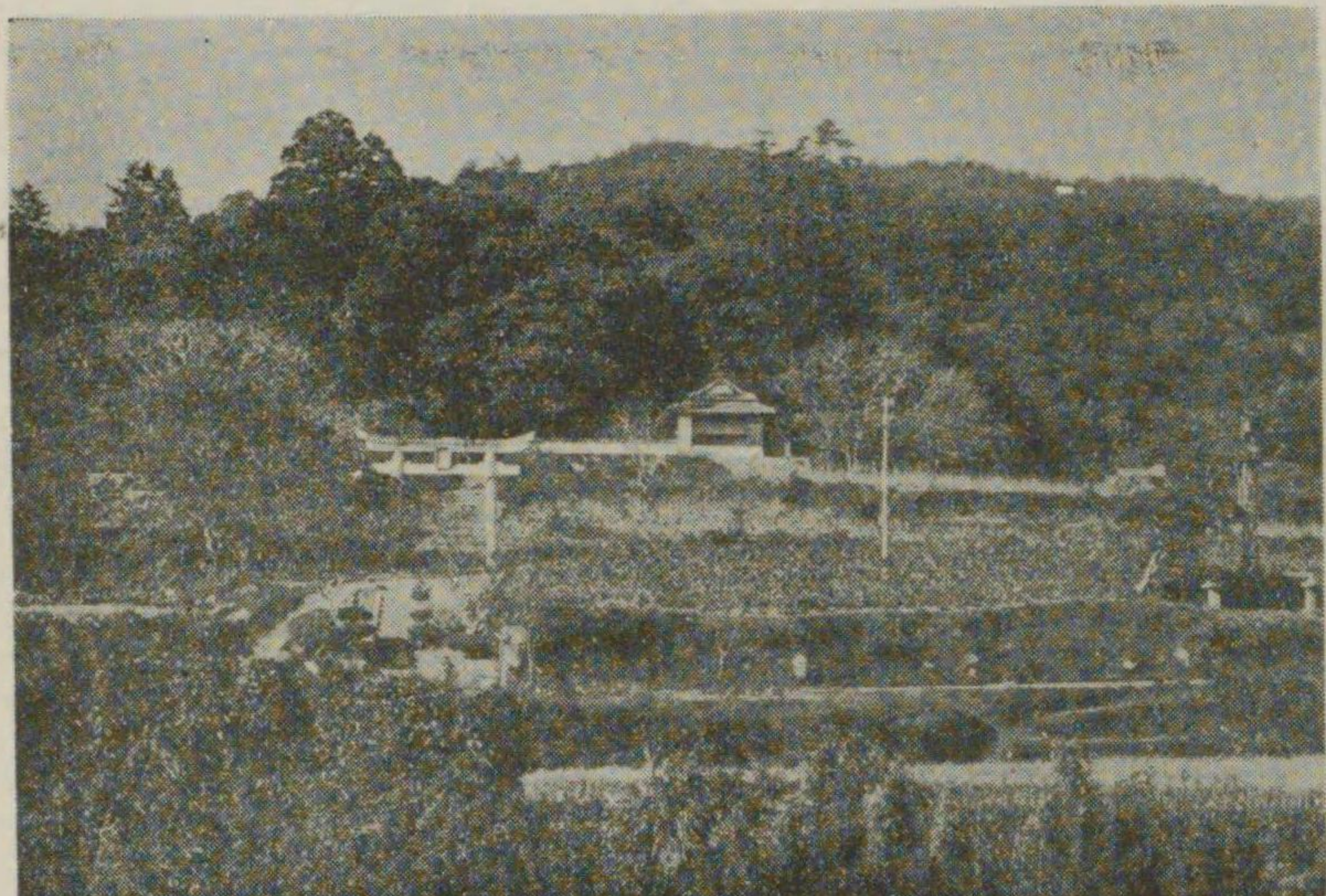
由緒 不詳、元本村字樋ノ口鎮座、明治十一年本社境内に移轉す。神竪壹尺五寸

### 第十節 村社富貴社

富貴社は、田染村大字路字中村に在り。後に密林の丘陵を負ひ、前は路の谿谷に枕み、境内幽邃なり。境内に幹圍壹丈八尺の老杉、竝に同壹丈貳尺の櫟の巨樹あり。前者は約三百年、後者は約四百年を閱せりと稱せらる。

- 一、祭神 大年神 若年神 御年神 素盞鳴尊 稚産靈命
- 奇稻田姬命 保食神 伊邪那岐命二柱 天照皇大日靈貴命おほひるめぢののみこと 五十猛命

- 伊邪那美命 月讀命 仁徳天皇 磐長姫命 高靈神
- 大山祇命三柱 木花開邪姫命 闇くらを靈かろ神 罔う衆づ女命めのみこと 嚴島姫命
- 金山彦命

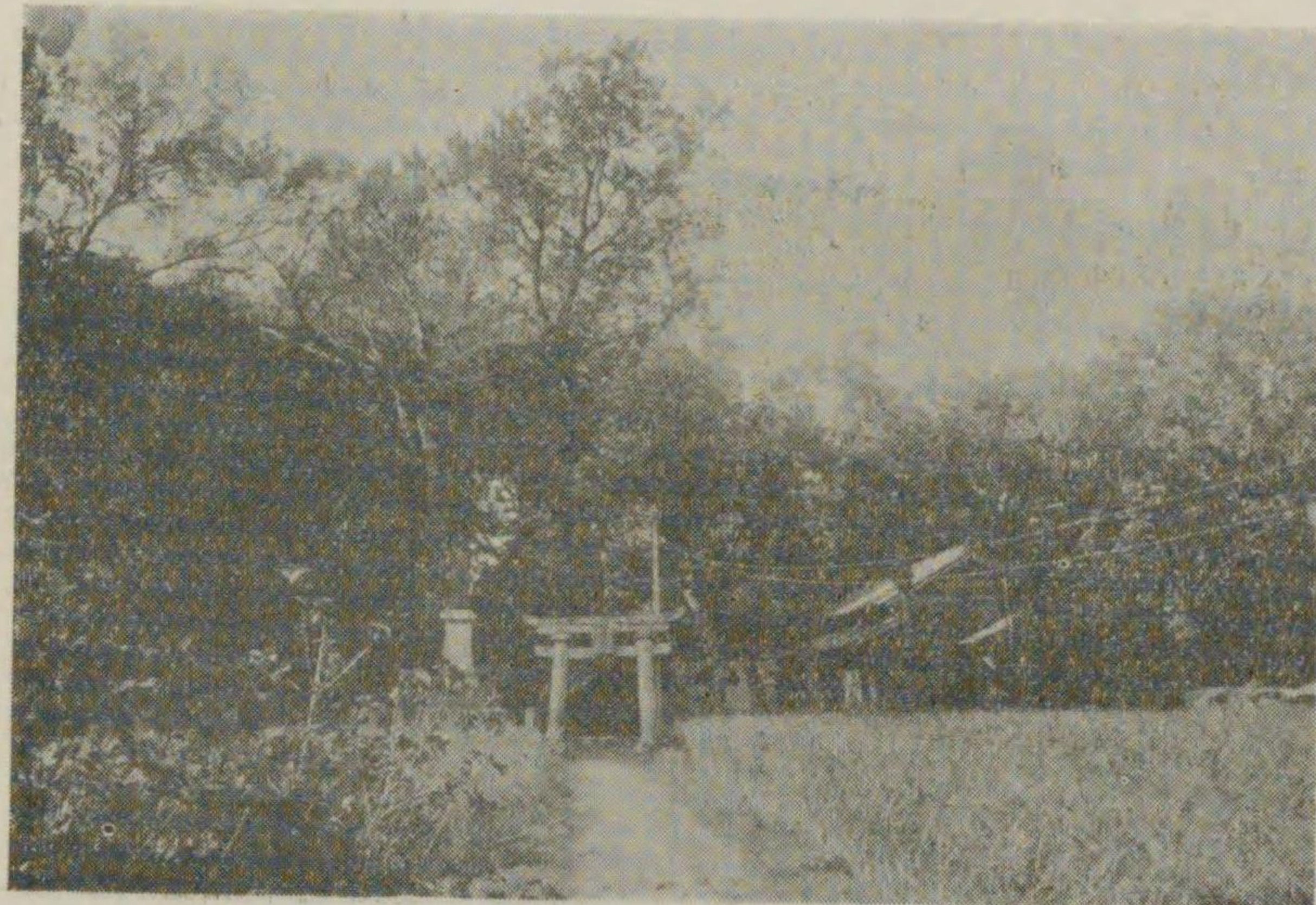


富貴社

一、由緒 當社勸請の年歴審かならずと雖、大年神元年大は、稚産靈尊なり、素盞鳴尊、奇稻田姫尊を首め、左右に十二躰を立たせ給ふと云ふ。人皇第九拾代後宇多天皇の御宇、弘安四年己、豊前國田川郡香崎村安藤千代太夫繁寛と云ふ者、故ありて落村に來るや、石の神体を負うて當社に詣で、之を相殿に安置す。繁寛乃ち社務職に就くと云ふ。人皇第百三代後花園天皇の御宇、享徳二年、神殿を造營す、其の棟札今猶存せり。奉造立富貴寺、歲大明神一字云々と記せり。當社は

元來一社の神なれども、其の頃より故ありて、富貴寺より社務を掌りたる事もありと云ふ。人皇第百七代正親町あふぎまち天皇の御宇、天正中、大友宗麟、邪宗を信じて、神社





木伊左衛門敬白

嘉永年中、一村凶作に際し、白山社神幸遂に中絶せしも、其の跡、今猶存せり。祭神

社 神 歳

佛閣を破却するや、當社亦其の厄に遭ふ。十五年を経て、人皇第百八代後陽成天皇の御宇、慶長貳年、朝鮮征伐の時、落村の住人柏木宗壽、堅忍主君の命に依り、田邊甚助をして代りて軍に従はしむ。甚助當社に戰勝を祈請して、靈驗を蒙る。依りて歸國の後、當社の氏子となり、神殿を再興して、頗る壯麗を極む。是より毎年九月十五日を以て、舊跡白山社に神幸するを恒例とす。人皇第百十二代後西院天皇の御宇、寛文年中、神殿を造營す。棟札に曰く、奉再興上棟、歲大明神社頭壹字、寛文六丙午天、聖主天中天、哀愍衆生者、迦陵瀕伽聲、我等今敬禮當時御公領松平市正御預代官澤與市右衛門志與市左衛門と書す、原太右衛門、大庄屋河野四郎兵衛、社人安藤右馬亮、大願主富貴孫右衛門、氏子中、大工滿

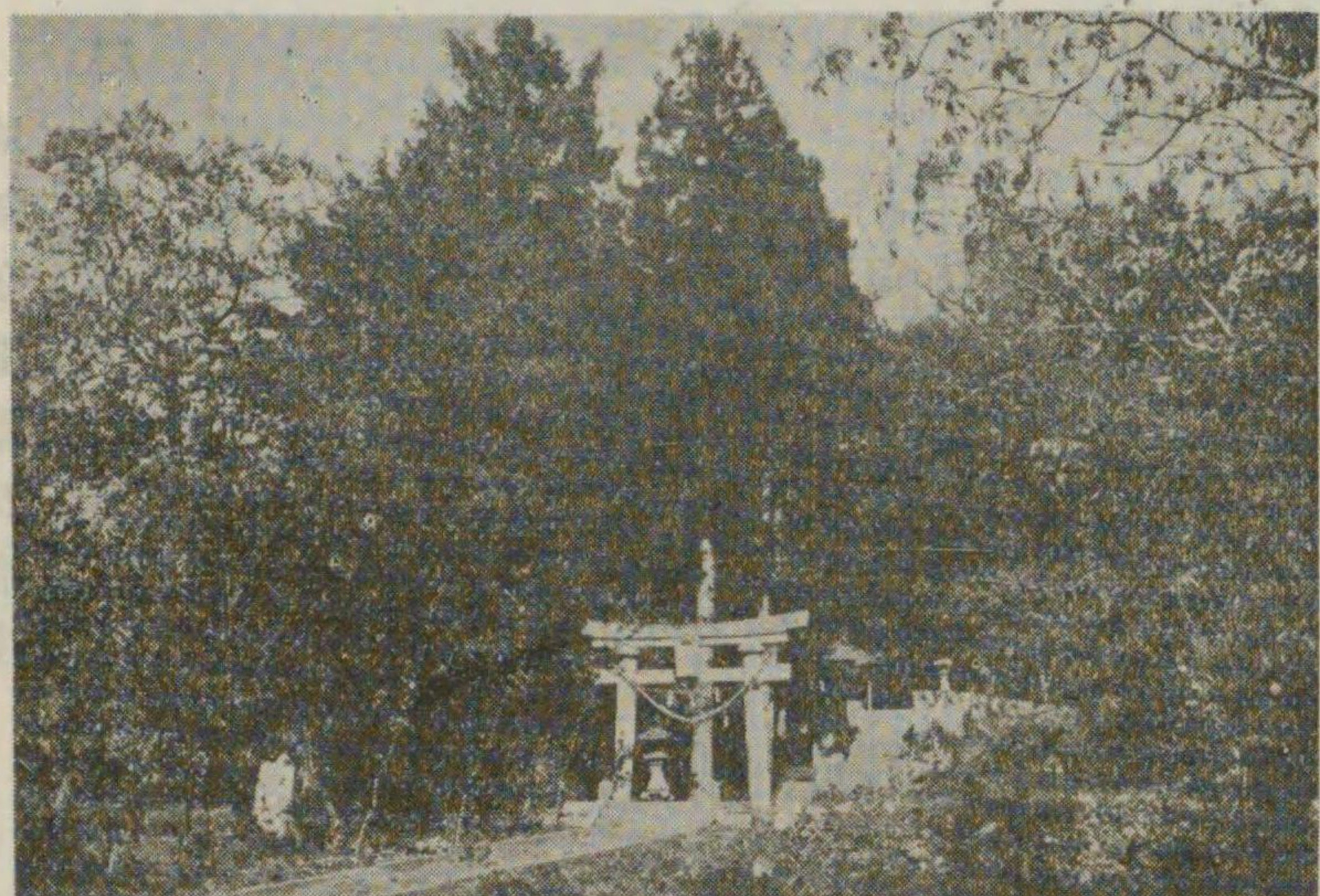
大山祇命二柱は、字岡田、字中山、高靈神二柱は、字平原、字堂山、伊邪那岐命は、字中村、嚴島姫命及金山彦命は、字金政に鎮座、明治十一年本社に合祀す。

- 一、神殿 方壹間 素屋 方三間 拜殿竪間貳間 横五間
- 神輿庫方壹間 參尺
- 一、境内 百四拾四坪 官有地第一種

### 第十一節 無格社大社

大社は田染村、大字相原、字寺向野に在り。

- 一、祭神 大己貴命
- 一、由緒 不詳、明治貳拾年丁亥三月、神殿を建設す。
- 一、神殿 竪間貳間 横壹間 貳尺 拜殿 竪間參尺 横五間
- 一、境内 百七拾六坪 官有地第一種
- 一、境内神社 七社あり、即ち稻荷社、金刀毘羅社、愛



社 野 熊 路

宕社、琴平社、山神社、山神社、今日靈社是なり。今日靈社の祭神、小一郎靈は、豊前馬嶽の城主新田小市郎義氏を謂ふ。



一、境外所有地

耕地四畝歩

地價金七圓五拾錢

耕地貳畝廿六歩

地價金五圓參拾八錢

相原字水ヶ谷

相原字池ノ上

第十二節 無格社熊野神社

熊野神社は、田染村大字落字陽平に在り。

一、祭神 伊弉册命 速玉男命 事解男命 仁徳天皇 高 靈 神

閻 靈 神 罔象女命 金山彦命

一、由緒 審かならず、金山彦命は、元本村字堂ヶ尾に鎮座、明治十一年本社に合祀す。

一、神殿 方壹間 素屋 方貳間 拜殿竪壹間參尺 横四間

一、境内 百貳拾貳坪 官有地第一種

第十三節 無格社山神社

無格社山神社は、田染村大字落字繩手の内に在り。

一、祭神 大山祇命柱二 磐長姫命 菅原神柱二 保食神うけもちのかみ 金山彦命

一、由緒 審かならず、祭神大山祇命一柱は元本村字

茂原、保食神は字入江、金山彦命は字入江、菅原神一

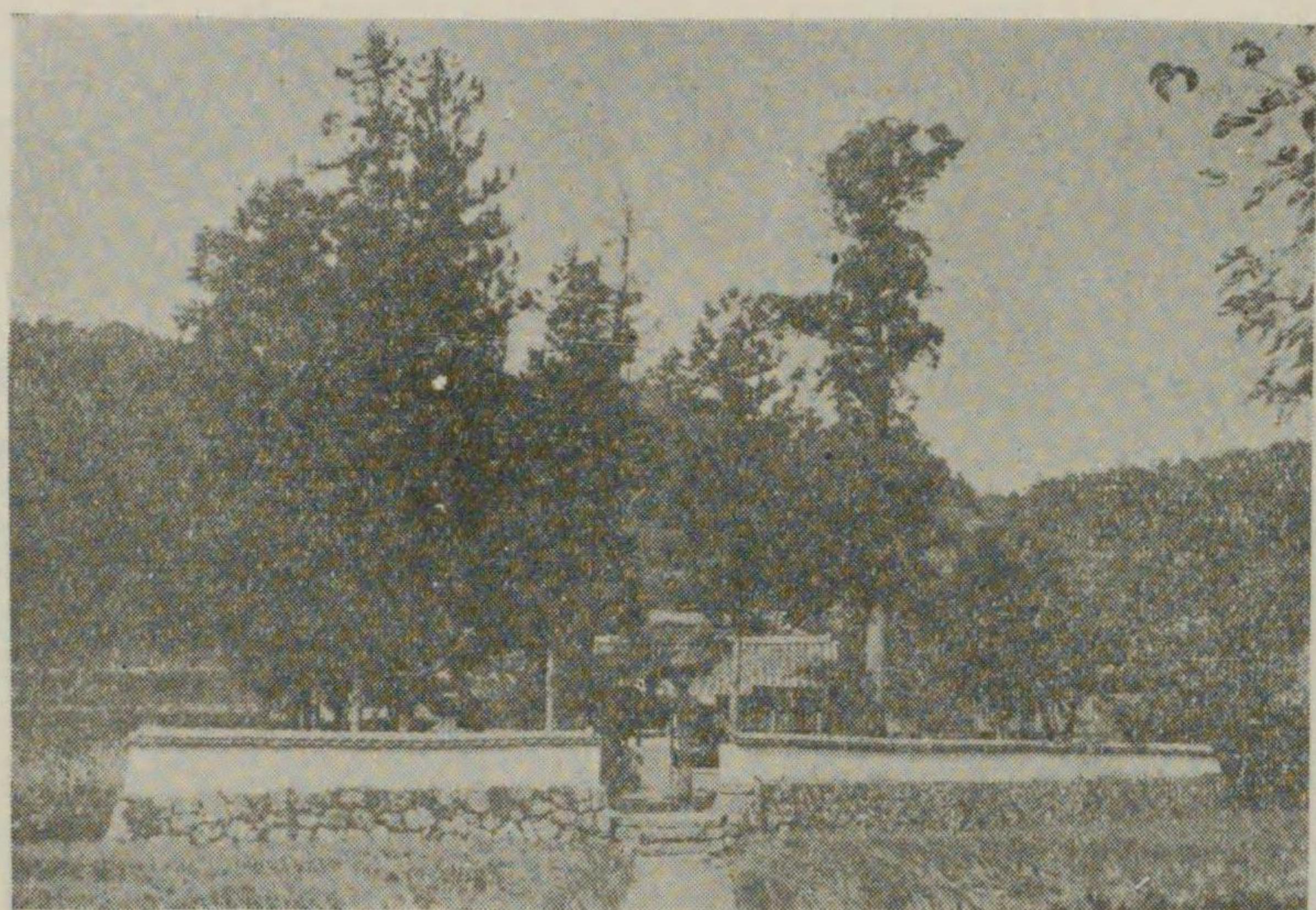
柱は古屋敷に鎮座、明治十一年本社に合祀さる。

一、石祠竪壹尺五寸 横參尺 拜殿竪貳間參尺 横參間參尺

一、境内 貳百壹坪 官有地第一種

第十四節 列外神社

以上は正社として、神社明細帳に記載されたるものなり。此の外、既に郷村社に合併若は移轉されて、猶社殿を存するもの、竝に氏族の祖靈社と認むべきものあり、凡て之を列外神社として、左に存録す。



山 神 社

天 滿 宮

田染村 大字嶺崎字横峰の古野に在り。後方に樹林を負ひ地勢高く、好箇の社地



一、祭神 菅原神

一、由緒 詳かならず、夙に田尾田原家の祭神なりと云ふ。明治十一年、村社高良社に合祀さる。

一、社殿 岩窟 拜殿 横九尺 間參尺

三 島 宮

田染村 大字 嶺崎 字 小崎の小藤に在り。土地高燥、幽邃にして、前には清流あり、樹林蔚乎として、社殿蒼古の趣あり、四顧の風物、人目を喜ばす。

一、祭神 三島大明神

一、由緒 傳に曰く、伊豫の豪族河野對馬守通秀秀又一云は、弘安の役、武勳一世を蓋ひし河野通有の同族なり。後醍醐天皇の朝、禁裡の守衛に任じ、後故ありて伊豫に歸りしも、身を容るゝに所なし。子孫豊後に來りて大友氏に寄り、山



河野氏祖先の碑

香郷立石に隱栖せしが、一朝無常を觀じ、氏神三島大明神を立石に勸請して之を

齋祀す。通秀數代の孫河野通朝、元和元年春、立石三島大明神の分靈を勸請して、此の地に祀る。是三島宮の嚆矢なり。明治拾貳年己卯二月拜殿を再興す。

一、神殿 拜殿 横參尺 間貳間

一、社寶 鏡一面 狛犬一對 刀一口 短刀丹波守藤原照門 一口 腰張一張

水 分 社

田染村 大字 小崎 字 赤迫に在り。

一、祭神 天水分神 國水分神

一、由緒 不詳

一、神殿 祠石 拜殿 横參尺 間九尺

早 神 社

田染村 大字 真中 字 下中村の觀音寺に在り。

一、祭神 大靈貴尊おほひるめぢのみこと

一、由緒 社地は元田染氏累代居館の遺趾なり。明治十一年、郷社八幡社境内に合併さる。



- 一、神殿 九尺一間に
- 一、境内 山林貳反三畝 田一畝

金刀比羅社

田染村 大字 真中字 真木 馬城山の頂上に鎮座す、四方松林にして境内廣濶、風光明麗なり。

- 一、祭神 大己貴命
- 一、由緒 創祀の年代を審かにせず、元古雅なる拜殿あり、真木、平野、上野區の氏神なりしが、明治十一年郷社八幡社の攝社金刀比羅社に合祀し、拜殿を撤す。社殿は今猶存在せり。

山神社

田染村 大字 平野字 菌木に在り。

- 一、祭神 大山祇命
- 一、由緒 詳かならず。
- 一、拜殿 縦九尺 横參間

天満宮

田染村 大字 平野字 大曲に在り。境内に銀杏樹の斷株あり、周圍三丈一尺五寸あり。

- 一、祭神 菅原神
- 一、由緒 審かならず。
- 一、拜殿 縦九尺 横參間

山神社

田染村 大字 平野字 出口に在り。

- 一、祭神 大山祇命
- 一、由緒 詳かならず。
- 一、拜殿 縦九尺 横參間

山神社

田染村 大字 相原字 西原に在り。西に潺湲たる清溪あり、後方に樹林を負ふ。境内廣からず、雖も亦一個の閑寂境也。

- 一、祭神 大山祇命











貴布禰社	大神宮遙拜所	大神宮遙拜所	山神	山神	殿島神	稻荷	金刀比羅	大神宮遙拜所	金刀比羅	金刀比羅	貴布禰社	若宮八幡神社
池部	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
平原	西迫	山門	山ノ下	茂原	金政	入江	入江	入江	トウカラ	トウカラ	ソウツカ平	堂山
神	遙拜所	同	神	同	同	同	同	遙拜所	神	同	同	同
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社

### 第十章 寺院

#### 第一節 六郷満山

古來國東郡に六郷満山の説あり。豊府紀聞に曰く、養老の初、仁聞國東六郷の間に遊化し、靈場二十八所を開闢し、總名して六郷山と曰ふ。且手自から諸聖の像を

彫刻し、諸を各所に安んず。都べて六萬九千餘を計ふ。蓋法華之品目字數を崇ぶ也。是蓋し當時の名藍なり、年を経ること久遠にして悉く廢荒し、復舊日の觀に非ず。後人之を修復し、亦惟茅宇を留むるのみと。此の記事頗る要を得たり、行客一たび國東半島の山壑を跋渉するものは、山河村邑凡て佛蹟ならざるなきを看取するに難からず。即兩子、文珠、千燈、靈山、西叡、鞍懸、應利の宗岳大山より、凡山丘壑に至るまで、凡そ景勝幽邃の處、佛宇を開き、佛躰を安んずるもの、其の數算ふるの煩に堪へざるを觀る。蓋し奈良朝、最も佛教の興隆を致せる時代に於て、天台密教急潮の勢ひを以て、鎮西を風靡せる際、斯の武陵桃源郷をトして、徹底的に其の勢力を扶植せるを疑はざる也。而して其の弘布流通に當りて、當時國廟として新に齋祀せられたる宇佐八幡宮に假托する處、頗る大なるものあるを觀る。六郷満山に關し、岡藩儒君山、唐橋世濟の著豊後國志は、國東郡清淨光寺の條に記して曰く、

清淨光寺在香地莊西方寺村號西方山、國前郷文殊仙、東光、神宮、岩戸、成佛、行入、武藏郷、兩子、護國、寶命、安岐郷、東光、清岩、田染郷、傳乘、來繩郷、報恩、神宮、高山、智恩、伊美郷、千燈、都甲莊、天念、長安、道脇、眞玉莊、多門、無動、應曆、白野莊、靈山、香地莊、清淨光及合速見郡山、香郷、津波、戸山水月寺、豊前國宇佐郡、弗津部郷、有後山、金剛寺、吉水山、靈龜寺、爲



是即ち六郷山本寺目録に謂ふ序分本山八山、正宗分中山十山、流通分末山十山通計二十八寺なり。而して舊田染郷真木村藤原軍右衛門藏する所の六郷山本山末山本記には、左記の如く、本中末山二十八箇寺の外、其の末寺百四箇寺合計百三十二箇寺を擧げたり。但し所在地は編者の註に係る。

序分本山八山

- 有後山 金剛寺 六郷山入峰觸本所
- 吉水山 靈龜寺 宇佐郡弗津部郷 今の天津村
- 大折山 報恩寺 宇佐郡弗津部郷 今の天津村
- 鞍懸山 神宮寺 來繩郷 今の高田町來繩
- 津波戸山 水月寺 來繩郷 今の河内村奥島
- 西叡山 高山寺 速見郡山香郷 今の立石町向野
- 良薬山 智恩寺 田染郷 今の田染村横嶺
- 馬城山 傳乘寺 來繩郷 今の高田町大字鼎
- 馬城山 傳乘寺 田染郷 今の田染村大字真木
- 本山末寺 辻小野山西明寺 今熊山胎藏寺 今の田
- 今熊山胎藏寺 田 西蓮山間戸寺上
- 田原山

- 海見山來迎寺 不思議原山 久良成寺 今の速見郡 東山香村が 清瀧寺 日野山岩脇寺 田染村
- 小武寺 速見郡東山香村 東光寺 寶珠坊 田染村 正光寺 良醫山西山寺 上御所 中津尾
- 山觀音寺 菊山御堂 田染村 小溪山大谷寺 伊多井妙見 河邊野石龜 大日岩
- 屋 普賢岩屋 最勝岩屋 華鼻岩屋 妙見寺 轆轤山聖光寺 華井岩屋
- 妙音寺 蓮華山富貴寺 田染村 文傳寺 朝日岩屋 同上 夕月岩屋 同上 妙禪坊 速見郡立石町
- 五佛岩屋 稻積山慈恩寺 田染村 光明寺 隨求坊 田染村 雁目山愛敬寺 拂地藏
- 中御門 下御門本尊地藏 隨願寺 田染村

正宗分中山十山

- 足曳山 兩子寺 武藏郷 今の西武藏村
- 長岩屋山 天念寺 六郷山座主寺
- 金剛山 長安寺 六郷峰入先達所法頭
- 加禮川山 道脇寺 都甲莊 今都甲村
- 久末山 護國寺 都甲莊 今都甲村
- 黒土山 本末坊 六郷山大政所 國志に多聞 寺と書す
- 黒土山 本末坊 真玉莊 今の上真玉村
- 小岩屋山 無動寺 満山記録所
- 小岩屋山 無動寺 真玉莊 今の上真玉村



大岩屋山 應曆寺

眞玉莊  
今の上眞玉村

補陀洛山 千燈寺 六郷山無常道師所

伊美郷  
今の上伊美村

横城山 東光寺

安岐郷  
今の奈狩江村

中山末寺 拂地藏 宇和堂觀音 毘沙門堂 天滿坊 付屬寺 峰觀寺 走

水觀音 小兩子岩屋 龍門岩屋 山口觀音 玉井山光明寺 多福院 赤松

壽福寺 白野村  
山島 吉水山萬福寺 間簾岩屋 后岩屋 藥師堂 石堂岩屋 拂岩

屋 唐溪山 彌勒寺 光明寺 四里付岩屋 毘沙門多寶院 五智岩屋 東國郡

伊美村 大不動岩屋 小不動岩屋 胎藏寺 東國東郡  
熊毛付 成滿寺 普賢岩屋 平等寺

眞覺寺 丸小野寺 東國東郡  
中武藏村 世度田山 東國東郡  
西安岐村 成久山 同上 内迫御堂 次郎丸

御堂

流通分末山十山

見地山 東光寺

國前郷  
今の東國東郡上國崎村

大嶽山 神宮寺 滿山神社總別當所

國前郷  
同上豊崎村

石立山 岩戸寺

國前郷  
同上來浦村

峩眉山 文殊仙寺

國前郷  
同上富來町

夷山 靈山寺

白野莊  
今の三重村

小城山 寶命寺

武藏郷  
東國東郡武藏町

龍華山 成佛寺

國前郷  
同上上國崎村

參社山 行入寺

國前郷  
同上豊崎村

西方山 清淨光寺

香地莊  
同上竹田津町

懸樋山 清岩寺

安岐郷  
同上西安岐村

末山末寺 普賢石龕 輿岩屋 經ノ岩屋 瀧本岩屋 三十佛岩屋 西裏岩

屋 調子岩屋 金剛山大日寺 上品寺 師子岩屋 毘沙門岩屋 万徳寺

赤子岩屋 今夷岩屋 焼尾岩屋 願成就寺 速見郡藤  
原村赤松 虚空藏寺 帝釋寺 淨

土寺 金剛山報恩寺 東國東郡  
中武藏村 金剛寺 吉祥寺 帝釋天岩屋 貴福寺 本光

寺 杉山瑠璃光寺 東國東郡  
西武藏村

仁聞律師

仁聞律師の來由に就いては、古來疑を挾むもの尠からず、豊鐘善鳴録の編者僧密雲すら、六郷山記載する所、悉く信す可らずと謂ひて、年歴の錯誤を指摘し、豊後國志の著者唐橋世濟は、國志國東郡仙釋の項に、千燈寺記、仁聞の來由を詳説するも、年歴



事蹟頗る不經、取る可らずと説き、文學博士濱田耕作青陵も亦、富貴寺繪葉書小解に於て、仁聞の事蹟は直に信じ難きものあるのみならず云々と記せり。或は架空假托の人物に非ずやと説く者あり。豊鐘善鳴録仁聞菩薩傳に曰く、

仁聞菩薩者八幡大神之應化也、風度高莊、神力卓越、世莫測其來由、初請法蓮和尚于御許山、剃度受戒、尋遊竺漢、親奉佛教、偶因大神之勅、號仁聞、時宇佐神官猶豫、以爲與大神異乎、因令大卜闕之、則三灼皆吉、以故知其實同矣、聞一時往馬城峰南、頗宵坐般陀、研精禪觀、忽得悉地、自言我今成正覺矣、其所坐石名曰正覺石嘗與華嚴覺滿、體能、行滿、友善、時人稱之曰五大德、養老初聞遊化國東六郷之間、開闢靈場二十八所、即金剛靈龜報恩神宮、水月高山知恩傳乘兩嶽、岩戸交珠仙清淨光靈仙寶命成佛行入清嚴是也總名曰六郷山、且手自雕刻諸聖之像、安諸

各處、都計六萬九千餘、蓋崇法華之品目字數也、聞有時在津波戸山窟、與嚴滿能行書寫法華、因以筆管祝巖、則清水湧出、用備研墨、至今旱潦弗渝、聞又率嚴滿等、登伊美五智窟、行不動法、時東北海龍王、欽仰其德、獻燈一千許、緣其靈應、寺名千燈、其號補陀洛山者、以安千手眼像也、某年十月念六日、於千燈之窟、封燈以三楞石、聞靈異頗多、厭繁略此

宛として是一篇の神話なり、善鳴録の「世其の來由を測る莫し」と謂ふもの、彷彿とし

て架空假托の跡あるを認む。八幡大神の應化なりと謂ひ、又大神の勅に因つて仁聞と號すと謂ふもの、國廟宇佐八幡の神異を假りて、密教弘傳に利用したる巧智尋常人の企て及ぶ所に非ず、所謂神佛習合なり。宇佐八幡宮は、元明天皇和銅五年の創開に係り、當時朝野の崇敬渥かりしは言ふまでもなし。西陲の地、上國の船舶直ちに到るの地は、則國東半島なり。山紫水明、森樹蔚蔚として、密教弘傳の靈域に適する境地、滿郷皆是なり、周流漫遊を好むの緇徒、偶々此の地に來りて、安住棲遲の意動くこと切なり。加ふるに隣接數里の地に、國廟宇佐八幡宮あり、假りて以て、自家藥籠中の物となし、布教宣傳に便せむが爲め、一面所在佛宇精舍を營むと共に、此に仁聞てふ一神異人を檢出し來りしに非ざるか。元亨釋書に曰く、六波羅密寺空也上人、諱光勝、仁明帝の孫、常康親王の子なり。薙髮して沙彌となり、自ら空也と稱す。少うして佚遊を好み、天下殆ど遍し、遇ふ所の道途爲に利濟せらる。天曆中、此の邦に遊化し、國前に於て與導寺を創め、速見八坂に利益寺を建て、並びに栖居すと。其の他速見郡藤原村願成就寺赤松妙見、同東山香村小武寺亦、空也の創する所にして、此の兩寺は、六郷山の末寺に屬せり。空也上人、皇室懿親の尊きを以て、宇佐八幡宮を標榜し、以て佛教弘傳に利する所あらむが爲、茲に六郷滿山の鴻圖を編述大成せしなら



むと観るは、必ずしも失當に非ざるべし。勿論奈良朝以來、佛教に對する保護厚かりしが爲め、地方の國司郡司、權門豪戶、競うて淨財を喜捨し、以て佛宇を營みたれば、空也上人の來錫以前、己に國東半島に、數多の佛蹟ありしを疑はず、唯だ之を編述大成して、一箇の佛教文化郷六郷滿山を築きたるは、空也上人若は夫と拮抗すべき大德智識なるべきを信ず。

備考 記録に依れば、國東郡糸永名の領主曾根崎淡路法橋廣增豊後國田縣慶増寺書すは、仁治中、富貴寺に碑を寄進し、又調宿禰つきのすね行實、仲實等多分朝臣の地方官ならむは、文中、路の大堂を修築寄進せり。奈良朝王朝時代は、更に此の時よりも、佛寺寄進の熾なりしを想像せらる。

## 第二節 神佛習合

六郷滿山の骨子は、神佛習合なり。宇佐八幡宮を中核とせる神佛習合なり。聖德太子、夙に崇佛を中心として、神儒を之に調和せむと試み、爾後識者碩德毎に之を踏襲せり。役小角えんのさか越泰澄等は、早くより神祇を以て、佛法の擁護者と倣し、我國の諸神は、佛諸天の化現なりと説き、神佛融合の一派、修驗派山伏道を開けり。藤原武智

鷹は、神託なりと稱して、氣比神社の境内に神宮寺を創立し、次で若狹比古神社にも神宮寺を建てたり。六郷滿山にも、亦二箇の神宮寺あり、豊崎村大嶽山神宮寺を以て、滿山神社總別當所となせるは、神佛習合の痕跡最も顯著なる一例證とすべし。

聖武天皇神龜二年には、宇佐八幡大神の託宣なりと稱し、藥師、彌勒の二佛を其の本尊と爲し、境内に寺院を造り、佛像を安置す。當時僧行基は、天照皇大神の御心なりとて、東大寺を建立し、大佛を鑄、天照皇大神の本地は、大日如來なりと云へり。所謂本地垂跡説なり。此の大佛開眼の際には、宇佐八幡大神の隨喜と稱して、其の分靈を東大寺に遷し、鎮守となせり。

桓武天皇の延暦十三年には、宇佐宗像、阿蘇の三社に於て讀經し、三神の爲に僧七人を度せり。日本天台宗の開祖傳教大師は、延暦四年日枝の山山比叡に上り、草庵を結びて讀經し、其の七年山上に一乘止觀院を創立し、二十三年入唐し、歸朝の後、支那天台山々王明神の示現と稱し、日枝の山即比叡山に、古來祀れる大山昨命即ち日枝神を、山王權現と稱し、本地は釋迦如來なりと倣し、以て天台法華の鎮守となせり。又宇佐香春兩神社に於て、神託を受けたりと稱して、法華經を講ず。爾後天台の僧侶は、盛んに本地垂跡説を傳ふ。所謂山王一實神道是なり。



六郷満山は、序分本山の筆頭、宇佐郡天津村の有後山金剛寺を以て、六郷山入峰觸本所とし、又正宗分中山、東都甲村金剛山長安寺を以て、六郷入峰先達所法頭と爲せり。是明かに修驗派山伏道の痕跡を遺せるものにして、又以て満山が、神佛融合を理想とせる一證左とすべし。所謂峰入りは修驗派山伏が往時より慣行せる行事にして、故老の語る所に據れば、峰入りの節に至るや、白衣の道者、金剛杖衝き鳴しつゝ、先達に率ゐられ、魚貫追隨して、満山の各靈場を巡拜せしが、峰入り行者の巡拜路は、自ら先規の定まれるあり、其の行路に當れるものは、何物をも忌避するを要せじとて、間々家屋田園を損壞する弊習あり、維新後禁斷されたりと云ふ。

### 第三節 六郷満山載籍

六郷満山の由來概要、右に述ぶるが如し。今參照の爲め、諸書に現はれたる満山竝に仁間の事蹟を左に列載す。

國埼郡郷陸所、案倭名鈔所載郷名七、曰武藏、曰來繩、曰國埼、曰由染、曰阿岐、曰津守、曰伊美、蓋津守、當在大分郡中、悞混于此、若除之則是六郷也、由染當作田染、皆轉寫所致也。箋釋豊後風土記

文武天皇御宇大寶元年辛丑仁聞支那陳に入り、天台山に達し智者大師の教を傳へ、三年を経て歸る。豊鐘善鳴錄

元正養老二年戊午仁聞國東郡屋山に修業す。太宰管内志源統幸願文

養老中、宇佐八幡大菩薩人聞菩薩と顯はれ、四人の同行と俱に、七十餘年佛法を修行し、其の後又七十餘年正月十三日靈山寺を開く。八幡宇佐宮御託宣集王卷十四靈山寺部

人聞菩薩御許山に於て修行の時、硯の水なきより、筆管を以て之を指せば、靈水忽ち出づ。八幡宇佐宮御託宣集自卷裏書

八幡大菩薩、前身に於て人聞菩薩となり、八十餘年佛法を修行し給ふ。石清水文書の五仁平二年の

聖武天皇神龜元年甲子宇佐八幡宮託宣あり。次て法蓮勅命により上洛す。下向の後、五人の同行一味同心放生會を修す。而して五人の内、宇佐八幡大菩薩は、小倉山に移住して彌勒菩薩を崇め、法蓮和尚は山本に於て、虚空藏菩薩を崇め、華嚴は郡頼に於て、如意輪菩薩を崇め、覺滿は來繩郷に於て、藥王菩薩を崇め、體能は六郷山に於て、藥師如來を崇め、各々伽藍を建立す。八幡宇佐宮御託宣集靈卷五 二條天皇應保貳年、六郷満山貳拾八本寺目錄成る。當時の末寺は左の如し。通



して六十五箇寺とす。

一五〇

本山分末寺十八箇寺 辻小野山西明寺 小溪山大谷寺 西蓮山間戸寺 中津  
尾山觀音寺 輓轡山正光寺 妙覺寺 海見山來迎寺 蓮花山富貴寺 清瀧  
寺 文傳寺 良醫山西山寺 稻積山慈恩寺 日野山岩脇寺 雁目山愛敬寺  
今熊山胎藏寺 光明寺 寶壽房 隨求房  
中山分末寺十一箇寺 大滿房 付屬寺 玉井山光明寺 吉水山萬福寺 多福  
院 光明寺 唐溪山彌勒寺 毘沙門多寶院 丸小野寺 平等寺 眞覺寺  
末山分末寺八箇寺 上品寺 願成就寺 虚空藏寺 淨土寺 金剛山報恩寺  
吉祥寺 貴福寺 杉山瑠璃光寺

#### 第四節 西叡山高山寺

高山寺は、田染村大字横峰に在り。西叡山の頂上今猶石祠を存すと云ふ。豊後國志に云ふ、高山寺號西叡山、在來繩郷佐野村東南高山、山勢秀拔、舊有七堂伽藍、堂宇壯嚴、今廢、礎石尙存と。洛の叡山、武州東叡山と竝稱して、日本三叡山の一に居り、其の開創最も古く、盛時の壯觀想ふべし。六郷滿山灌頂所にして、序分本山八山中重

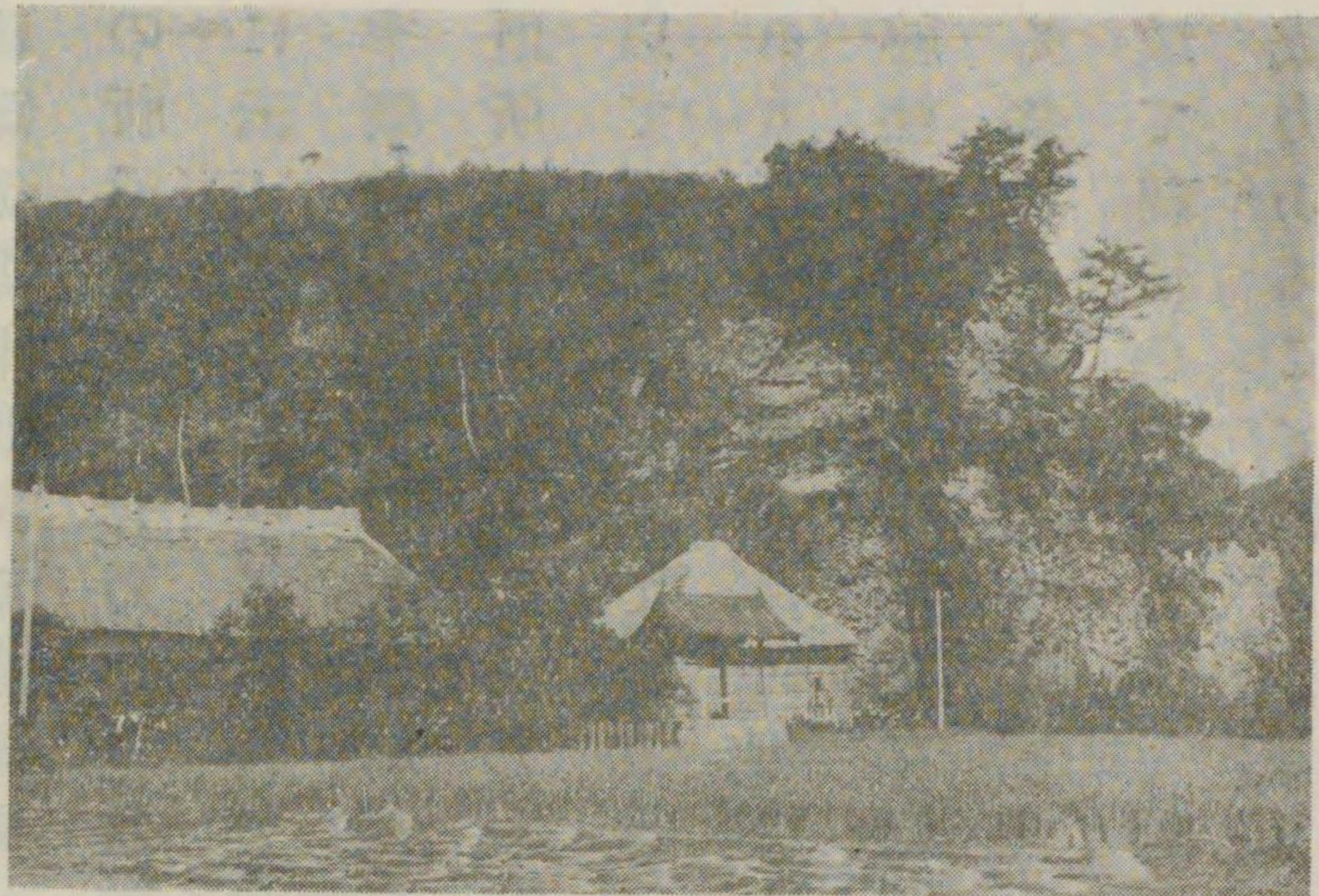
要の位置に在り。弘安七年甲申參月二十五日、將軍の教書に基き、同年九月、高山寺を首め、傳乘寺、富貴寺、間戸寺、岩脇寺、胎藏寺、慈恩寺、西蓮寺等は、異國降伏祈禱の卷數目錄を上申し、又正應四年辛卯三月八日、六郷山各寺は、將軍の教書に依り、異國降伏の祈禱を爲し、毎月其の卷數を上申すべき旨を達せらる。六郷山諸勤行注進目錄に云ふ、年中勤修正月八日會、正月八日勤之日次勤、初後入室、讀誦經典、於六所權現御寶前、二季祭五節供等、今始御祈禱、長日藥師經十二卷、同仁王經講讀と。以て其の祈禱所、灌頂所として重せられしを觀るべし。蓋灌頂は、天竺の國王即位の時、四大海の水を以て頂に灌ぎ、以て祝意を表するに始まり、所謂二種灌頂に傳教灌頂竝に結緣灌頂あり。傳教灌頂、一に傳法灌頂、又受職灌頂と曰ひ、如法に行を積みたる人に對して、祕法を傳授し、阿闍利の職位を紹がしむるを云ふ。結緣灌頂は、唯佛縁を結ばしむる爲に、一般の人を灌頂壇に導き、花を投せしめて、其尊の印眞言を授くるに止まり、敢て祕法の授受なし。即ち灌頂所は、僧職を授くる實權を握れるものなれば、其の威力あること略々想像すべし。本尊は七佛藥師如來、觀世音菩薩、及び六所權現なりきと云ふ。傳説に曰く、應神天皇の十六年丁巳、帝西叡山に行幸し給ふ。時に巖壁より白狐白狸現はる、帝深く之を喜ぶと。今其の巖を八幡宮の御座石と云ひ、本



地彌陀觀音、六所權現結縁の姿を現したる處を、戸無ノ岩屋と稱す。什寶に左の三點あり、日野山岩脇寺に藏す。

金幣大一本 小一本 六所權現灌頂幣  
鏡獻唐鏡 施主 田原大野 文政十一年子七月と記す

### 第五節 日野山岩脇寺



寺 脇 岩 山 野 日

岩脇寺も亦、六郷山本山分末寺の一にして、田染村大字嶺崎に在り。六郷山定額院主目錄に云ふ、岩脇寺正等院、徒六房有之と。天明年中の寺院名簿に、田染郷横峰村日野山岩脇寺、島原領、山門末、一本尊不動十二尺、天神、今宮、一、奥院岩屋、一、六所權現、一、高山六所權現岩脇寺預、一、高山堂正觀音 同斷、一、本堂阿彌陀、觀音、十王、岩脇寺末寺喜福寺在同村云々とあり。其の高山寺と關する所深く、且つ往時盛觀を極めしを想はしむ。一に曰ふ、岩脇寺は天台宗にして、延暦寺の直末なり。元正天皇の御宇、養老三年、僧仁聞中興の業を全うし、七堂伽藍、絢

爛として異彩を放ち、佛像經卷を藏すること夥多なりしも、其の後漸次衰廢し、天正拾四年、薩軍の兵火に罹りて、堂塔凡て烏有に歸す。寛永元年、淨眼和尚、衆庶の喜捐に依り、再興を企圖せしも、僅かに雨露を凌ぐに過ぎず、降りて寛永五年癸丑三月、寂昭和尙、島原城主松平忠頌に乞ひ、再建の工を竣る。現存の本堂竝に大講堂即ち是なり。寺院明細帳の示す所左の如し。

一、境内敷地壹反壹畝八歩 一、本堂十二間、奥行五間 一、大講堂四間四方 一、本尊佛 一、本尊藥師如來 一、不動明王日天子 月天子  
什寶として高山寺の灌頂幣、金幣大小二本、及鏡一面を藏す。現任職は郷司賢隆なり。

### 第六節 寶珠山龍泉寺

龍泉寺は、田染村宇横峰に在り。臨濟宗東福寺派に屬す。田原備後守親昌の發心開起する所にして、當庵堅山和尚、廣彌禪師を開山とす。禪師は應永廿七年庚子二月二日示寂し、田原親昌は同卅三年丙午九月九日を以て歿す。謚して寶珠院殿獨峰忠戰大居士と曰ふ。尋いで瑚琳和尚を中興の開祖とし、文政四年辛巳當寺を再興す。天保六年乙未七月十二日示寂す。境内貳百七十一坪、本堂兼庫裡間口七間 奥行四間及び鐘樓一棟を有す。現任職は安養寺永松大龍之を兼ぬ。寺畔田原幸市の所有



地に田原家歴世の墳墓あり。其の後裔、一基の碑を建て、之を標す。辭に曰く、  
當城北、樹中有祖先之古墳數多、田尾山下亦古墳疊々、皆五輪塔、幾百年之歲月、文字

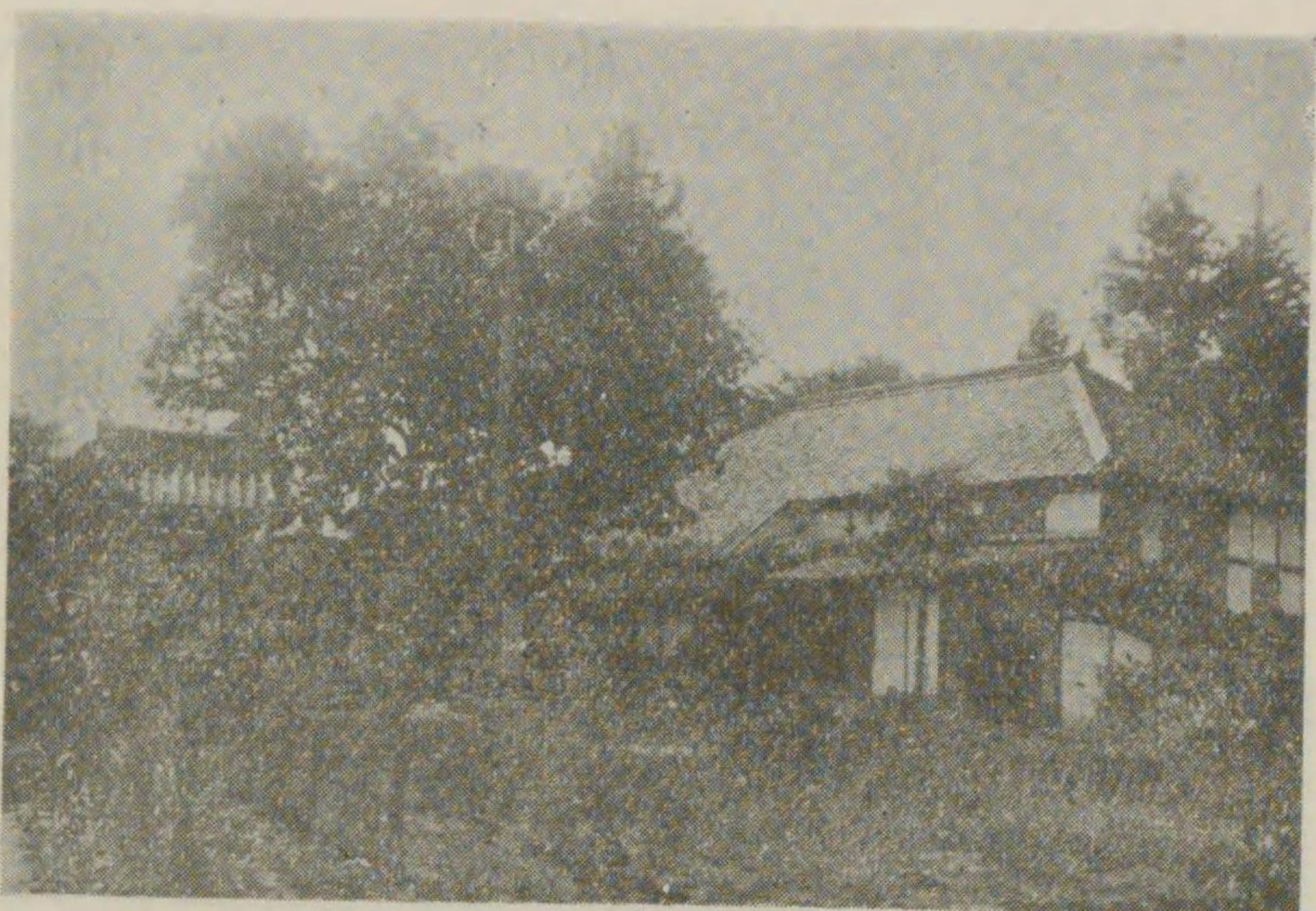
磨滅、一々不能明別之、公之戰死於一戸矣、時其骸骨  
埋于其地矣、又系能知存此祖先疊々之墳中矣、依今  
與同流相謀、以茲建之

田原文廸親愛 田原俊造親雄 田原德助親恒

田原廣助親景 田原茂助親通 建之

寶珠山龍泉寺  
一説に云ふ、當山の開基は小田原氏にして、舜岩正隨  
禪徳と稱し、小田原少右衛門鎮次、正隨に養はれて第  
二世の法燈を紹ぎ、子孫連綿たりと。

### 第七節 光隆山延壽寺

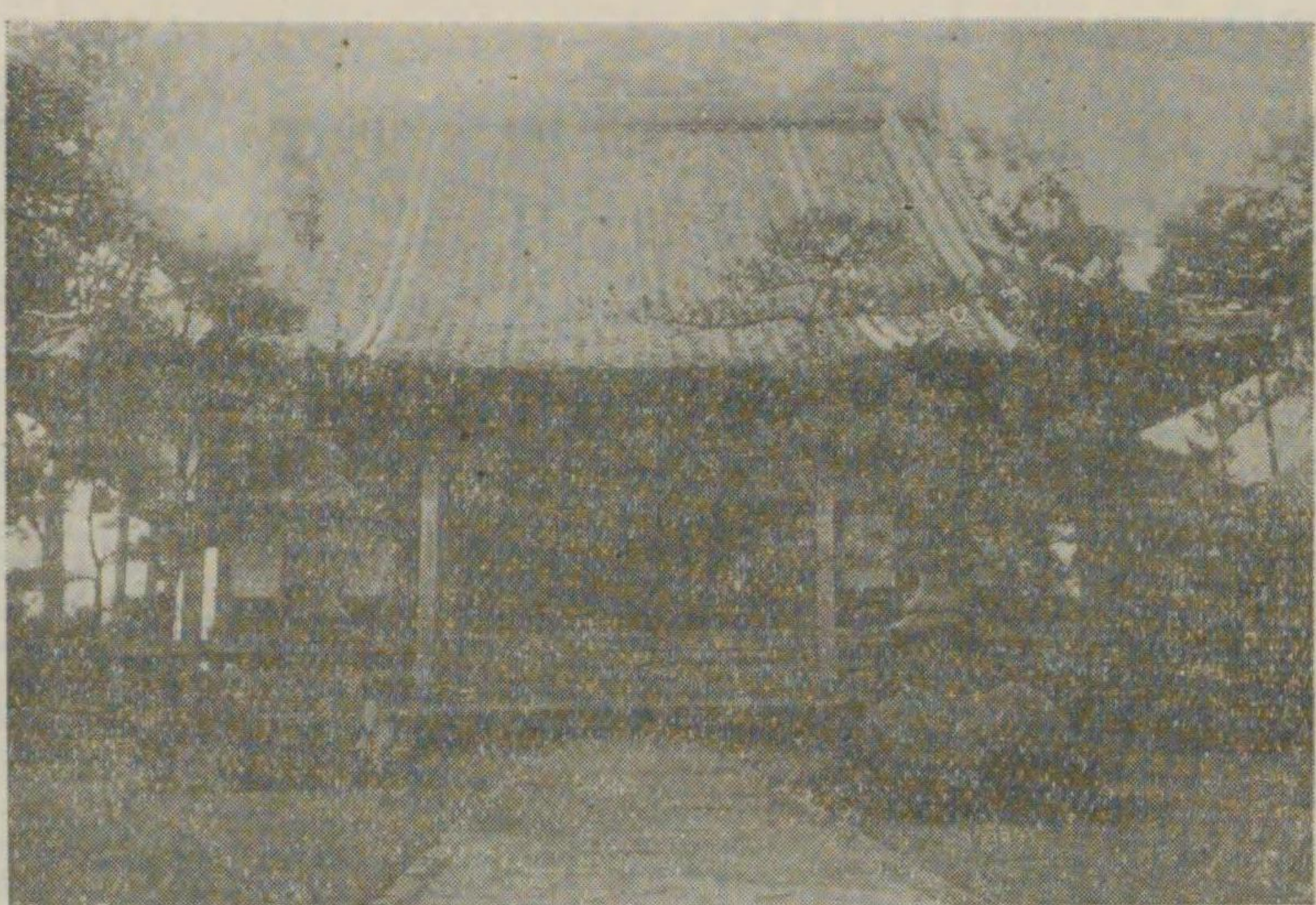


延壽寺は、田染村大字嶺崎字小崎に在り。境内宏潤、山門雄偉にして、村内有數の  
靈域なり。真宗本派本願寺に屬す。寺域三反三畝二十七步、本堂七間庫裡、間口十一間  
奥行五間三尺

鐘樓及び山門を有す。境内に堂宇あり、間戸の阿彌堂及び小崎川原より移せる阿  
彌陀佛、竝に觀世音菩薩の像を安置せり。本寺所藏の記録に依れば、當寺開山は吉

田城主吉田重勝に出づ。清和源氏十代の後胤源義  
氏の二男泰氏日州に住し、伊東氏の權柄たり。其の  
裔吉田重勝の二男主馬介重清、大谷に登り、淨土真宗  
に歸依し、法名を順西と號す。學成りて山陽より豊  
後に游化し、終に田染郷相原村に留錫し、一字を營み  
て六字名號を掲ぐ、稱して櫻畑道場と曰ふ。後故あ  
りて牧城主古庄右馬介孝隆の女と婚し、貳女三男を  
生む。季子明圓聰明俊逸にして、遂く真宗の淵源を  
究め、遠近其の徳に歸す。時に偶々田染左近將監、公

武の命に依りて宇佐本宮に出任す。明圓乃ち代り  
て大藪に住し、大いに宗風を振揚す。是即ち光隆山



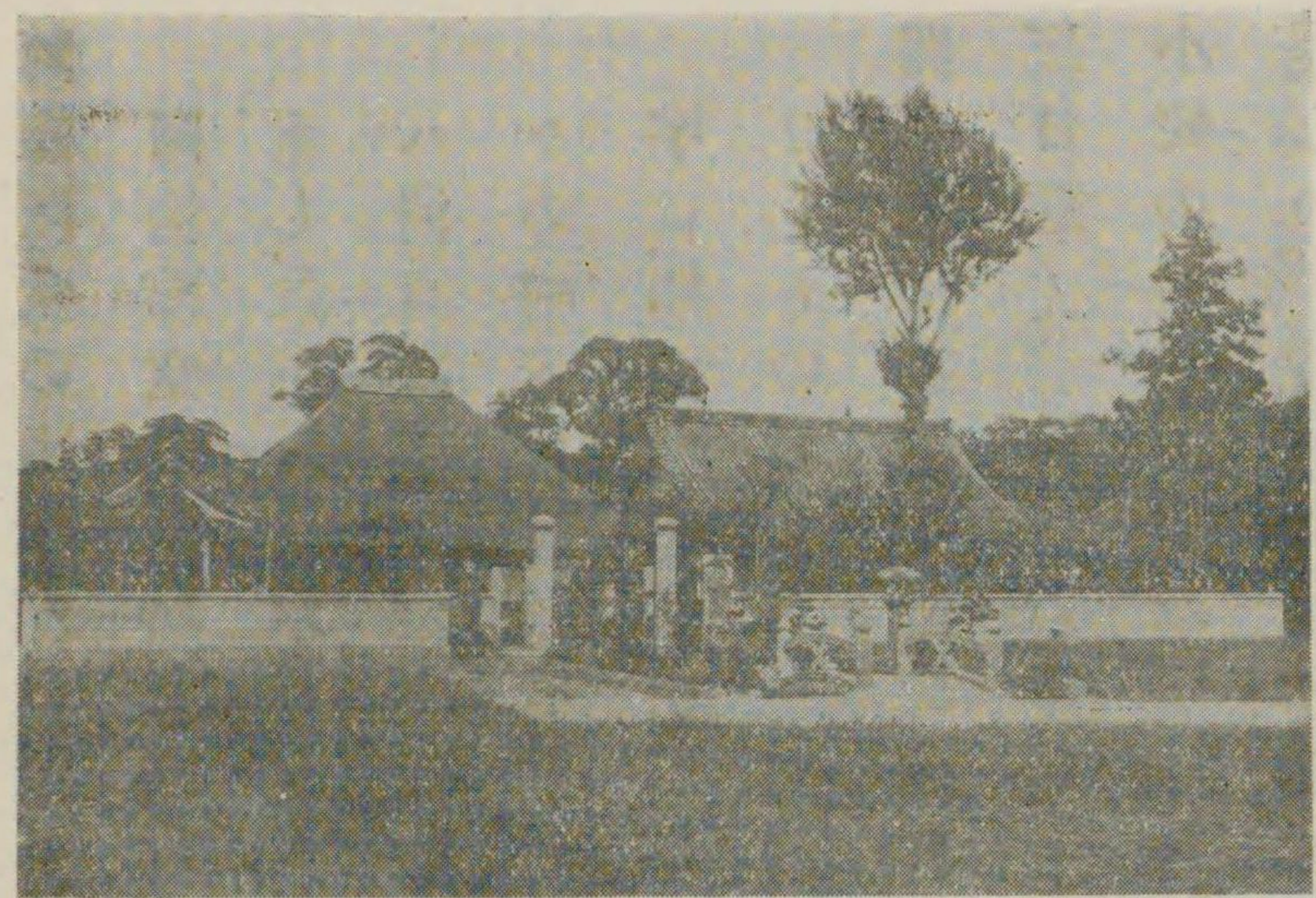
延壽寺の濫觴なり。後今の處に精舎を營み、以て現住職第十世秀範に至る。同寺  
第五世權律師宗歡の錄せる緣起書左の如し。



抑釋當山開闢由來、源氏嫡流義氏後胤吉田城主重勝二男主馬之介登大谷、而授淨土真教、涉獵經釋一十餘歲、于茲負笈山陽、普化一切一刺、群萌猶靡大悲之風、猿猴凡衆、無不翫本願之月、然偶駕一葉、揚帆六々之灘、至吾豐州、頭陀行化、廣施本願醍醐之藥、多治無明淵源之病、普勸有緣、使稱名號、無間無餘、人悉景慕師德、悌永垂化於此、仍之卸笠西叡之下、卓錫相原幽里、創建一字、安置法身嘉號櫻畑道場云々同緣爰熟約古城馬城邑在東光山之間、遂生二女三男、季子明圓聰明俊逸、盡宗源底于時順西八十六歲寬永十四丑歲八月十四日入寂古城右馬之介與弟和一填竝塔在馬城邑光隆山延壽寺、於是乎始開焉、真俗宗風充叢林、動台嶺、豈不如來善巧權化方便乎、此有宇佐宮大臣田染氏者、住于大蘭于時左近將監云々奉公武之命、移館本宮、晦迹大許嶺下、當此時、遮那月朗兮、曾無觀者、妙法華鮮兮、未有賞者、於是明圓轉獅子吼、坐於大蘭、自爾已還、佛日照耀、破生死長夜闇、生胸闡提齋回心、無不歸、嗚呼、誠是彌陀覺王善巧、不可稱、不可免、不可思議、絕對不二、威德廣大力也乎、敬白今日道場來會念佛行者等、歸彌陀招喚、仰釋迦發遣、隨順高祖聖人真教、深可信斯、特可崇斯、偕以西天人鑑機、授法大神、亦歸本據、留託宣、宜哉本迹二門、神佛揆一、和光緣熟、成道化周、然則名之稱威德廣大、蘭不亦可哉、欽白々々、傳系繁冗、甚難以讀、故削古文、以略叙云爾、惟時嘉永第二己酉曆仲秋中旬第三日、彌天順西五世孫權律師宗歡、第六

世現住沙門法劍宗明嚴父權律師前延壽寺慧上、誌之者也

### 第八節 寶池山安養寺



安養寺は、田染村大字真中字戸原に在り。境域縣道に沿ひ田染川に枕み、交通便にして、而も熱鬧ならず。門頭架するに石橋を以てし、地藏尊を安置せり。

臨濟宗東福寺派に屬し、本堂間口六間半庫裡間口六間阿彌堂間口一間三尺鐘樓を有す。南北朝の末季、明徳年中、邑の豪族河野四郎越智通勝の長子兵庫之助ハチ道全ハチ發願して地を此に相し、堂塔伽藍を創剏す。東福寺開山國師の法孫、豊山正義禪師を屈請して開祖とし、皇風永扇、國家平安、五穀豐登、萬民和樂の祈願道場となす。天正兵亂以降、時に無住となりしも、法系連綿今に傳はれり。現在の精舎は、寛保年間、道全の裔河野通卿の再建に係る。後大破荒廢せしを、明治三十四年大修繕を加ふ。本尊正